九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— I —

1 9 7 1

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縱貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— I —

序

九州縦貫自動車道建設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査は，早くも第2年度を終えた。

この報告書は，『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 －Ⅰ－』に続くものである。

刊行にあたり，福岡教育大学波多野晥三教授はじめ川述昭人氏，考古学研究班の学生諸君，国士館大学大川清助教授はじめ考古学研究室の学生諸君，日本道路公団福岡支社，同福岡工事事務所，同久留米工事事務所，同瀬高工事事務所，各市町村教育委員会，および種々ご配慮をたまわった関係各位に深甚の謝意を表するものである。

昭和45年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　吉　久　勝　美

例　　言

Ⅰ．　本書は，九州縦貫自動車道建設事業に関連して昭和45年３月から昭和45年12月までに発掘調査を終了した５遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

Ⅱ．　調査は，日本道路公団の委託をうけて福岡県教育委員会が実施した。

Ⅲ．　本書の執筆者は，次のとおりである。

1.　栗原　和彦

2.　波多野晥三　　川述　昭人　　栗原　和彦

3.　栗原　和彦

4.　大川　　清　　栗原　和彦　　井　　博幸

5.　柳田　康雄　　副島　邦弘　　櫻井　康治

6.　副島　邦弘　　山崎　茂孝　　水城　一俊　　櫻井　康治

Ⅳ．　昭和44年度の九州縦貫道関係の調査は，主として，西谷正，柳田康雄，副島邦弘各技師および小川浩一郎主事が，昭和45年度のそれは，西谷正，栗原和彦，石山勲，酒井仁夫各技師と加藤久嘉主事があたった。なお，本書の編集は栗原和彦が担当した。

目　　次

1. はじめに …… 1
2. 扇祇古墳群 …… 5
3. 筑後川川床遺跡 …… 23
4. 鍔口古墳 …… 27
5. 大地田遺跡 …… 39
6. 年の神遺跡 …… 47

List of Plates

本文対照頁

PL. 1 (1) 扇祗古墳群の立地する丘陵（晃治撮影）…… 9
(2) 扇祗1号墳発掘前（筒井亀撮影）…… 10
(3) 扇祗2号墳発掘前（筒井撮影）…… 10
PL. 2 (1) 扇祗1号墳表土を排除した状況（晃撮影）…… 10
(2) 扇祗1号墳同上近接（晃撮影）…… 10
PL. 3 (1) 扇祗1号墳裏籠の状況（晃撮影）…… 10
(2) 扇祗1号墳同上近接（晃撮影）…… 10
PL. 4 (1) 扇祗1号墳石室抜き跡（晃撮影）…… 11
(2) 扇祗1号墳同上（晃撮影）…… 11
PL. 5 (1) 扇祗2号墳石室盗掘穴断面（川述昭人撮影）…… 18
(2) 扇祗2号墳地山と盛土（川述撮影）…… 16
PL. 6 (1) 扇祗2号墳石室抜き跡と墳丘残存状況（晃撮影）…… 18
(2) 扇祗2号墳同上近接（晃撮影）…… 18
PL. 7 (1) 扇祗2号墳石室抜き跡（晃撮影）…… 18
(2) 扇祗2号墳石室裏籠残存状況（晃撮影）…… 18
PL. 8 (1) 扇祗2号墳地山の残存状況（晃撮影）…… 16
(2) 扇祗2号墳同上近接（晃撮影）…… 13
PL. 9 扇祗1号墳出土須恵器（晃撮影）…… 13
PL. 10 (1) 扇祗1号墳出土須恵器甕（晃撮影）…… 13
(2) 扇祗2号墳出土須恵器蓋（晃撮影）…… 20
(3) 左半扇祗1号墳出土金環および鉄器，右半扇祗2号墳出土銀環および鉄器（晃撮影）……16. 21
PL. 11 (1) 筑後川川床遺跡発掘区全景（栗原和彦撮影）…… 23
(2) 筑後川川床遺跡第2トレンチ調査状況（栗原撮影）…… 26
PL. 12 鍔口古墳調査区の全望…… 27
PL. 13 (1) 鍔口古墳全景（国士館大学考古学研究室撮影）…… 29
(2) 鍔口古墳石室状況（国士館大学考古学研究室撮影）…… 36
PL. 14 (1) 鍔口古墳石室内よりの杯蓋の出土状況（国士館大学考古学研究室撮影）… 30
(2) 鍔口古墳周溝内よりの鹿の出土状況（国士館大学考古学研究室撮影）…… 30
PL. 15 (1) 鍔口古墳石室清掃後の状況（国士館大学考古学研究室撮影）…… 30
(2) 鍔口古墳北方の弥生土壙（国士館大学考古学研究室撮影）…… 31

PL. 16　鍔口古墳出土土器（国士館大学考古学研究室撮影）…… 32
PL. 17　鍔口古墳出土鉄器および石鏃（国士館大学考古学研究室撮影）…… 35
PL. 18 (1) 大地田遺跡遠景（柳田康雄撮影）…… 39
(2) 大地田遺跡調査区全景（柳田撮影）…… 42
PL. 19 (1) 大地田遺跡溝土層断面図（柳田撮影）…… 42
(2) 大地田遺跡出土遺物（柳田撮影）…… 45
PL. 20 (1) 年の神遺跡遠影（副島邦弘撮影）…… 47
(2) 年の神遺跡発掘区全景（副島撮影）…… 47
PL. 21 (1) 年の神遺跡溝状遺構（副島撮影）…… 51
(2) 年の神遺跡溝状遺構（副島撮影）…… 51

List of Figures

Fig. 1 発掘調査遺跡配置図（武陽堂作成，栗原和彦製図）…… 1
Fig. 2 古墳のある丘陵から天拝山を望む（晃治撮影）…… 9
Fig. 3 位置と環境（国土地理院地形図1：25,000，川述昭人作図）…… 9
Fig. 4 扇祇古墳群地形図（日本道路公団作成，川述製図）…… 10
Fig. 5 扇祇1号墳墳丘実測図（川述・鹿島英世・筒井亀実測，川述製図）…… 10
Fig. 6 扇祇1号墳土層図（川述・高野信行・光枝房敏・江浜明徳・重住昌志，筒井，鹿島，森本好文，浦山博子・本持登紀江・水野英美実測，川述製図）…… 10
Fig. 7 扇祇1号墳石室実測図（光枝・晃・中尾徹・筒井実測，川述製図）…… 11
Fig. 8 扇祇1号墳石室前復元図（川述作成，製図）…… 11
Fig. 9 扇祇1号墳出土土器実測図（川述・芦田博之・光枝・筒井実測，川述製図）… 13
Fig. 10 扇祇1号墳出土鉄器，金環実測図（川述実測，製図）…… 16
Fig. 11 扇祇2号墳実測図（栗原・川述実測，川述製図）…… 16
Fig. 12 扇祇2号墳地山面実測図（川述・筒井・鹿島・小沢・本持実測，川述製図）… 16
Fig. 13 扇祇2号墳土層図（川述，芦田，大石，江浜，森本・重住・鹿島・筒井・浦山実測，川述製図）…… 16
Fig. 14 扇祇2号墳石室実測図（光枝・晃・中尾・筒井実測，川述製図）…… 18
Fig. 15 扇祇2号墳石室平面復元図（川述作成，製図）…… 18
Fig. 16 扇祇2号墳出土須恵器実測図（川述・光枝実測，川述製図）…… 20
Fig. 17 扇祇2号墳出土鉄器銀環実測図（川述実測，製図）…… 21

Fig. 18 筑後川，宝満川，川床遺跡（国土地理院地形図1：25,000，田中幸夫氏の教示により栗原作成）…… 23
Fig. 19 筑後川川床遺跡地形図（日本道路公団作成，栗原製図）…… 23
Fig. 20-1 筑後川付近ボーリング土層図（日本道路公団福岡支社久留米工事々務所・日本グラウト工業株式会社作成，栗原製図）…… 25
Fig. 20-2 高良山北側付近ボーリング土層図（日本道路公団福岡支社久留米工事々務所・日本グラウト工業株式会社作成，栗原製図）…… 25
Fig. 21 第2トレンチ土層図（栗原・石山勲・樋口一成実測，栗原製図）…… 25
Fig. 22 鰐口古墳の周辺（国土地理院1：25,000，栗原作成）…… 27
Fig. 23 鰐口古墳地形図（国士館大学考古学研究室実測，製図）…… 27
Fig. 24 鰐口古墳実測図（国士館大学考古学研究室実測，製図）…… 29
Fig. 25 弥生土壙（国士館大学考古学研究室実測，製図）…… 31
Fig. 26 石散在区域実測図（国士館大学考古学研究室実測，製図）…… 31
Fig. 27 鰐口古墳出土土器実測図（国士館大学考古学研究室実測，製図）…… 32
Fig. 28 鉄器および石器実測図（国士館大学考古学研究室実測，製図）…… 35
Fig. 29 大地田遺跡位置図（国上地理院地形図1：25,000，柳田康雄作成）…… 39
Fig. 30 大地田遺跡地形図（日本道路公団作成，柳田製図）…… 42
Fig. 31 押型文土器拓影（副島邦弘作成）…… 42
Fig. 32 石器実測図（副島実測，製図）…… 43
Fig. 33 調査地域平面図（桜井康治・磯部昭憲・池辺元明実測，桜井製図）…… 44
Fig. 34 溝土層図（池辺・磯部実測，櫻井製図）…… 44
Fig. 35 土師実測図（柳田実測，製図）…… 45
Fig. 36 青磁実測図（柳田実測，製図）…… 45
Fig. 37 土師皿実測図（柳田実測，製図）…… 45
Fig. 38 年の神遺跡の周辺（国土地理院地形図1：50,000，副島作成）…… 49
Fig. 39 柳河藩境石（副島撮影）…… 49
Fig. 40 年の神遺跡地形図（日本道路公団作成副島製図）…… 51
Fig. 41 年の神遺跡遺構配置図（副島・櫻井・水城一俊・山崎茂孝実測，櫻井縮図副島製図）…… 51
Fig. 42 溝状遺構実測図（副島・櫻井・水城・山崎実測，櫻井製図）…… 51
Fig. 43 出土遺物実測図（副島実測，櫻井製図）…… 54
Fig. 44 石鍋製作過程図（副島作成，製図）…… 55
Fig. 45 東庄内B遺跡中世火葬場址実測図転載（櫻井製図）…… 59

I はじめに

九州縦貫高速自動車道建設予定地の埋蔵文化財の発掘調査にいたるまでの経過は，昨年度の報告書にゆずることとして，ここでは，本書に掲載した5つの遺跡の発掘調査にいたるまでとその後の経過について，日時を追って若干ふれておきたい。

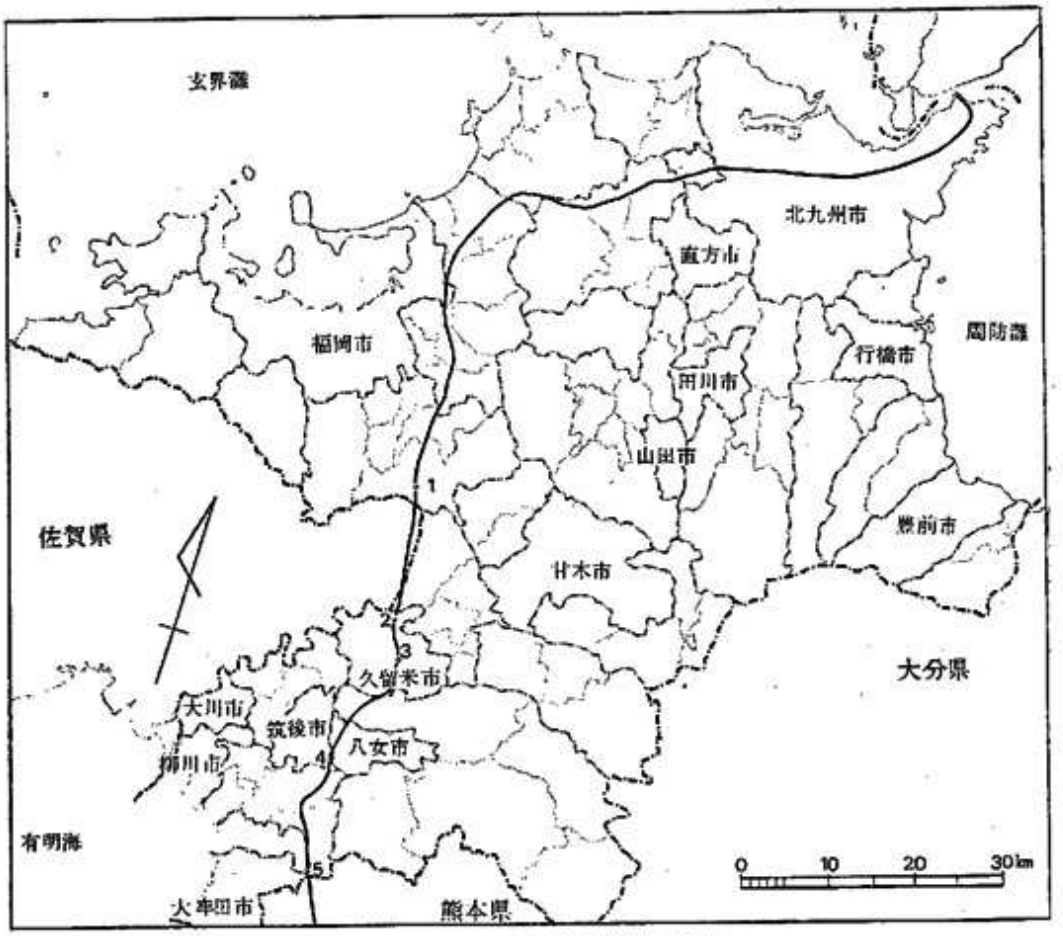


Fig. 1　発掘調査遺跡配置図（縮尺1/90万）

地図上の番号	遺　跡　名	所　在　地
1	扇祇古墳群	筑紫郡筑紫野町大字古賀字舟木
2	筑後川川底跡遺	久留米市宮ノ陣町大字大杜
3	鰐口遺跡	久留米市高良内町大字内野字鰐口
4	大地田遺跡	筑後市大字久恵字大地田
5	年の神遺跡	大牟田市大字四箇字年の神

大地田遺跡，年の神遺跡は，昭和45年3月に福岡県教育委員会が行った。調査時が年度末であったために日本道路公団福岡支社の了解のうえ，本年度分の報告書に収録することにした。

蟹口古墳は，昨年度に引きつづき久留米市所在祇園山古墳の発掘調査と併行して，国士館大学大川清助教授，同研究室の学生諸君の手によって7月8日に行なわれ，調査を終了したので報告することとなった。この遺跡の発掘調査の決定までには，当初，久留米市所在宗崎遺跡を調査する予定であったが，土地所有者との関係などで着手できず，急遽，蟹口古墳に調査を変更しなければならなかった。その間の大川助教授の寛大なご配慮と，また，日本道路公団久留米工事々務所の協力に感謝している。

9月には，筑後川の架橋工事が，10月から開始するとのことで緊急に架橋地点北岸の発掘調査を行ったが，準備不足などで調査は打ち切らなければならなかった。

扇祗古墳群2基の発掘調査は，福岡教育大学波多野皖三教授，同卒業生川述昭人氏，考古学研究班の学生諸君によって11月末から，12月いっぱいまで実施した。

以上，簡単にこれまでの経過についてふれたが，各市町村教育委員会，地元協力者の方々には，種々のご配慮ご協力をいただいた。発掘調査に関係された方々は，次のとおりである。また，最後に，調査期間，調査担当者，協力地元教育委員などを表としておいた。（栗原和彦）

発掘調査関係者

総括

教育長	吉久　勝美
教育次長	森田　実
文化課課長	杉原　信彦
文化課課長補佐	岩下　光弘
文化課課長技術補佐	渡辺　正気

庶務会計

文化課庶務係長	赤司　岩雄
文化課庶務係主事	小川浩一郎
文化課庶務係主事	加藤　久嘉

発掘調査員

福岡教育大学教授	波多野皖三
福岡教育大学卒業生	川述　昭人
国士館大学助教授	大川　清
文化課技師	西谷　正
文化課技師	栗原　和彦
文化課技師	柳田　康雄
文化課技師	石山　勲
文化課技師	酒井　仁夫
文化課技師	副島　邦弘

日本道路公団福岡支社

支社長	川崎偉志夫
副支社長	松平　肇
総務部長（前任）	後藤　真一
総務部長	白石　孔美
総務課長（前任）	森弘　一典
総務課長	内野　由夫
総務課長代理	篠原　敬幸
総務課員（前任）	本宮　邦雄

総務課員	瀬戸口寛治	総務課員（前任）	中野　敏明

同福岡工事々務所

所長	福田　隆	工務課長	星　達雄
庶務課長（前任）	図師　利幸	用地課長	岩切　弘
庶務課長	西田　建治	用地課員	豊福　正智

同久留米工事々務所

所長	北村　照喜	用地課長	石井　芳徳
庶務課長（前任）	村田　健治	用地課員	淵脇　志水
庶務課長	御竿　良彦	用地課員	小池　勝盛

同瀬高工事々務所

所長	飛永　良一	用地課員	菅　義久
庶務課長	安元　富次	用地課員	塚本　文康
用地課長	井上　一義		

久留米市教育委員会

社会教育課長	吉瀬　純一	社会教育主事	塚本　直次
社会教育係長	米田　豊	社会教育主事	樋口　一成
文化係長	半田　豊		

筑後市教育委員会

社会教育課長	下川　誠治	社会教育主事	山口　逸郎
社会教育係長	田中　和馬		

大牟田市教育委員会

社会教育課長	清田　保	社会教育主事	蓮尾甚一郎
社会教育係長	古賀　徹		

地元協力者

筑紫野町古賀	佐伯　義和	大牟田市湯谷	金子　寿人
湯町	青柳　栄一		久保　琢磨
湯町	赤崎　敏雄		
久留米市宮ノ陣			
公民館主事	溝辺　澄徹	高良内町	草場　荀次
筑後市	山口　信治		
	溝口マユミ		
	松本　一馬		

遺　跡　名	調査期間	調査担当者	調査補助員	地元教育委員会
扇状古墳群	昭和45年 11月28日 ～ 12月26日	波多野　晥　三 川　述　昭　人 栗　原　和　彦	福岡教育大学学生	筑紫野町教育委員会
筑後川川床遺跡	昭和45年 9月20日 ～ 9月26日	栗　原　和　彦 石　山　　勲		久留米市教育委員会
碧　口　遺　跡	昭和45年 7月12日 ～ 8月31日	大　川　　清 栗　原　和　彦	国士舘大学学生	久留米市教育委員会
大地田遺跡	昭和45年 3月12日 ～ 3月21日	柳　田　康　雄 副　島　邦　弘	福岡大学学生 別府大学学生	筑後市教育委員会
年の神遺跡	昭和45年 3月1日 ～ 3月10日	柳　田　康　雄 副　島　邦　弘	福岡大学学生	大牟田市教育委員会

Ⅱ 扇祇古墳群

1. はじめに

扇祇古墳群は，筑紫郡筑紫野町大字古賀字舟木にある。天拝山からのびる小丘陵の上に，西に扇祇1号墳，東に扇祇2号墳，南斜面に扇祇3号墳と分布している。

発掘調査は，昭和45年12月26日をもって終った。発掘調査員および調査に参加した学生は，次のとおりである。

調査員	主任	福岡教育大学教授	波多野晥三
		福岡教育大学卒業生	川述　昭人
		福岡県教育委員会文化課技師	栗原　和彦
調査参加学生		福岡教育大学学生	芦田博之　大石　宮　高野信行　光枝房敏 晃　治　江浜明徳　重住昌志　筒井　亀 鹿島英世　中尾　徹　浦山博子　本持登紀江 小沢純子　水野秀美　森本好文　本郷清志 竹山由美子

なお，発掘調査にあたっては，扇祇神社氏子の方々，湯町の青柳栄一氏，赤崎敏雄氏らのご協力をいただいた。（栗原和彦）

調査日誌

11月28日　まず，扇祇2号墳から墳丘を中心とした樹木の伐採を行なう。樹木の繁茂はいちじるしく伐採に骨が折れる。墳丘付近は，ほぼ終了する。

11月29日　扇祇2号墳の伐採を引き続き行なう一方，扇祇1号墳も墳丘を中心とした伐採を開始する。古墳の近くに絶対高を移動させる。

11月30日　樹木の伐採を進め，午後から扇祇2号墳の墳丘を中心とした地形実測図を100分の1で作製する。

12月1日　扇祇2号墳から掘りはじめ，扇祇1号墳の墳丘を中心とした地形測量を，100分の1で行なう。扇祇2号墳は盗掘をかなり受けており，作業としては，まず盗掘壙内の清掃からはじめる。並行して墳丘南半の表土剥ぎをはじめる。

12月2日　発掘開始後，まもなく小雨がパラつき始め，10時半頃には雨足が強まり作業を中止する。

12月3日　扇祇1号墳の地形実測図の補足を行ない，終了後，盗掘壙内の清掃を開始する。扇祇2号墳同様かなりの盗掘を受けているうえ，墳丘も半分近くは切断されている。扇祇2号墳は引き続き盗掘壙内の清掃を行なうとともに，石室の掘り方と封土の状態を調べるため，墳丘中央部に南北のトレンチ（第7トレンチ）を設定し，掘り方の一部を検出する。

12月4日　扇祇1号墳は，盗掘壙内の清掃と，墳丘北半部の表土剝ぎを行なうが，木の根が太くて作業は思うようにはかどらない。盗掘壙内攪乱土中より金環1個出土する。扇祇2号墳は，墳丘東半部の掘り方検出に努める。同時に西半部の表土剝ぎを行なうが，扇祇1号墳同様木の根が太くて骨が折れる。

12月5日　扇祇1号祇は，盗掘壙内を清掃し終り，石材の抜き跡を検出する。表土剝ぎも続行。扇祇2号墳は第7トレンチの土層図作製と写真撮影のための清掃，撮影をすませる。墳丘の表土剝ぎを続行。

12月6日　扇祇1号墳は，表土剝ぎを続行。扇祇2号墳は，掘り方の内側に裏込め部分が残っていたので，それを追求する。午後から第7トレンチ南半の土層図を作製。石室西半部の掘り方検出に努める。盗掘壙内より銀環1個出土する。

12月8日　1号墳表土剝ぎ。2号墳，墳丘土層図作製。

12月8日　扇祇1号墳は，表土剝ぎを続行し，第5トレンチを設定。第5トレンチからは，須恵器片の出土を見る。扇祇2号墳は，掘り方と裏込めを追求。

12月9日　扇祇1・2号墳とも清掃し，表土を剝いだ状態での写真撮影を行なう。扇祇1号墳は表土を剝いだ状態で墳丘実測を行なう。

12月10日　扇祇2号墳は，石室内の清掃と，第8トレンチを設定する。

12月11日　扇祇1号墳は，墳丘東部を地山面まで掘り下げることにする。封土中に礫が多数混入している。扇祇2号墳は，西半部の掘り方を追求，西北部では「コ」の字型に突出する。墳丘切断部前面左側を地山面まで掘り下げる。凹地になる所から須恵器片が少数出土。

12月12日　扇祇1号墳は，地山まで掘り下げる。扇祇2号墳は石室内部抜き跡の清掃と第8トレンチの清掃を行なう。3時半頃雨が降りはじめたため作業は中止。

12月13日　本日までの図面整理。

12月14日　扇祇1号墳は，地山まで掘り下げる。第4・5・8トレンチの土層図作製。

12月15日　第1・2・3トレンチを清掃し，土層図を作成する。

12月16日　扇祇1号墳は，封土中で石室掘り方周辺部に小さな石・やや大きめの石がまとまって出てきたので石の輪郭を出していく。

12月17日　扇祇1号墳は，石の輪郭を出す。扇祇2号墳も，昨日に続き地山の検出。

12月18日　扇祇1号墳は，写真撮影のための清掃をし，撮影を終わる。終了後実測のための割りつけを行なう。扇祇2号墳は，西北半を地山まで，掘り下げる。

12月19日　扇祇1号墳は，石室内平面図作製ならびに封土中の控え積石の実測。扇祇2号墳は，地山まで掘り上った状態の写真撮影を行ない，終了後，実測のための割りつけを行なう。

12月20日　扇祇1号墳は，石室断面図と第1・2トレンチ土層図補足，ならびに控え積石の実測。扇祇2号墳は，地山を出した状態で地形実測を20cmの等高線で作製する。石室平面図作製。

12月21日　扇祇1号墳は，控え積石の実測続行。扇祇2号墳は，石室平面・断面図作製。

12月22日　扇祇2号墳は，裏込め部を取り除いて掘り方の下端を検出する。午後は，雨のために作業を中止，遺物の整理を行なう。

12月23日　控え積石断面見通し図の作製。扇祇2号墳は，平面・断面図補足実測。遠景写真をとる。現地説明会を開く。(見学者多数)

12月24日　扇祇1号墳は，控え積石見通し図作製。扇祇2号墳は，断面と見通し図作製。

12月25日　第1・2・3トレンチ裏込め部の補足実測，控え積石の見通し図作製。トレンチの埋めもどしを行なう。

(川述昭人)

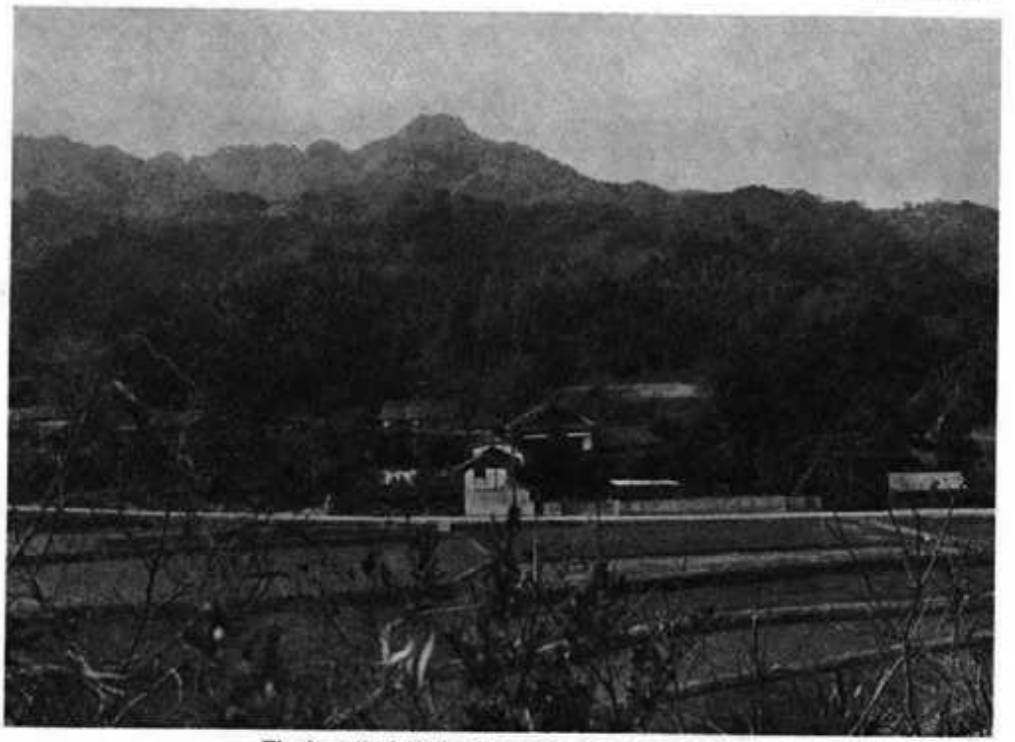


Fig.2　扇祇古墳群のある丘陵から天拝山を望む

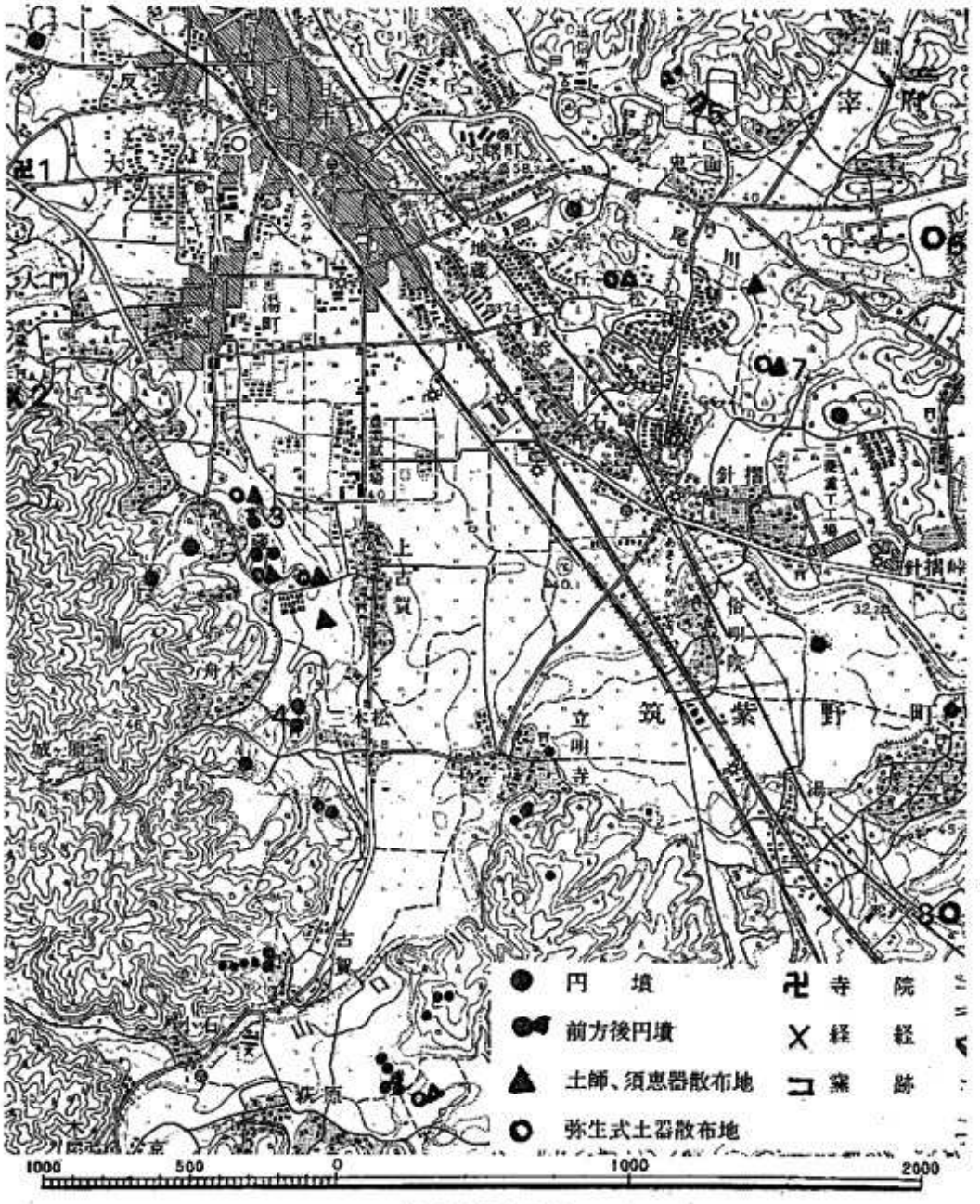


Fig. 3　位置と環境

1. 塔原廃寺　2. 武蔵寺経塚　3. 原口古墳　4. 扇紙1，2号墳
5. やつめ窯跡　6. 江牟田遺跡　7. 針摺遺跡　8. 常松遺跡

2. 位置と環境

扇祗古墳は，国鉄二日市駅から南に4㎞余の筑紫野町字三本松の部落西側の小丘上にある。この小丘は，天拝山の西南にある296 mの高地から東南に流れた尾根が東からさらに北に向きをかえてつくる山裾の一部がさらに細長く舌状台地となって平野に突出した20mの高さの小丘である。(PL. 1—1. Fig. 2)

この丘上からは，西北から東方にかけて，二日市の町並とその南方に拡がる筑紫平野を一望におさめることが出来，その背後に四王寺山・宝満山・大根地山から筑豊国境の山々を遠望することが出来る。弥生期から古墳期にかけての住民址や遺物が多数発見されて有名な針摺野黒坂遺跡や伝明院廃寺址・阿志岐野・永岡弥生遺跡など多くの遺跡が指呼の間にある。

東南から西南にかけては山口川流域に出来た山間いの狭長な平野をはさんで，標高404 mの蒙山の山麓が拡がっており，その北辺にある萩原古墳群（円墳六基）までは平野を横切って3粁を出ない距離であり，それに続く山地一帯は筑紫の地名起源に関する物語一風土記の鞍尽坂一で有名な筑肥国境の山地で，その山地には延喜式にみえる筑紫神社があり，同神社境内の筑紫古墳をはじめ，生活を自在に描写した壁画をもち貴重な五郎山古墳があり，大振山古墳群やさらには津古の前方後円墳とその周辺の古墳群が散在し，弥生遺跡もその周辺の各地に多数発見されている。

扇祗古墳の西側には天拝山塊があり，その山麓にもまた多くの古墳群がある。扇祗古墳をはさんで，南に三本松古墳（2基とも消滅）が，北には八ノ隈・鷺田山・原口（前方後円墳）・武蔵・杉塚などの諸古墳群が散在し，その間に塔原・武蔵寺・杉塚など廃寺址が点在している。さらに天拝山を越えた西側は牛頸の谷で，ここにも古墳群や須恵窯跡群がある。

こういう周囲の遺跡にかこまれたこの小丘上に35mの間隔をおいて径17～18mの円墳が二基あり，南から扇祗1号，2号墳と呼ぶことにした。2基の内1号墳は，昭和8年この丘上の南端に扇祗神社が移建される時，社地造成の工事で墳丘の南側3分の1ばかりが地上と共に削りとられたので，調査の時には社殿うらの3 mばかりの崖の上に封土を断ち切られた姿で存在した。また両墳とも既に天井部が大きく陥没していたので，天井構造は最初から調査不能の状態であることが明らかであった。調査は墳丘上の樹木の伐採や地形測量の準備が終った12月2日から始まつた。(波多野晃三)

3. 扇 祇 1 号 墳

墳 丘 (PL. 1～3. Fig. 4) 直径約17*m*の円墳である。墳丘の半分近くは，神社建築の際に削除されている。その上，墳頂部には，大きな盗掘壙をあけている。このため墳丘の高さは，不詳であるが復元高約3*m*ほどあったものと思える。墳丘は，北東にゆるやかに傾斜する舌状台地上にその基部をなし，これに版築状の封土をのせている。

まず地山面を，側壁左側では40cm，右側では60cmほど掘り込んでおり，その掘り方上端は同一レベルである。この中に石室の石材をすえ，礫まじりの土の裏込めを行なう。(Fig. 6)

石室構築に用いた石材はまったく残存していなかったが，抜き跡・石材の掘り方より，かなり大き目の石を用いていたことがうかがえる。掘り方は，浅いため石材をすえ掘り方との空間に裏込めをすると約40cmほどで掘り方上部に達し，後は，封土と裏込めをかねながら帯状に細長く版築している。このように掘り方が浅いのは，地山を掘り下げている途中で岩盤に出会ったために，あまり深く掘れなかったためであろうか。

Fig. 4 扇祇古墳群地形図（縮尺1/2000）

第1トレンチでは，地山は墳丘裾に向う途中で大きくくぼんでおり，ここに地山と水平になるように礫まじりの土などを入れ，前述のように長く互層に重ねるのである。封土は右側壁よりも高く積むわけだが，ここで注目すべきは，左側壁では封土中のほぼ中央部付近に人頭大の石を並べていることである。土層図（Fig.6—1）でみると，石のうしろには，この石を安定させるために，石の上面まで封土を積む。その後，この石と石室石材との間に土塊状に封土を積み，その封土裾から墳丘裾へとふたたび封土を積む。奥壁側掘り方内部，および外部に見える石は，左側壁のそれと比べてはるかに小さく，こぶし大のもので，ここは単にばらまいただけのもののようである。

第2トレンチでは，版築の仕方は第1トレンチの場合とは異なり，大まかなやり方であるが墳丘裾より封土を盛っていくという方法は，第1・2・3トレンチで共通する。ここでは，封土中に石を並べるということをしない。第3トレンチでは掘り方の肩より50cmほど離れた地山上に人頭大の石を裾え，この位置から内側へ裏込めしているのが見られる。封土途中には，礫まじりの土を用い，上部は礫の混じらない土を盛る。

第3トレンチでは，墳丘と地形との関係を調べるためにトレンチを延長した。その結果，地山は18mほどゆるやかに傾斜し，そこからは大きく落ち込むのが見られたが（Fig. 6--2）この部分は，堆積土でなく攪乱土であり，付近の人の話を総合すると桑畑をつくる際の開墾によるもので，本来はゆるやかに傾斜するものであった。したがって墳丘は，北東へ傾斜する台地上に立地し，72mの高さを測る台地下端より見上げると墳丘の高さに比して堂々として見える。

第4トレンチは，第3トレンチ下段のものと同じ意味で墳丘と地形との関係を調べるために設定した。（Fig.6—4）

第5トレンチは，古墳の存在を考えさせられるような形状を呈していたために設定した。これは古墳ではなく，(Fig.6—3)の5～7の層で土器片が出土した。その他の層では，少数片出土を見ており層別に分類してみたが，上下層などで同一個体を形成するものもあり，時期的にも問題はなかったので同一視した。この部分の傾斜変換線の範囲を地山面まで掘り下げてみたが何ら変化は見られず，堆積によるものと思われる。

扇谷1号墳の封土は，礫まじりの土と礫のまじらない土を交互に積んだところもあるが，一般に下方に礫まじりの土を，上方には礫の混じらない土を盛っている。

石　室　（PL.3, Fig.7—8）　石室はすでに盗掘を受けており，石室構築に使用された石材はすべて撤去されていた。床面は岩盤であり，石材を据える際の掘り方と盗掘時の抜き跡を検出し，石室プランは，ほぼつかむことができた。

石室は横穴式石室で両袖形式をとり，玄門部より開口部までは，神社建築の際，崩されて区

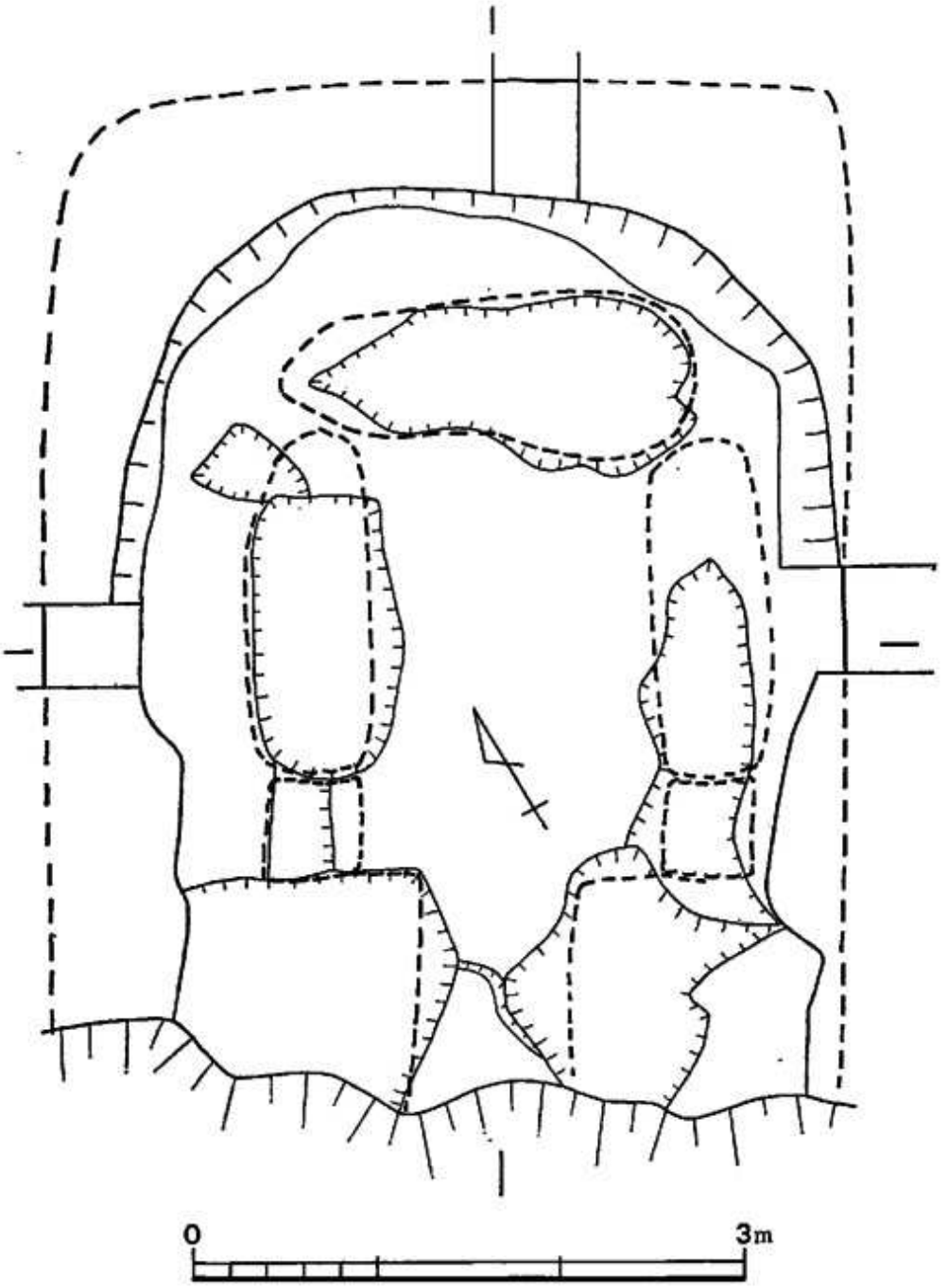


Fig. 8　扇状1号墳石室平面復元図（縮尺1/40）

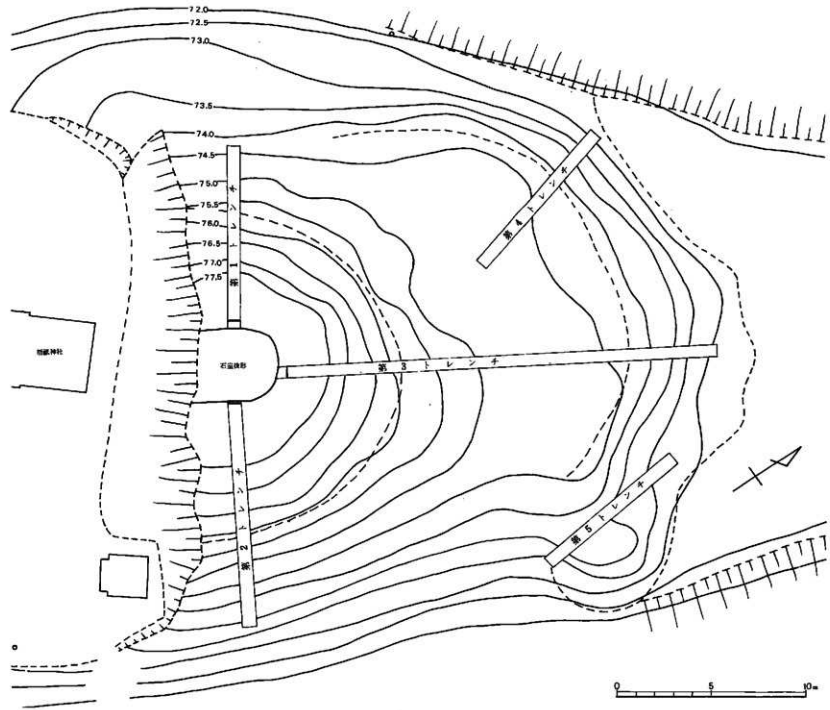


Fig. 5 扇祇1号墳墳丘実測図（縮尺1/200）

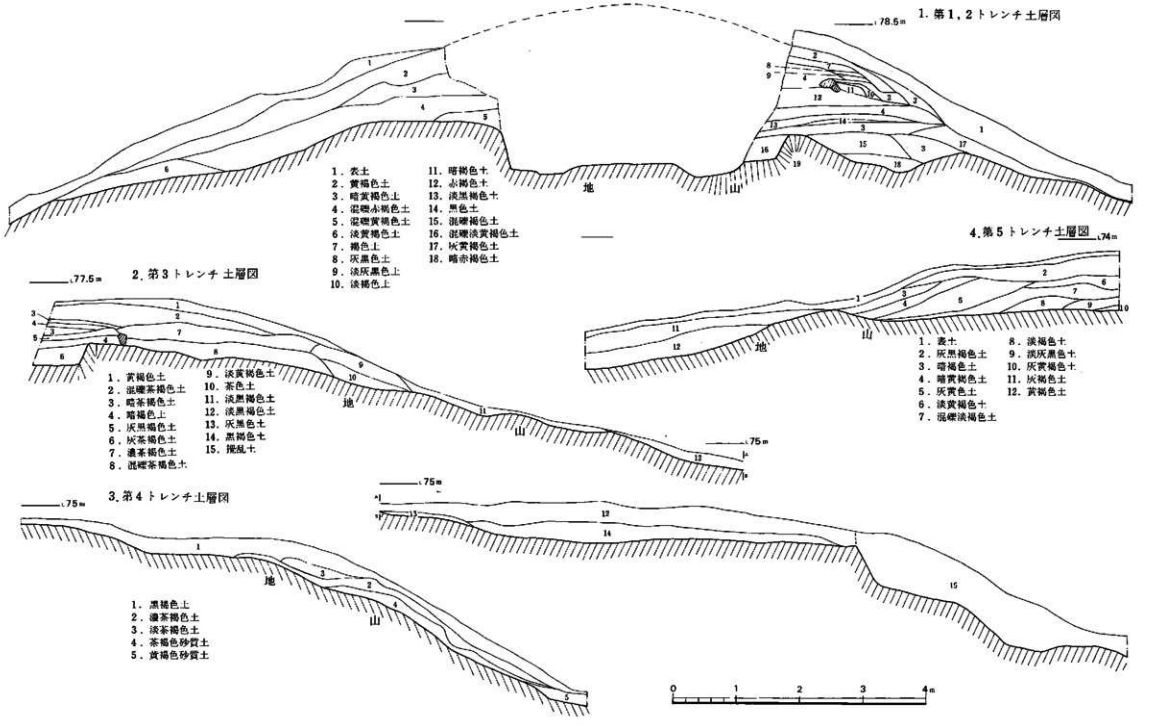


Fig. 6 扇祇１号墳土層図（縮尺１／60）

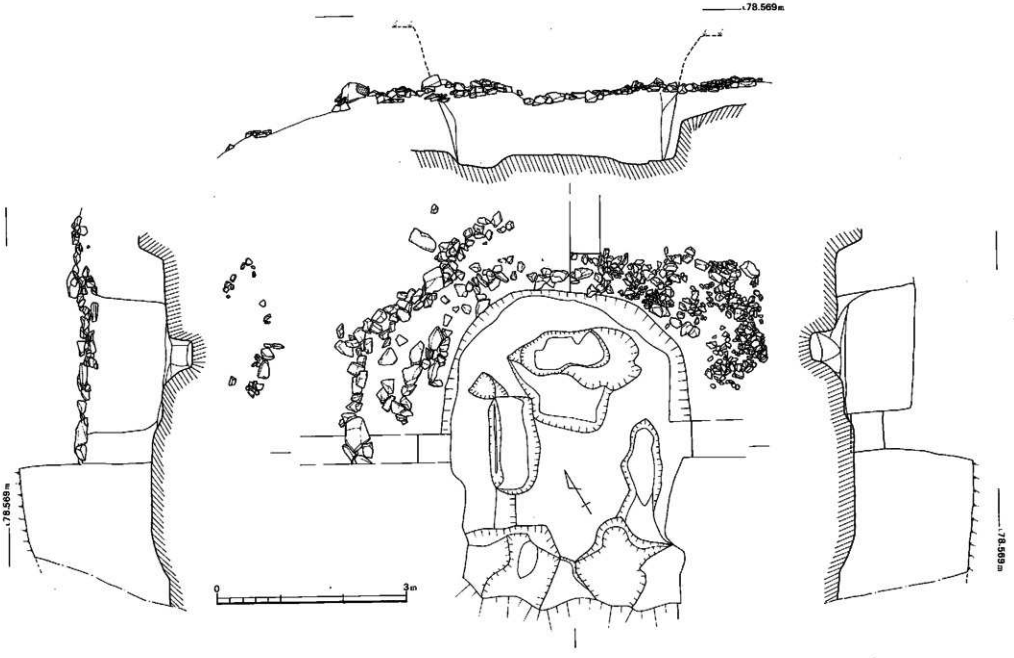


Fig. 7 扇祇１号墳石室実測図（縮尺１／60）

別はつかないが，扇谷2号墳とはほぼ同時代に築造されたものであり，同一台地上にほぼ同方向に開口することなどから単室の形態をとる可能性がある。石室の主軸は，N－30°－Eであり南南西に開口する。玄室は，主軸で玄門までの長さ2.4 *m*を測り，幅は1.6 *m*前後である。奥壁の石材は0.7 *m*×2 *m*，側壁は1.8 *m*前後の石と，0.6 *m*前後の石を2個並べていたものと思われる。

石室の掘り方は，地山面より掘り込まれており，第1・2・3トレンチで確かめただけであるが，掘り方の平面形は石室と同じく長方形を呈するものと思われる。地山より40㎝～60㎝ほど掘り込まれて床面に達し，幅は4.2 *m*を測り，主軸の長さは不明である。床面には，敷石はなかったのではないかと思われる。

出土遺物　1号墳では，石室の抜跡から若干の須恵器・耳環・刀子・鉄鏃の出土があった。この他に第5トレンチから出土した土器も，地形・石室抜の土と同じことなどから，この古墳が盗掘にあったときのものと考えられるのでここに加えた。

1.　**須恵器**　(PL. 9・10, Fig. 9)　5・7・12は，石室抜跡出土であり，他は第5トレンチ出土のものである。

杯　蓋　杯の蓋は，体部のちがいから3つに分けられた。

a類 (Fig. 9—1)　復元口径は15㎝と大きく，復元器高は4㎝～4.5㎝で，天井部を欠損している。器形は扁平な形態のものと思われ，天井部と体部の境には，一条の沈線が入る。口縁端はやや丸く仕上げられており，口縁部内側2㎜～3㎜のところにあまい稜線が入る。色調は暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

b類（2・3）　口径は12㎝と13㎝を測り，口縁部の高さ1㎝～1.3㎝のところで外側では肩が張って天井部と体部を区別しやや垂直気味に口縁端部へと続く。内側天井部と体部の境は若干くぼむ。器形は扁平な形態と思われ，ともに暗灰色で焼成は良好であり，胎土は細粒を含む。

c類（4）　口縁部の高さ8㎜のところで肩が張って，体部と天井部との境をなしており，b類より体部が短かくなる。内側体部と天井部の境にはあまい稜線が入る。口径1.5㎝，器高3.7㎝を測る。天井部は丁寧にヘラ削りされており，残りの部分は横なでをし，このため器面に凹凸がみられる。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好である。胎土は精選されず悪く多量の砂粒を含んでおり，器面はザラザラした感じになっている。砂粒の移動によりみた篦削りの方向は左廻りである。

杯　身　坏の身は，口縁の立ちあがりから4つに分けられた。

a類（7）　a類は，口縁の立ちあがりのもっとも長大なものである。復元口径は11㎝を測り，器高は3.5㎝～4㎝と思われる。器形は扁平な形態である。立ちあがりは1.2㎝を測り，太くて安定感があり，内傾しながら直線的に延びる。蓋受け部は体部からつまみ出されて，わ

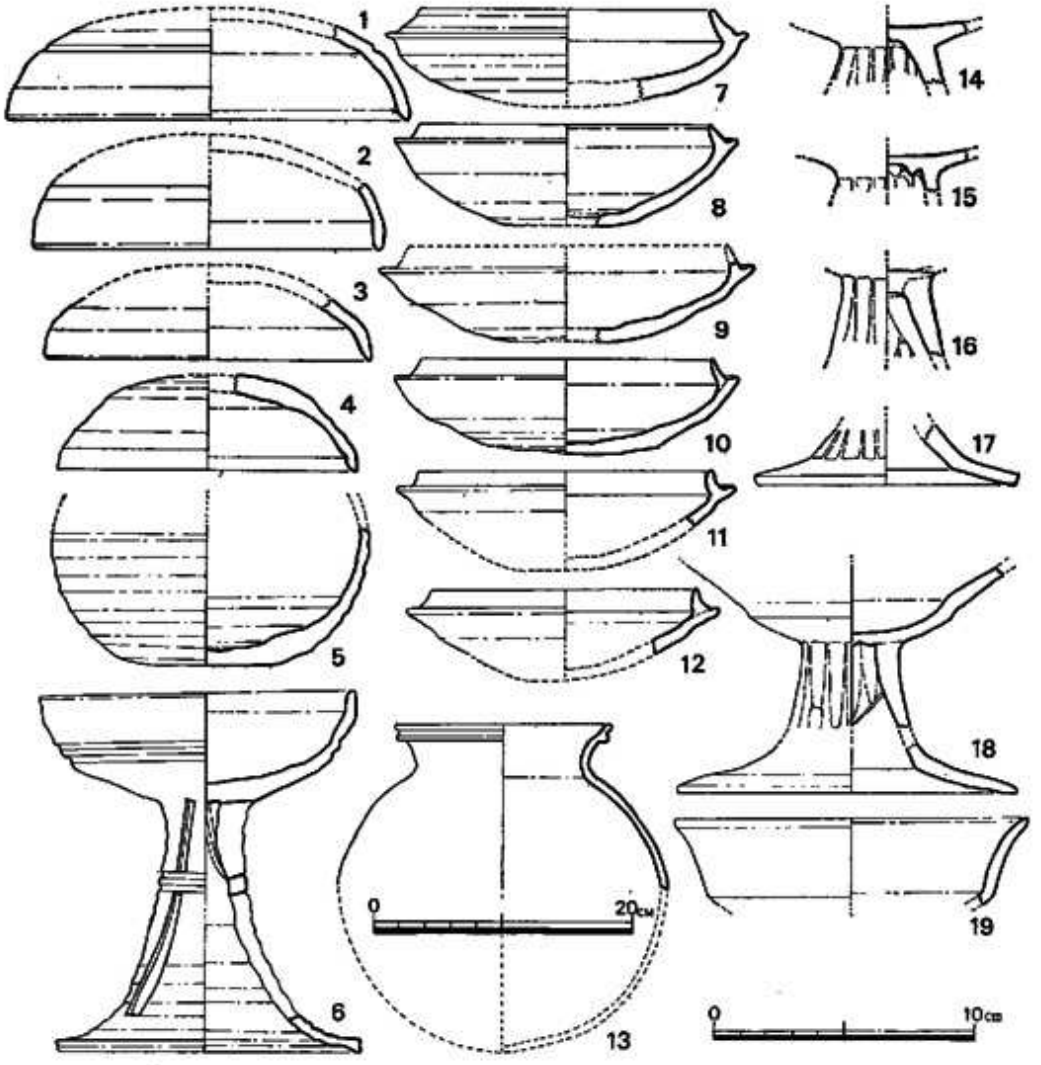


Fig. 9　扇状1号墳出土土器実測図（縮尺1/3　13のみ縮尺1/6）

ずかにつくという程度である。器壁は厚く，底部は篦削りしている。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好である。

b類（8・9）　b類は口縁の立ちあがりがaより短く，cにくらべて太いものである。8は口径12cm，9は11cmを測り，最大部径はそれぞれ14.4cm，13.2cmである。器高はともに3.9cmを測る。立ちあがりは8は欠損しているが，復元高は9と同様9mmを測り内傾する。立ちあがりと内傾斜面との境は稜線を有する。蓋受け部は落ちこみを有している。器壁はうす手作りである。色調は灰色と暗灰色を呈し，焼成は良好である。8は底部外側に篦記号を有している

c類（10）　c類はa・b類にくらべて，口縁部立ちあがりが短く，細いもので口径11.2cm

最大部径13.2cm，器高3.7cmを測り，扁平な形態である。b類との相違はたちあがりが細く，やや内傾してつくられながらも，途中からは若干立ってくる形態をとることである。底部は篦削りされており，残りの部分は横なでであり，底部外面には篦記号をもつ。色調は灰色を呈し，焼成は良好である。

d類（11・12）　d類は，口縁部が外反ぎみのもので立ちあがりは短い。11は復元口径11cm，最大部径13cm，器高は3.5cm～4cmを測る。12は口径10cmと小形になる。立ちあがりは9mm～10mmで，11は厚さを増し安定感がある。内傾してつくられる途中からカーブをかえて外湾する形態をとる。12は立ちあがり断面は直角三角形に近いような形で垂直に立つ。立ちあがりと内傾斜面との境はともに明瞭な稜線を有する。蓋受け部は11では浅いがやや幅広い溝があり，12は蓋受け部と立ちあがりの境に一条の沈線が入る。色調は暗灰色と黒灰色を呈し，焼成は良好であり，胎土には細粒を含む。

長頸壺（5）　石室内攪乱土中の出土である。底部と胴部の一部を残すのみである。底部のみ篦削りを施し，あとは横なでである。器壁内外面とも横なでの際の凹凸がいちじるしく粗雑である。胴部の器壁はうすいが，底部からは厚味を増してくる。底部内側には粘土紐の接合が観察できる。胴部下方に篦記号をもつ。灰黒色を呈し，焼成は良好であり胎土には細粒を含む。

高　杯（6）　無蓋高杯である。杯部口径12.1cm，脚端部径11.6cmを測り，わずかに杯部の方が大きい。体部には2条の沈線を配している。脚部にも2条の沈線を配しており，この上下に透孔が入る。透孔は上下3孔であり，上部のは長方形で，下部のは台形である。脚端部はかえりの退化した形態の段を有している。器高13.8cmを測る。内側脚上部はしぼり痕がみえる。器壁全体に横なでの際の凹凸がいちじるしい。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好である。胎土は精選されず，細粒を多く含み，器面はザラザラしている。杯部外面に篦記号を有する。

甕（13）　口径17cm，頸部径13.1cmを測る。頸部は短かく，外湾する。口縁部外側には沈線が入り二つの突帯をつくる。突帯の先端は稜線を有する。肩部から胴部への移行はなだらかな感じである。復元高は26cm，最大部径25cmを測る。頸部，口縁部は内外面とも横なでであり，胴部外面は平行線叩文が入り，さらにかきめ整形している。内面は同心円叩文である。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好である。

2.　土師器（Fig. 9）　いずれも第5トレンチ出土のものである。

高杯（14・15・16・17・18・19）14・15・16は杯部と脚部を若干残すのみである。3個とも外面は篦削りが明瞭に観察できるが，内面は指で押さえつけた跡が明瞭に見える。15は内面接合部は雑で凹凸がいちじるしい。赤褐色で胎土は良好である。17は，脚部下方を残すのみである。急激に折れまがって脚裾を広くしている。すべて直線的な形態である。脚端もまた直線的に成形されている。内側脚底より6mmのところに稜線を有し，外面も稜線を有する。外面は篦削りしている。色は赤褐色で胎土は良好である。18は，杯部の先端と脚部の一部を欠損してい

る。器高は8.5cm～9.5cm。杯部中ほどより少し下った所に段を有し，杯部は大きく広がる。脚部は杯部との接合部からゆるやかに外反し，脚の途中で折れまがり，直線的に脚裾は大きくひらく。脚端部径13cmを測る。脚端部は平坦な面をもち，脚部内外面とも，箆削りをしており，脚裾外面はヘラで研磨している。内側脚底より1cmのところに稜線が入る。赤褐色を呈し，胎土は良好である。19は，杯部上面のみを残す。杯部中ほどと思われるところに段を有し，直線的に外反し，口縁部は短かく外方へひろがる。口縁端部は三角形を呈する。口径は13.5cmを測る。内面は丹塗りしている。赤褐色である。

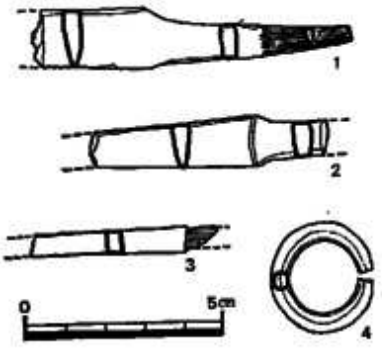


Fig. 10　扇祇1号墳出土鉄器金環実測図

3 鉄器

刀子（Fig. 10—1・2）　石室内盗掘壙からの出土で1は茎部を残存し，刃部を一部残すが，他は欠損しており，2は茎部から刃部にかけて一部を残存するのみである。1は茎部長5cmを測り茎部には木質が付着している。

鉄鏃（3）　石室の抜き跡から，1本出土しているが，棒状部を残すのみである。幅は8mmで，断面は長方形を呈する。

4 耳環（Fig. 10—4）

金銅張りのもので，径2.8cmを測る。断面の径は5mmで，細身である。（川述昭人）

4. 扇 祇 2 号 墳

墳 丘　（PL. 5～8, Fig. 11～13）　この古墳は，扇祇1号墳と同一台地上の東側に立地する直径約18mの円墳である。墳丘の西側約1/3は，すでに削除されており，盗掘壙は扇祇1号墳のそれよりもさらに大きく口をあけていた。このため墳丘の高さは，残存部より推定すると3.5m～4mの間で，3.5mは降らないものであろう。

墳丘は，花崗岩風化土の地山上にその基部をなし，第7トレンチ（Fig. 13—1）では，まず地山面を1.6mほど掘り下げ，石材を据えた後，掘り方と石材との空間に裏込めをしている。地山上面をおおった後もなお，90cmほど裏込めが続いているが，掘り方上端より1mほどのところから墳丘裾方向へ，まず，版築状の封土を盛り，第8層まで盛ったところで同一レベルまで裏込めをする。天井部はおそらく，この高さまで（約2.2m）と推定され，その上に3層ほど積み土して天井石をおおってしまうものと思われる。

裏込めがすんだ後は，頂上部まで土提状に盛土し，こんどは，墳丘裾から墳頂部へ向って盛るということになる。地山は掘り方端部より5mほどのところから急激に下降する。これはこ

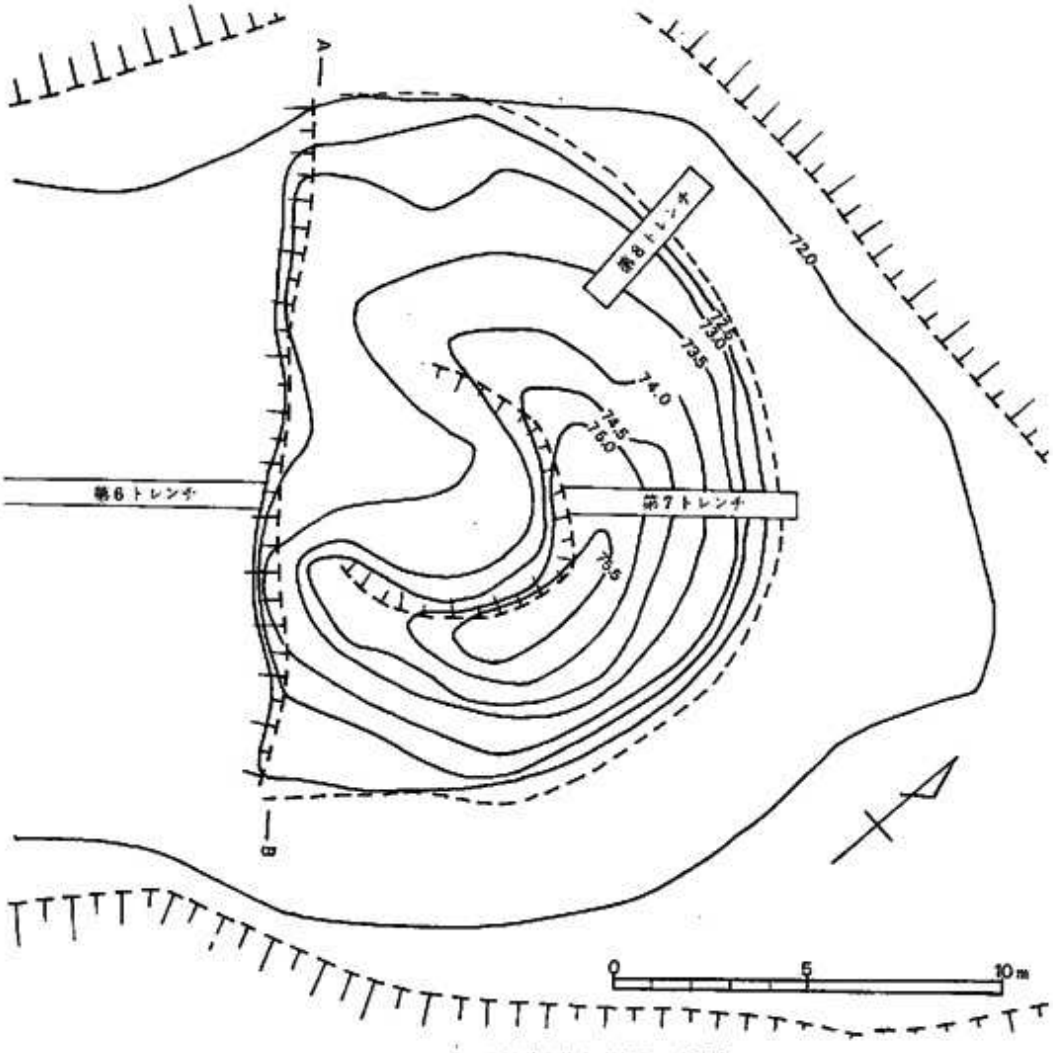


Fig. 11　扇状2号墳実測図（縮尺1/200）

のトレンチ内で見られるだけでなく，墳丘の南側ではすべてそうであった。これは墳丘裾部付近が開墾されてこのようになったのか，本来地上の整形によって生じたもののいずれかである。この問いに対しては墳丘裾部の開墾によるものと考えた方がよさそうである。これは第8トレンチで墳丘裾の上層が切れることからも言える。

なお，裏込めより石室内の土層は，盗掘後の堆積土であり，土層の名称は大まかにつけたことをつけ加えておく。

第7トレンチは，石室開口部方向は削平されていたため，地山面で墳丘裾を見れるのではないかと思い設定した。ここでは地山の色の違いから，(Fig. 13—1) 左端の凹みを検出した。ここを墳丘裾と考えることができよう。

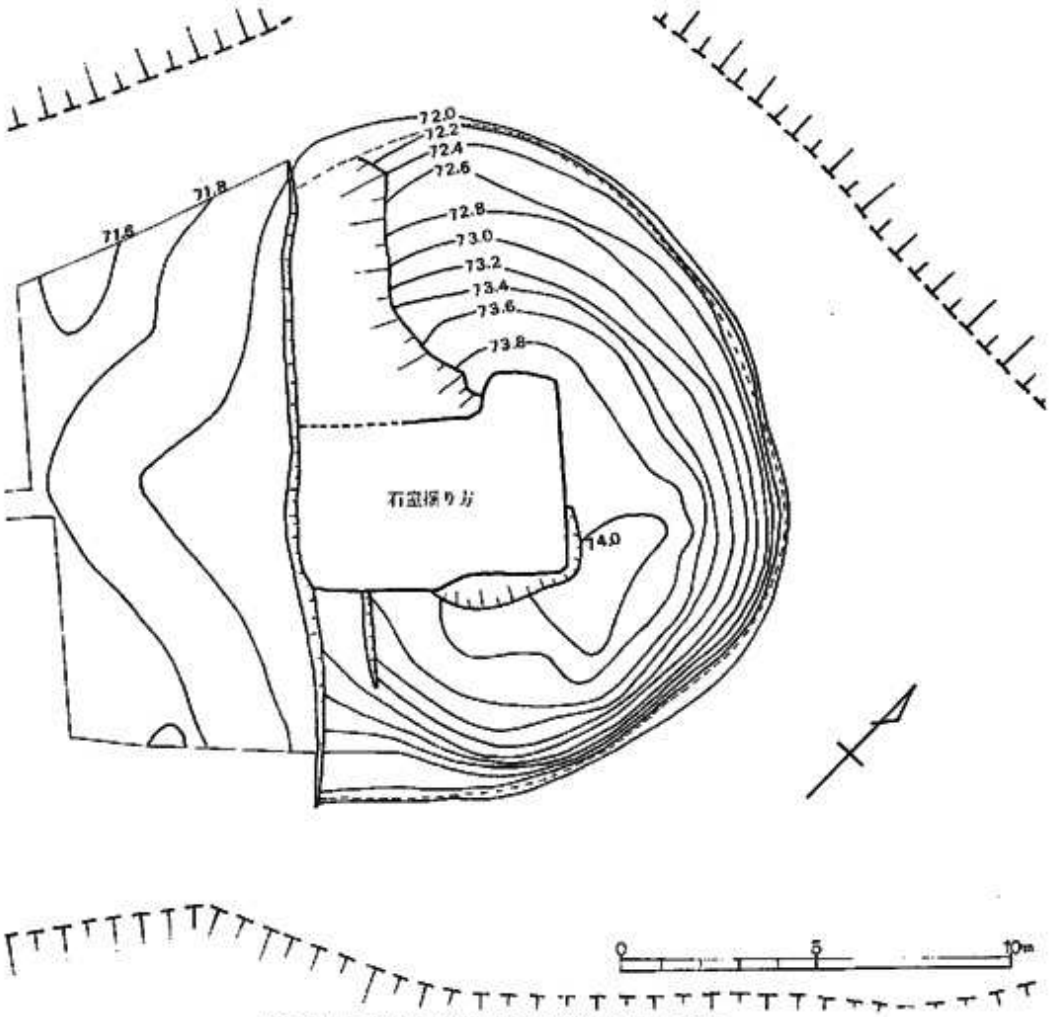


Fig. 12　扇状2号墳地山面実測図（縮尺1/200）

そのように考えると裾から裾までは18*m*を測り，墳丘残存部の地形測量より測定した数値18*m*と一致する。

Fig. 13−2 は削除を受けた低いがけ面の土層図である。第6トレンチは墳丘裾を見るために設定した。ここでは地山面には凹凸がいちじるしく，墳丘裾はここでもいくらか削除されているのが見られた。Fig. 13−3 は構断面で掘り方と地山，ならびに封土の状態を比較するために作製したものである。

石　室　　(PL. 7, Fig. 14・15)　石室はすでに盗掘を受け，石室構築に使用された石材はすべて持ち去られており，残存する石材は裏込めに使用された石であった。

しかし，掘り方は検出され，石材と掘り方との空間をうめる，裏込め部は石材を抜かれた際

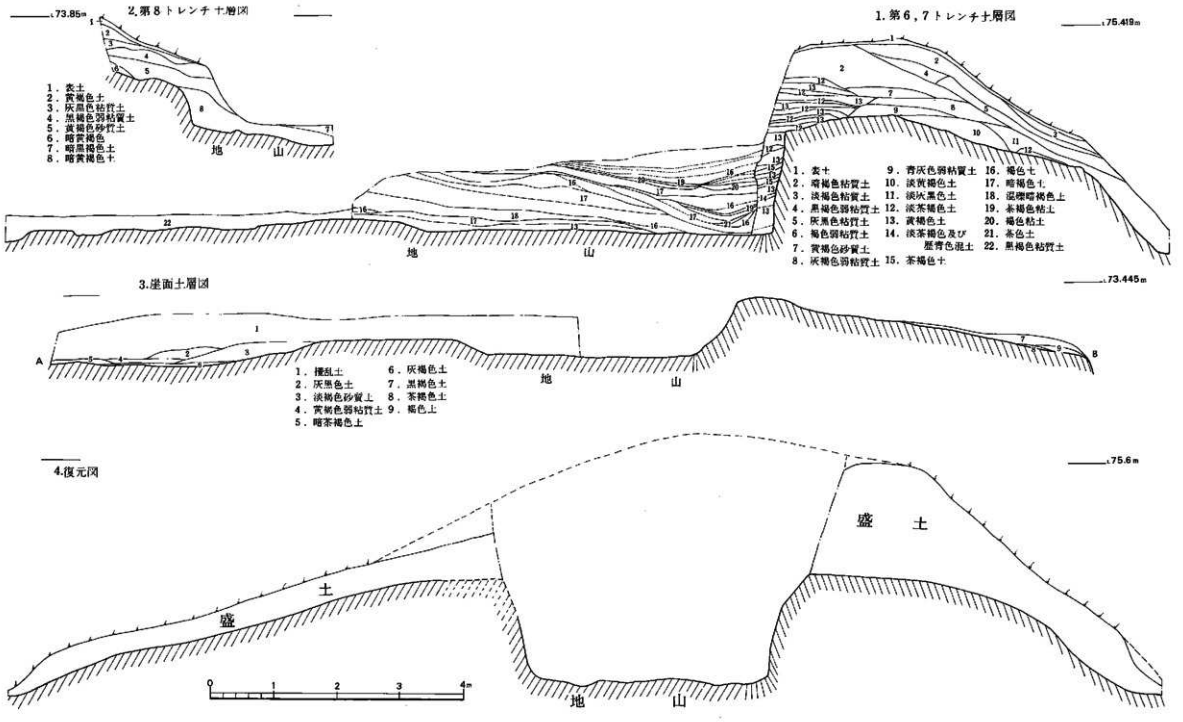


Fig. 13 扇祇2号墳土層図（縮尺1/60）

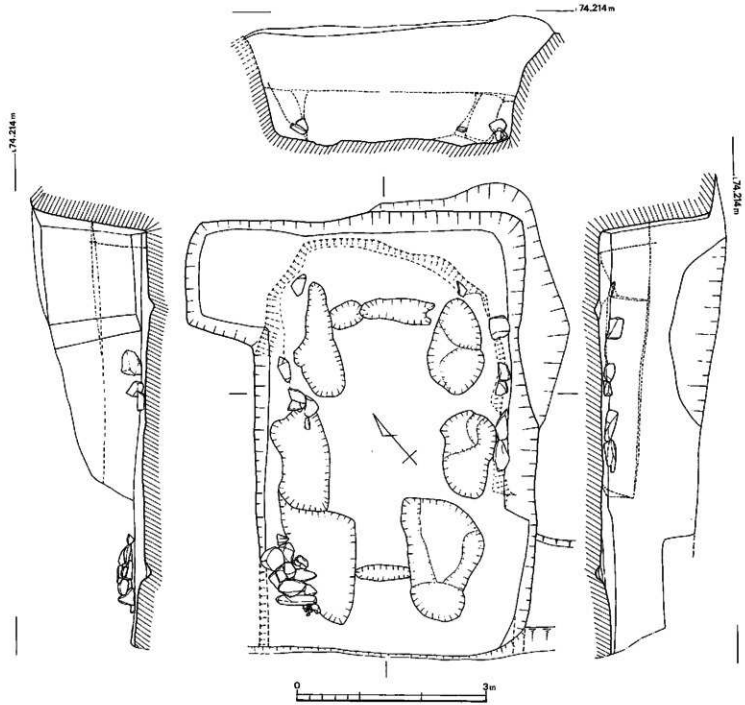


Fig. 14 扇祇2号墳石室実測図（縮尺1/60）

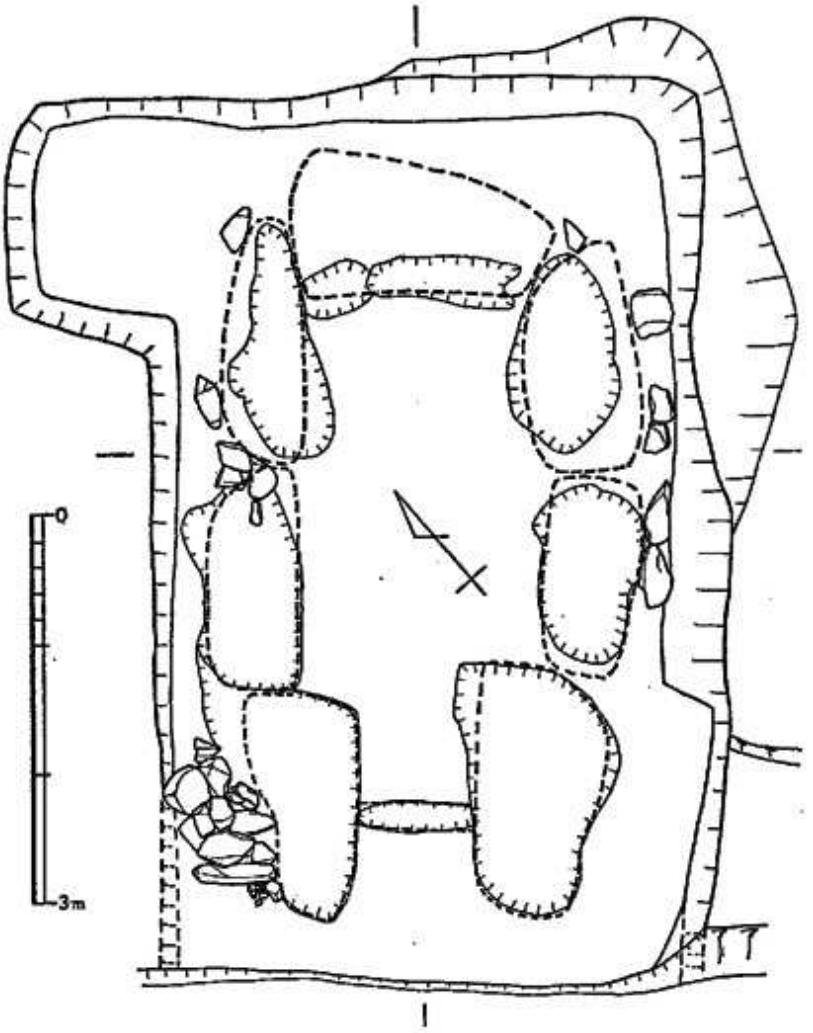


Fig. 15　扇状2号墳石室復元図（縮尺1/60）

にも残存していた。床面には石室構築時の石材を据えるための掘り方と，盗掘時における抜き跡とが残存していたので石室の輪郭は，ほぼ，つかむことができた。

石室は，単室両袖の横穴式石室で，石室の主軸は，N－41°－Eであり，ほぼ南西方向に開口する。

玄室は主軸で，框石中央までの長さは約4 *m*を測り，幅は約1.8 *m*で，玄門前端部までは3 *m*を測る。平面は長方形であったろうと思われた。石室構築に用いた石は残存する裏込めの石がすべて花崗岩であったことから，石室の石材も花崗岩を使用したものと思われる。（付近の人にたずねると同墳の石材を持ち去ったという人がわかり，その人の話では，畳2枚もの大きさの石で部屋をつくっていたということであり，石材の一部が庭石として残っていた）。

奥壁下部は，長さ1.8mほどの石を1個使用し側壁は，左右とも0.8m×1.5mほどの石を2個ずつ，それに玄門は，側壁に使用したものと同じ大きさの石を使用したものと思われる。

玄門石開口部寄りの位置に幅20cm，長さ90cm，石の抜きあとがありほぼ同じぐらいの框石を置いたものであろう。框石の抜きあとを境にして床面は開口部方向へ上り，玄門部より開口部方向の床面には，抜き跡も見られず地山上に石を据えた形跡もなく，たとえ石材があったにしても玄室に使用したそれとは違った小さ目の石を積んだ羨道部が来るものと推定される。

天井部の高さは，裏込めの仕方より見ていくと，2.2mの高さを測るものと考えられるが，この高さは，天井石の厚さをひかなければならないので，1.7m前後にはなるだろう。

石室の掘り方は，地山面より掘り込まれており，平面は長方形を呈するが，奥壁左側では，奥壁と一辺を共有する1m×1.8m程の長方形を掘りたしたような形態をしており，土壙の重複でもなく，また盗掘壙でもないため，なぜ，このような形をとったのか疑問が残る。

石室の掘り方は，中央部幅3.8m，奥壁の最大長は4.8mを測る。側壁右側では，掘り方下端に30cm～50cm大の裏込め石が一列に並んで検出された。玄門右側後部にも二段位積まれた裏込め石が検出された。

掘り方は地山面より1.6mほどほぼ垂直に近く掘り込まれており，奥壁と掘り方との空間には地山を掘り込んだ際の花崗岩風化土と，やや粘質の淡茶褐色土を裏込めとして使用している。

出土遺物　2号墳では，石室の抜跡からは，鉄鏃・刀子・耳環などの出土があった。この他に，墳丘前面左側の地山の凹地より須恵器の出土があった。

1　**恵須器**

杯蓋　a類，b類の2つに分けられた。

a類（Fig. 16—1）　a類は，天井部と休部との境には一条の沈線を有し，復元口径13cmを測る。口縁部付近は外湾しつつ口縁端へ続き，端部は丸くおさめている。復元器高4.7cmを測るが，やや扁平な形態である。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好であり胎土には砂粒を含む。

b類（2・3）　b類はa類に比較してやや大型のものである。2は，口径14.2cmと大形であり，器高は4cmを測り，扁平な形態である。天井部は篦削りしており，残りは横なでを施し，この際の凹凸が内外面ともにいちじるしい。先細り気味だが，口縁端部は丸くおさめている。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好である。天井部に篦記号をもつ。3は，口径13cm，器高は4.5cmと高くなる。天井部は平坦面を有するが，全体としてはやや丸味を帯びている。篦削りと横なでにより器形は凹凸がいちじるしい。先細り気味だが，口縁端部は丸くおさめる。色調は灰黒色を呈し，焼成は良好である。胎土に砂粒を含み，砂粒の移動よりみた篦削りの方向は左廻りである。

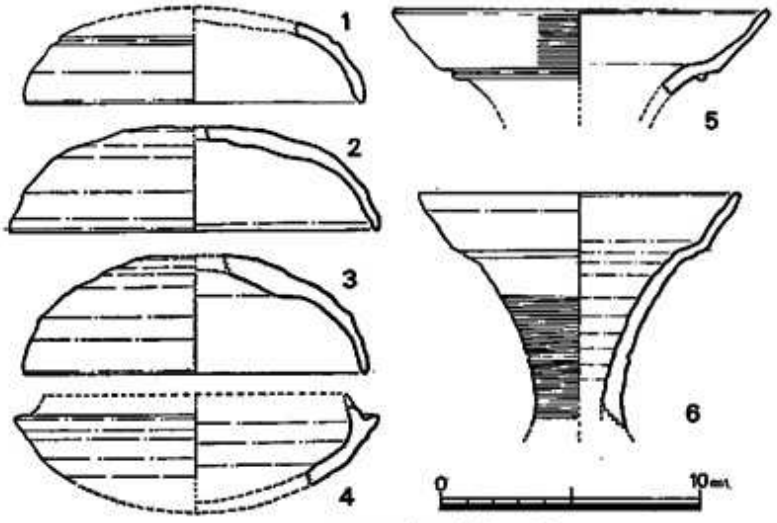


Fig. 16　扇祇2号墳出土須恵器実測図（縮尺1/3）

杯身（4）　立ちあがり先端部と底部を欠損している。復元径14cm，器高4.5cmを測り，器形は丸味を有すると思える。立ちあがりは接合部から湾曲を描いて延び，蓋受け部は短いが，太く安定感があり，蓋受け部には落ち込みを有する。色調は灰色を呈し，胎土には細粒を含む。焼成は良好である。杯蓋b類とセットになると思われる。

壺（5・6）　5は，頸部上端と口縁部とを残すのみであり，口径は14.5cmを測る。頸部と口縁部の境には一条の突帯がつく。口縁部は外反がいちじるしく朝顔形に開き，口径を拡大させた形態は特徴的である。端部は丸くおさめている。口縁部のみ刷毛目がみられる。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む。　6は，口径12.4cmを測り，球状部は欠損している。頸部中央部付近には一条の沈線を有して，頸部を二区分している。頸部は口縁下までゆるやかに外反し，頸部と口縁部の境は外上方へ再び折れまがって外反する。口端は丸く仕上げられている。頸部内面には横なでによる凹凸がいちじるしい。頸部外面は刷毛目が入る。色調は暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む。

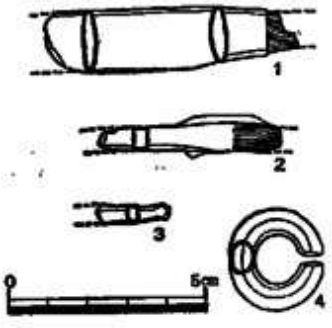


Fig. 17　扇祇2号墳出土鉄器銀環

2 銀環（Fig. 17—4）　石室内盗掘擾中より出土。銀銅張りのものである。径2.6cmと2.4cmを測る。断面は8.5mmと6mmを測り楕円形に近い。

3 鉄器

刀子（Fig. 17—1）　石室内盗掘中からの出土で，茎部と刃部先とを欠く。断面は扁平楕円形を呈する。わずかに残った茎部には木質が付着している。刃部幅は1.6cmを測る。

鉄鏃（2・3）　2は茎端部と棒状部をわずかに残す程度であり，3は茎端部を残すのみである。2の棒状部は茎部付近では7.5㎜あり，先に行くにつれ，やや細くなる。断面は長方形であり，茎部には木質が付着する。（川述昭人）

5. 小　結

扇祗1，2号墳は，舌状に延びる同一丘陵上に35mほどの間隔を置いて立地する。

古墳は2基とも墳丘の1/8～1/3を切断され，さらに盗掘を受け，石材はことごとく持ち去られ，石室プランは，抜き跡より推定するしかなかった。

石室は，扇祗1号墳では単室の可能性があり，扇祗2号墳は単室であり，両袖式であることは両者に共通する。

また，石室構築に用いた石材は花崗岩であったであろう。

さらに，抜き跡，同古墳より持ち出したと言われる石材を見ても，かなりの大石を使用したものと思われる。各石室長は扇祗1号墳では2.4m前後，扇祗2号墳は，3m前後で，玄室の平面は長方形を呈するものと考えられる。

石室内部の構造は，いづれも旧状をとどめていないが，敷石はなされていなかった可能性が強い。

掘り方は，扇祗1号墳は，長さ5m以上，幅4.2mの平面長方形を呈するものと思われ，扇祗2号墳は，長さ6m以上，幅3.8mを測り，平面長方形を呈する。

遺物は扇祗1号墳は，石室内盗掘壙中より，杯身2片と長頸壺の底部，金環1個，刀子片2本，鉄鏃片1本が出土しただけで，あとは，第5トレンチ付近より出土したものである。なお，第5トレンチからは土師器も出土している。

扇祗2号墳の方は，石室内盗掘壙中からは，銀環1個，刀子片1本，鉄鏃片2本出土しており，須恵器はすべて，墳丘切断面前面を地山まで剥いだ際に西側の地山上より出土したが，この面も耕作を受けているため性格はつかめなかった。

扇祗1，2号墳はほぼ近接時に築造されたものと判断され，その前後関係は不明であるが，これに年代をあてはめるとすれば，6世紀後半代の時期が比定されよう。（川述昭人）

第18図　筑後川中流域の遺跡分布図（○印は遺跡の所在地を示す。）

川床遺跡一覧表（○有）

（甲斐孝夫氏のお折しを受け筑後地区郷土研究団体より転載した）

名称	遺跡地名	場所	川	遺物 縄文	遺物 弥生	遺物 古墳	遺物 奈良—平安—鎌倉	遺物 その他	年月	発見者
1.	塚島	三井郡北野町塚島	筑後川		○ 甕形底部に一孔あるもの多し	○ 須恵（坏）	○ 瓦器 金玉満堂 印刻あり 青磁	土師器	41.2	石井保廣
		大城橋下流500米						（工事早く終り資料散逸）		
2.	太郎原	久留米市合川町太郎原	筑後川	○ 甕形 新月ある紐状跡帯を附す 深鉢形口縁部の山形突起に刻みあり 押形文に羽状のあるもの 深鉢形 胴部に渦文を太く刻んだ環状把手あり 浸鉢形磨消縄文	○ 前、中、後期土器 甕・高坏・丹塗 甕・器台・支脚など 土師器 甕・坩・高坏	○ 須恵（坏、高坏） 土師器 丹彩多し 壺・坩・鉢・甑	○ 須恵（坏・瓶） 土師器（盤・鉢） 瓦器 鉢 口・鉢 釜底に「大」文字落書あり 青白磁（個に多し）	刺片廻石器 土錘各種 甕棺片 石臼 石釜	41.12	石井保廣
3.	宮ノ陣	久留米市宮ノ陣町宮園	筑後川	○ 高坏形 鉢形	○ 前、中、後期土器 甕・器台・高坏 土師器 甕・小坩・高坏	○ 須恵 坏・奏瓶 高坏・壺 土師器 壺・坏・鉢	○ 須恵（瓶・坏） 土師器（盤・鉢） 瓦器 鍋 口・坩・鉢 片・押型文あり 青磁（少量）	磨製石斧 土錘各種 石臼 石釜 刀自瓦 （資料豊富なるも分散）	39.7	森山邦人
4.	梅林寺	久留米市京町	筑後川（昔…筑後地）	○ 前、中、後期土器 甕、壺など	○ 須恵（少量） 土師器 壺・小坩 丹彩あり	○ 須恵（坏） 土師器（盤など） 瓦器 鍋 大小鉢 押型文多し	土錘各種 （工事早く終り資料散逸）		41.12	石井保廣
5.	小森野	久留米市小森野町	宝満川（昔…筑後川）	○ 口縁部に近く深く沈んだ条線模文 甕形（夜日式）	○ 前、中、後期土器 壺・甕・高坏・甑 赤うるし塗大甕 彩色細目文土器 土師器（壺・坩・高坏）	○ 須恵 制合に多い 壺・平瓶 坏・高坏 土師器 盤・甑・坩 灰にまみれて出土するものあり。火災？	○ 須恵 子持勾玉 坏・平瓶・壺等 黄紬色染料密着 有孔滑石製品 大型内に 紫褐色染料密着 土師器・盤・小鉢 瓦器・鍋・釜 大小 押型文のあるもの多し 青磁（数点、少なし）	石釜 土錘 石臼 （資料豊富）	41.11	笠敏調
6.	味坂	三井郡小郡町味坂	宝満川			○ 須恵片 土師器（盤・鉢）	○ 土師器（盤など）		41.8	泰譲 教 開上 空井
7.	高島	三井郡小郡町高島	宝満川	○ 前、中、後期土器 甕・壺・高坏 甕棺・瓶		○ 須恵片 土師片	○ 須恵 土師器（盤・鉢） 瓦器 鍋 釜 大小 押型文多し 青磁（少量）	土錘各種 （工事早く終り資料散逸）	41.8	諫黎 教 開上 井望
		端間と味坂の中間						猪歯 木実 木炭 鎌棺片 （調査不十分）		

（甲斐孝夫氏のお折しを受け筑後地区郷土研究団体より転載した）

Ⅲ 筑後川川床遺跡

1 はじめに

九州縦貫自動車道路の筑後川の架橋地点の周辺は，田中幸夫氏等によって砂利採集の際などに多量の土器が出土していることが知られていた。

筑後川の架橋工事が，10月に北岸の方から着工されるため，福岡県教育委員会は，日本道路公団久留米工事事務所と協議のうえ，久留米市教育委員会の協力を得て9月20日から10日間の予定で，とりあえず50㎡ほどを発掘調査することとした。調査は，準備不足，悪天候などのため良い結果は得られなかったが，9月26日を以って終了した。

発掘調査員は，つぎのとうりである。

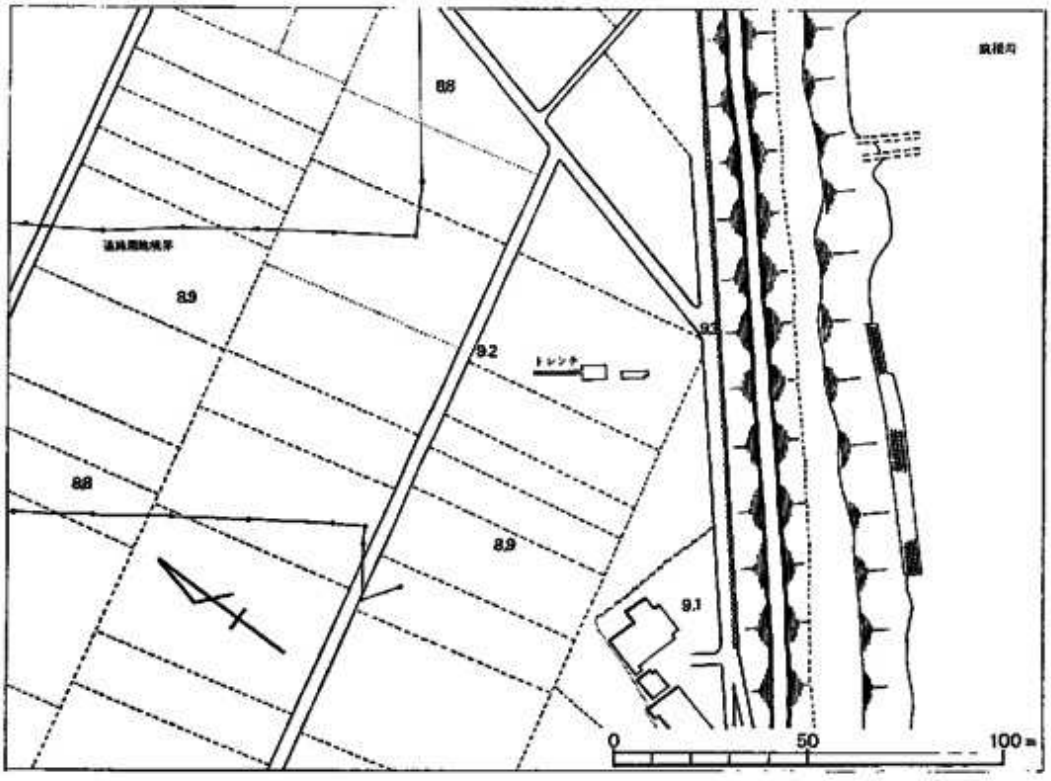


Fig. 19 筑後川川床遺跡地形図（1/2000）

福岡県教育委員会文化課技師　　栗原　和彦
〃　　石山　　勲

なお，発掘調査には，久留米市教育委員会の半田豊文化係長，塚本直次主事，樋口一成主事，宮ノ陣公民館溝辺澄徹主事から多くのご援助を頂き，日本道路公団久留米工事事務所御竿良彦庶務課長には，終始変わらぬご協力を頂いた。又，田中幸夫氏からは，同遺跡についての幾多のご教示を頂いた。心からのお礼を申し上げたい。

調査日誌

9月20日　グリッドを設定発掘開始，午後3時雨にて作業中止

22日　グリッド方式をやめてトレンチにする。（第1トレンチ）

23日　第2トレンチを設定，第1トレンチは，発掘打切り。

24日　第2トレンチ第7層から，染付の陶器片出土。

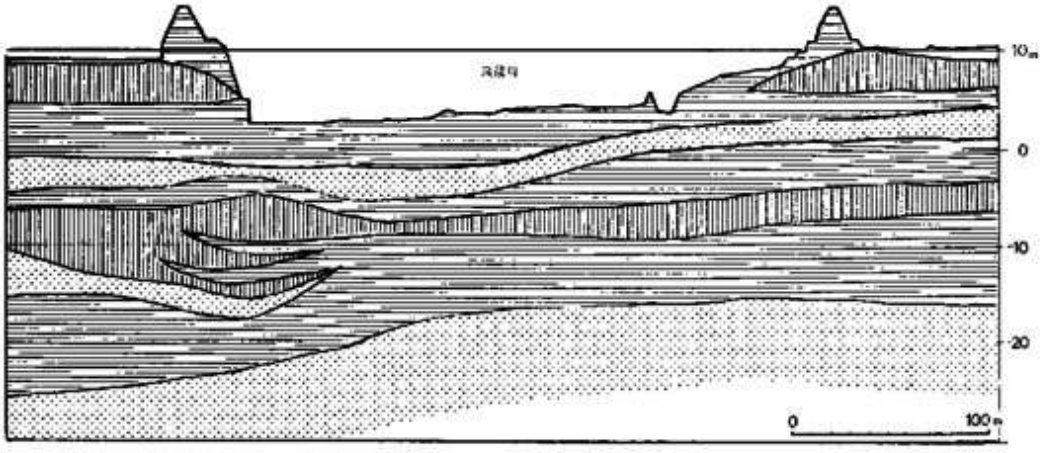
25日　土層図作製，午后より埋戻し。

26日　埋戻しを終了する。

2. 遺跡の概要

この遺跡については，田中幸夫氏が，「筑後地区郷土研究」の創刊号に「川床遺跡に見る筑後平野と上代集落」という題で発表しておられる(Fig. 19)。氏のご教示と，前掲書とから，この遺跡を概観するならば

1. 遺跡の範囲は，架橋地点から上流で7㎞下流で4㎞のほどの範囲をもつ
2. 出土品は縄文時代から中世の遺物まで広範囲に渡っている。



3. 出土品は，完形のものが多く，多量の土器片も磨滅していない。

などの特徴があげられる。

筑後川のもたらす沃土と，それを耕していた筑後の人々の生活と文化の跡が，この広大な地区に川床遺跡となって眠っていると言えよう。

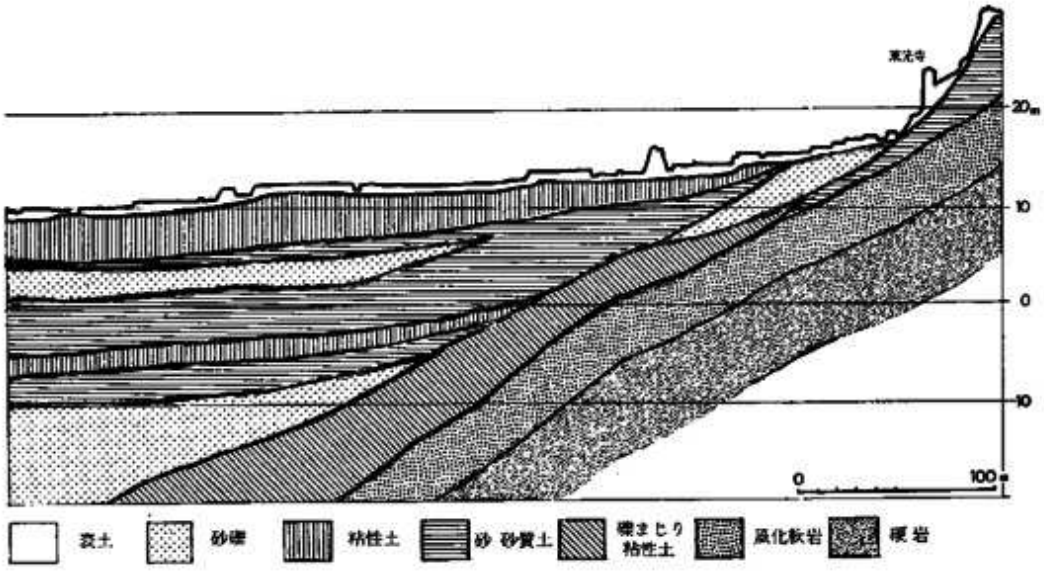
3 発掘調査

道路センター杭にそって，2 m方眼のグリットを設定し発掘を開始した。しかし，遺物の出土がないままグリットは深くなる一方なので三つのグリットをつなげ2 m×6 mの第1トレンチとして下をさぐった。しかし，深さ地表より2 m50cmの深さとなると，土の上げる作業に手まどり，それより下への調査を打切るよりなかった。

そのため，第1トレンチから4 m中心杭にそって北側へはなして，4 m×6 mの第2トレンチを設定し発掘調査を継続したが，遺構らしいものもみつからないまま地表から3 m40cm程の深さとなり，土上げは困難な状態となり，第2トレンチも発掘を打切ることと，土層図を作製して発掘調査を終了した。

第1トレンチ・第2トレンチ土層の堆積状況は，おおむね水平堆積であり，掘り込みのような穴も，旧地表かと考えられる面もないので，第2トレンチの土層図のみを掲載した。

又，架橋工事着工前にボーリングによる土層図を日本道路公団で作製していたので，そのボ



左. Fig. 20—1 筑後川付近ボーリングによる土層図（縮尺1/4000）

上. Fig. 20—2 高良山北側ボーリングによる土層図（ 〃 ）

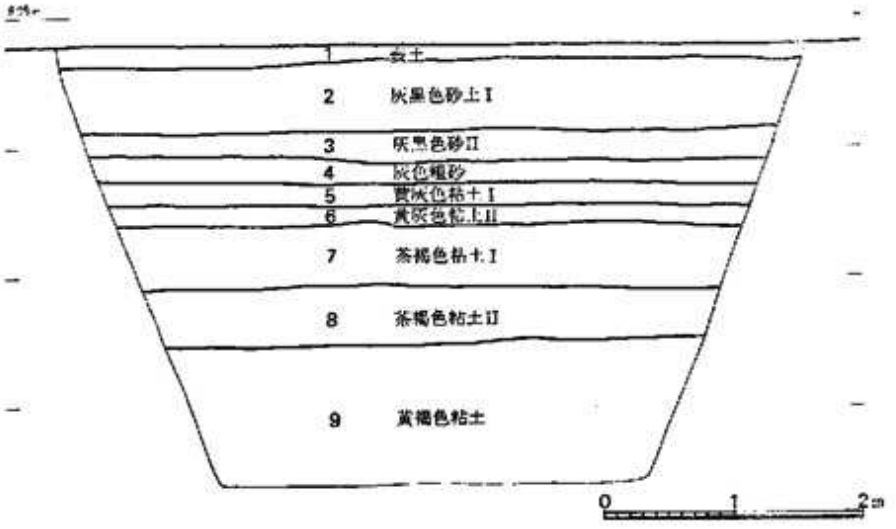


Fig. 21　第2トレンチ土層図（縮尺1/10）

1リングの結果も照会したが，土器等の出土はなかったようである。なお，ボーリング調査による土層図は，高良山周辺と筑後川の付近とでは当然のことなから相異を見せている。川床の遺跡の深さは，せいぜい深くて5～6 m程と思われるが，一応掲載した。

出土遺物は，各層とも少なく，いずれも2 mほどの小破片であるが，土師器・須恵器・染付の施釉陶器などがある。このうち，染付の陶器は，第7層から出土したが，古くても江戸時代より登らないものと性われる。

以上が調査の結果であるが，この架地点の北岸の地点では，遺跡はないものと一応判断出来ようか。（栗原和彦）

Ⅳ 鰐口古墳

1 はじめに

鰐口古墳は久留米市高良内町大字内野字鰐口にあり，高良山と谷をはさんで相対する明星山の山塊が平地へはり出した一見して独立丘陵上の台地傾斜面に築造されている。古墳の存在する付近には遺跡も多く，北方約2㎞には高良山神籠石を望見でき，西方では1～2㎞隔たって石櫃山古墳，石棺石障系の初期装飾古墳として著名な浦山古墳があり，また筑紫の君一族の墓地と考えられる石人山古墳，岩戸山古墳を中心にした大古墳群は南方約6㎞の地点に連面として横たわっている。

調査開始時においては，黒曜石等の散布から住居跡等の遺構の存在を想定して調査を行なったが，調査の進行につれ古墳の存在を確認した。しかし，これは古墳の基部がわずかに残存していたもので墳丘のほとんどは失なわれてしまっていた。このような事から当初は鰐口遺跡と称したが，今回あらためて鰐口古墳の名称を用いた。

調査経過

昭和45年7月22日より7月25日までの遺跡内の茶樹の伐採を行う。8月5日よりテント等を設営し本格的調査を始める。8月6日調査区域内に3×3mのグリットを組みベルトコンベアーを使用して排土作業を行う。8月11日性格不明の石組遺構を確認せる。8月12日石組遺構は古墳の石室と判明した。また一部に周溝らしきものを検出する。8月13日より25日まで石室および周溝の発掘作業を行なう。8月26日より実測，写真撮影その他の諸記録を行ない，8月28日調査を終了した。なお調査総面積は630㎡である。

調査員	主任	国士館大学考古学研究室	大川　清
		福岡県教育委員会技師	栗原和彦
		国士館大学考古学研究室写真技師	大門直樹
		国士館大学考古学研究室学生	森広　樹，北原実徳，大島秀俊，水野順敏，小高孝知，西岡みゆき，井　博幸

本報告書の作成にあたっては，北原，大島が遺物整理並びに実測図の作成を担当し，井博幸が報告の原稿を作成，大川，栗原がこれを補訂した。（大川清・栗原和彦・井博幸）

Fig. 22　鍋口古墳の周辺

1. 祇園山古墳　2. 宗崎遺跡　3. 筑後国分寺跡　4. 浦山古墳
5. 石櫃山古墳　6. 鍋口古墳　7. 甲塚遺跡　8. 甲塚古塚

2 鶴 口 古 墳

墳 丘 (PL. 12・13, Fig. 23・24) 盛土は開墾によりまったく認められないが，周溝の存在する事からも円墳にまちがいない。古墳は標高62.5*m*～64*m*の台地の傾斜面に築造されている。墳丘築造に先立ち地山を整地していることが黒曜石片の散布状態からもうかがわれた。周溝内側での墳丘の大きさは最も広い所で東西約10*m*，南北約13*m*と不整円形である。周溝は地山に直接掘り込まれたもので多少の広狭はあったけれども墳丘を取りまいており，最も

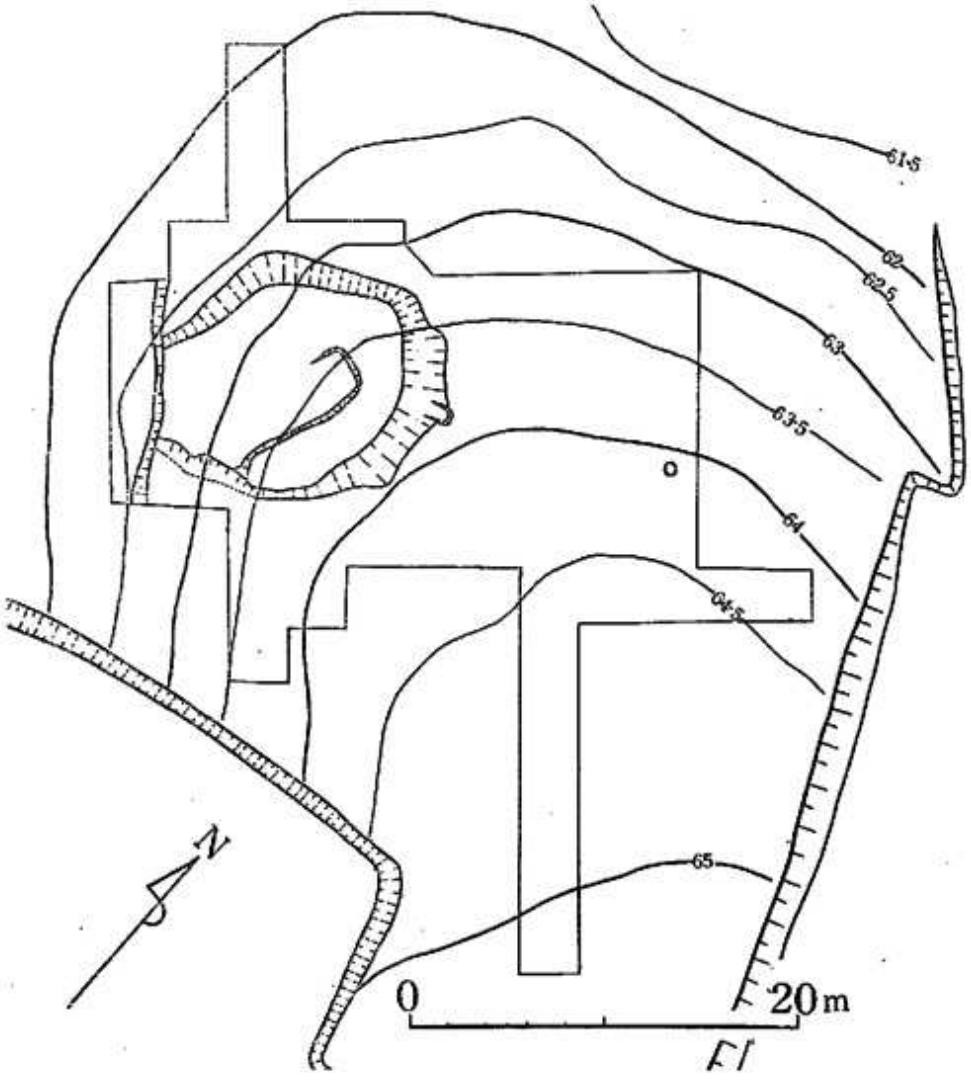


Fig. 23 鶴口古墳地形図（縮尺 1/400）

広い所で幅約2.4 m，狭い所で0.8 m 深さは最も残りの良い所で約0.4 mであったが，開墾により溝の底部のみが残ったと考えられることからもわかるように，周溝掘削時においてはより深く幅広いものであったことは述べるまでもない。周溝掘り込みは，内側は比較的急な立ち上がりを示しているのに対して外側ではなだらかで自然にあり，地山と接する所もあった。周溝内には大くき4ヶ所に別れて割石が遺存していた。北側周溝中には長さ約80cmの大石と40cm内外の割石3個が認められた。また石室西側のものは20～40cm大の石約10個が周溝内壁にはり付けられたような状態で遺存し，この下より須恵器の甕を発見した。その他の周溝内の割石はほとんどが浮いた状態であり石の大きさも不規則であった。また石室北東側の周溝内には長辺180 cm，幅約90cm，深さ約30cmの土壙が発見され，長辺はほぼ東西位を示めし，壙内堆積土は黒色土であり，壁の立ち上がりは急で床面は平らであった。出土遺物はなくその性格は明らかでないが，周溝を切って築かれていることは本古墳より後の遺構である。

石　室　(PL. 23・15, Fig. 24)　石室は胴張りプランの玄室と羨道と墓道とをもつ横穴式石室で，墳丘中心よりやや山側寄りに南に開口する方向をもって構築されている。石室はこれを築くための基礎的作業として掘込みを掘ることから始められた。あらかじめ決っている石室の形を想定しながら掘込まれたものであるということは，石室の形と掘込みの形とがほぼ一致することからもうかがえるが，掘込は開墾のために東側壁の立ち上がりは現存するが西側壁のそれはほとんど失なわれて存しない。削平がはなはだしい現在その計測をしるしても十分に遺構を知ることはできないので，部分的に遺存した各部をもって復原的に本石室の数値その他を以下に述べる。玄室部は奥壁ならびに奥壁に接して西側壁部が約2.8 m遺存し，東側壁については，側壁基部の石が2個残存していた，この石の外側の掘込みとの関係からも当を得たものである。この石は奥壁の東コーナーより約2 mの位置にあり幸にも石の反対側つまり西側壁基部の石列の末端と相対する。従ってこの部分（奥壁より約2 m，A点）の幅は約2.4 m，奥壁部も約2.4 mと推測できる。なお奥壁とA点との中間における玄室の幅は約3 mを計るものでこの平面形は胴張りのものと推測してまちがいないであろう。玄室の長さはほぼ2.8 mと推定しうるし，さらに羨道が1.6m程度の長さを持ち，幅も1.6m前後のものであったと推定できる。従って玄室から羨門までの長さは4.5 m前後のものと考えられる。また羨門より外へ墓道の存在を認めることができる。墓道はやがて周溝に落ちこむようになっていた。墓道の幅は約1.6 mである。また掘込の壁の立ち上がりは東壁の観察によれば比較的急な立ち上がりを示すが，最も遺存状態の良好な所で約40cmであった。また玄室内には偏平割石が多量に落下堆積していたことから石室の側壁はこれらの割石を小口積みの手法で構築されていたものであろう。石室の床面には側壁部使用の石と同質の偏平石によって敷石が施されていた。中心部及び東側では比較的大形の石を使用しているのに対して，その他の場所では約10cmほどの小形の石が敷

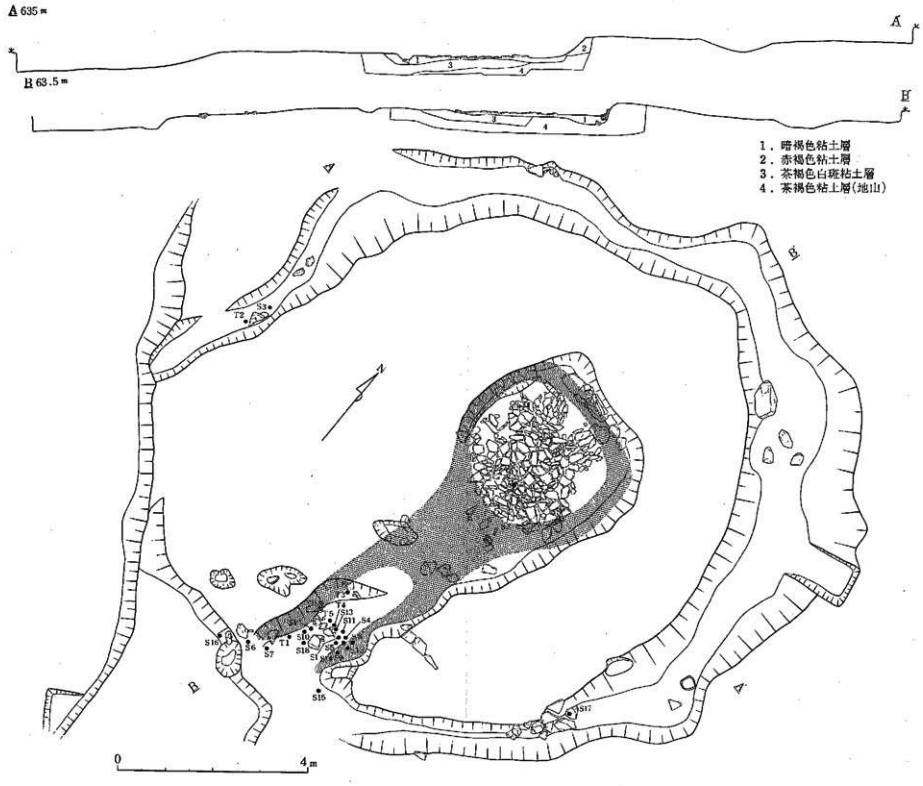


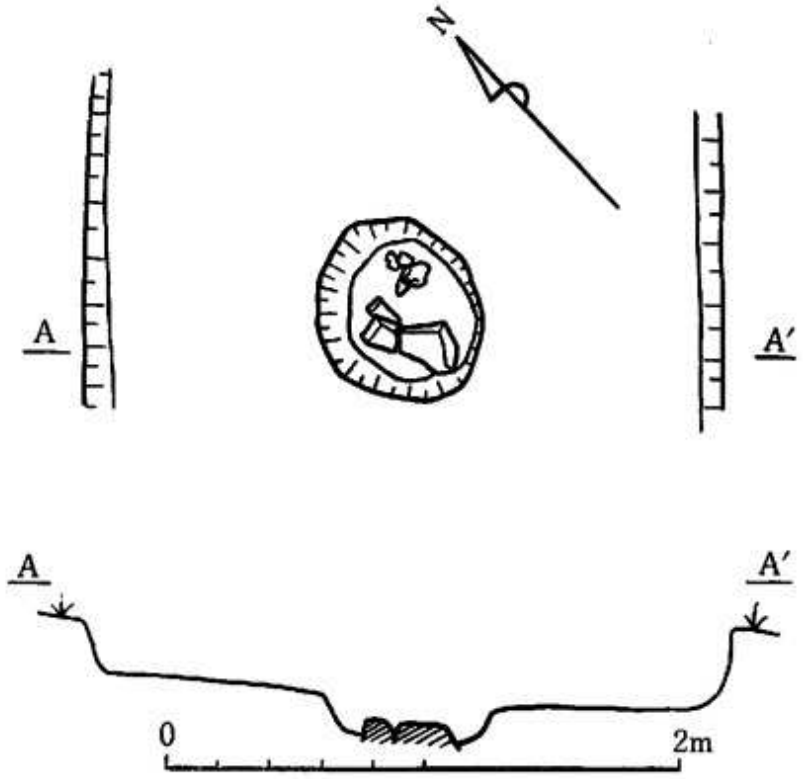
Fig. 24 鍔口古墳実測図（縮尺1/80）

かれている。羨道部・墓道の遺構に関しては掘込の形，偏平割石の遺存状態より推察するのみで，明確な構造を確認できなかった。なお墓道の中央東側の地山上には約40cm大の偏平割石3個が石室に対してほぼ直角位で一列に並んでいた。

その他の遺構

土壙　(PL. 5, Fig. 25)　本墳中央より北東約20mに発見された土壙である。すでにここは後世の削平に遭っているため，攪乱がはげしく，この土壙付近の関連遺跡遺物については明らかにし難かった。土壙は地山に直接掘込まれ，径約60cmの円形で深さは約10cmであった。底はほぼ平らであり壁の立ち上がりはゆるやかであった。内部埋積土は混黒色黄褐色土で底面に接して20～10mの割石3個と弥生式土器と考えられる細片を見いだしたが遺構の性格は明らかでない。

石散在区域　(Fig. 26)　古墳の南東側において偏平石の散在が認められた。散在する範囲



Fg. 25 弥 生 土 壙

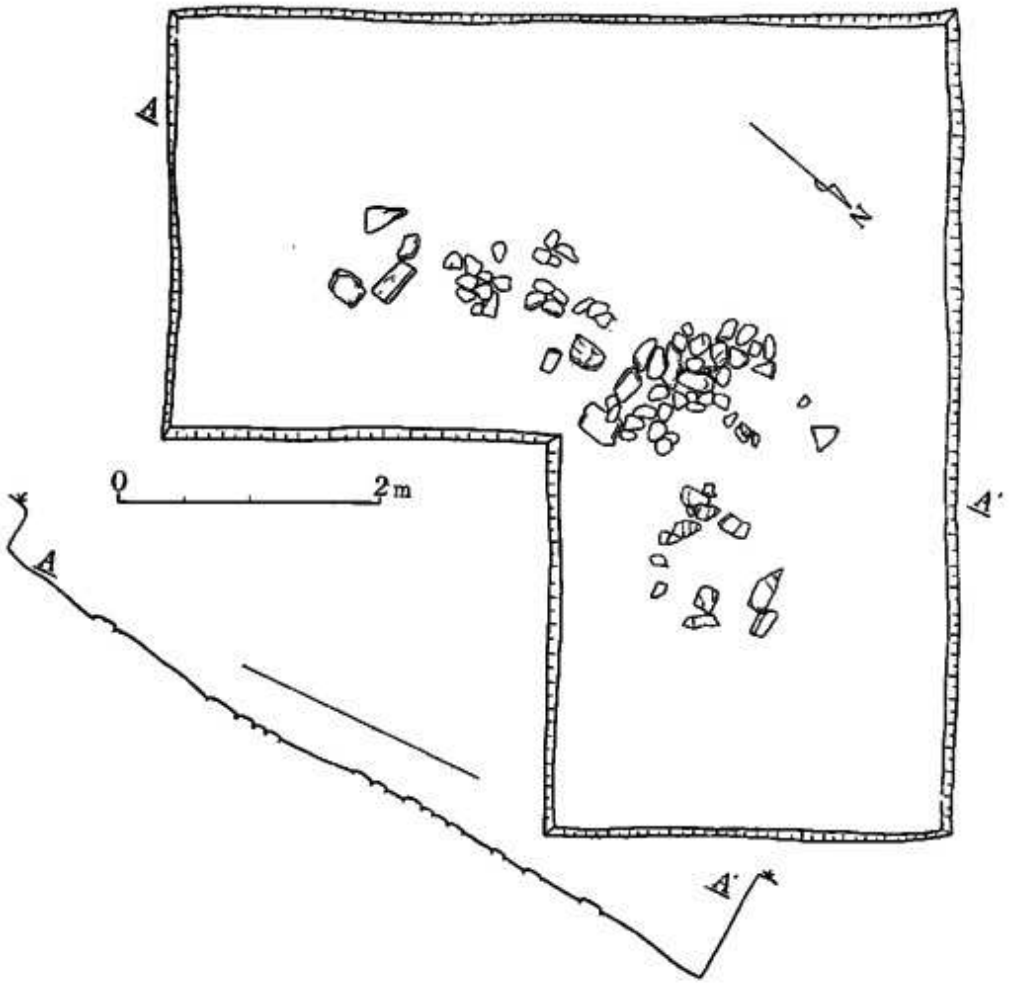


Fig. 26　石敷住区域実測図（縮尺1/60）

は長さ約4*m*，幅約1*m*でその中心は本墳周溝南東より約6*m*の位置であった。これらの石は石室使用と同類の偏平石で約80個が散在していた。これらの石の中からは，古墳時代その他の遺物の出土はなく遺構としての性格を見いだすことも出来なかった。

出土遺物　本墳出土の遺物は須恵器と若干の土師器，さらに鉄製品で，本遺跡が古墳のみでなく，それ以前の遺跡とも重複していたことを証する石器類の発見もあった。

1 土器類　(PL. 16, Fig. 27)　以下器形別に説明する。番号は古墳全体図の番号と同じであり，土器類にはSを鉄器にはTを用いた。

蓋　1 (PL. 16 −3) 径11.5*cm*，高さ38*cm*。内側にかえりの仕いた焼成の良いもので，色調

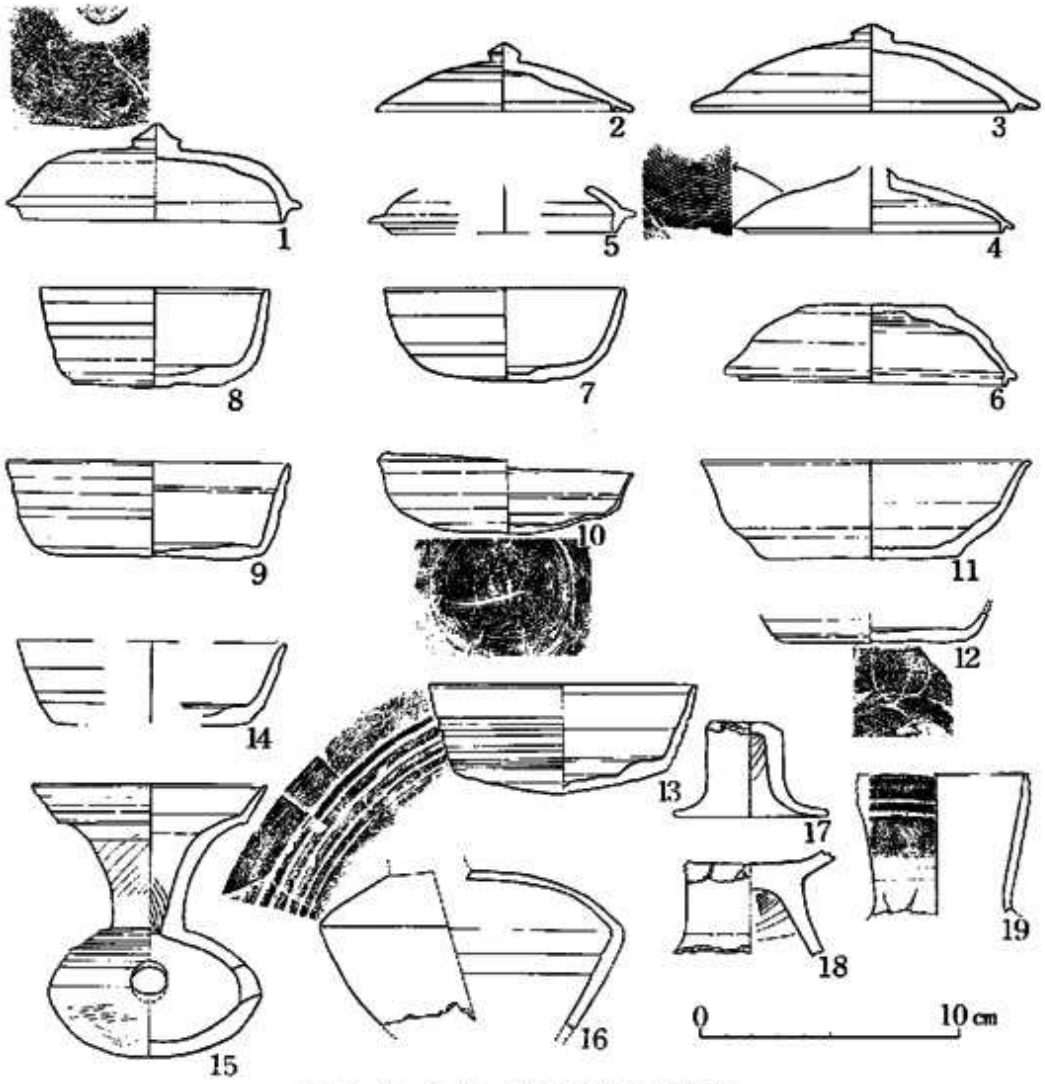


Fig. 27　鍋山古墳出土土器実測図（縮尺1/3）

は灰色，胎土中に若干の砂粒を含んでいる。外側部はやや丸みをもち，宝珠形のつまみが付いている。外側はヘラ削り，内側は横なでで整形されている。外側にはヘラ記号が認められる。

2（PL. 16－1）径6.9cm，高さ2.8cm。内側にかえりの付いた焼成の良好なもので，色調は青灰色，胎土中粗砂粒が混入する。宝珠形のつまみが付き，内側は横なで外側はヘラ削りによる整形である。

3（PL. 16—2）径13.5cm，高さ3.6cm，内側にかえりの付く焼成の良いもので，色調は青黒色，胎土中に砂粒を混入する。宝珠形のつまみが付き，外側はヘラ削り，内側は横なでによる整形がなされている。

4 (PL. 16—5) 径10.9cm，現存高は2.5cmで，内側にかえりの付くものである。焼成は良好で，色調は青灰色，胎土中に砂粒を含む。外側はヘラ削りののちかき目による整形，内側は横なでによる整形であって，宝珠形のつまみが付いている。

5 (PL. 16—4) 径10.4cm，現存高1.4cm，内側にかえりのつくもので，焼成は良く，色調は青灰色で，胎土中に粗砂粒を混入する。外側はヘラ削り，内側は横なでによる整形であり，1と同様の器形と考えられる。

6 (PL. 16—6) 径11.5cm，高さ3cm。内側にかえりの付くもので焼成は良く，色調は青灰色，胎土中に粗砂粒を混入する。つまみはつかず，内側は横なでで外側はヘラ削りと横なでによる整形がなされている。

杯 7 (PL. 16—9) 径6.1cm，高さ3.6cm，焼成は良く，色調は青灰色で胎土中に粗砂粒を混入する。内側と外側口縁部は横なで，外側体部と底部はヘラ削りで整形されている。

8 (PL. 16—16) 径8.9cm，高さ3.8cm，焼成は良く，色調は青灰色，胎土中に若干の粗砂粒を混入する。内側は横なで，外側体部はヘラ削りののち横なで，底部はヘラ削りによる整形である。

9 (PL. 16—10) 径10.9cm，高さ3.7cm，焼成は良好，色調は青灰色で，胎土中の砂粒の混入は非常に少ない。内側は横なで，外側はヘラ削りののちなでで整形している。

10 (PL. 16—15) 径9.8cm，高さ2.8cm，蓋とも考えるが坏として扱かった。焼成は良好であり，色調は青灰色で，胎土中に若干の粗砂粒を混入する。内側と外側体部は横なで，底部はヘラ削りによる整形がなされている。また外側ほぼ中央部には一条の凹線が巡っている。さらに底部にはヘラ記号が認められる。

11 (PL. 16—7) 径12.8cm，高さ3.8cm，焼成は良好，色調は青灰色で胎土中に若干の粗砂粒を混入する。粘土紐巻上痕が残る。内側は横なで，外側体部は横なでにより整形され，外側底部はヘラ削りで仕上げられている。

12 底部の破片であるが坏と考えられる。底径7.5cm，現存高1cm。焼成は良く，色調は青灰色で，胎土中若干の粗砂粒を混入する。内側は横なでによる整形，外側はヘラ削りののち，なで手法により整えられている。外側底部から体部にかかる所にU形のヘラ記号がある。

13 (PL. 16—13) 径10.4cm，高さ4.3cm。焼成良く，色調は青灰色で，胎土はきめの細かい精良なものである。内側は横なでにより整形され，外側体部は横なでにより仕上げたのち1条の沈線が渦巻状に五巡している。底部はヘラ削りである。

14 (PL. 16—12) 径9.3cm，高さ3.6cm，焼成良く，良調は青灰色で，胎土中に若干の砂粒を含む。内側と外側体部は横なで，底部はヘラ削りにより整形されている

壺 15 (PL. 16—17) 口径9cm，高さ10,6cm，焼成良く，色調は青黒色で，胎土中に粗砂

粒を混入する。口縁部は，ラッパ状に広がり，胴部最大幅は 8.2 cm。整形付外側で胴部上半。より口縁部まで横なでによる。底部は平面状で，胴部下半とともに不定方向のヘラ削りである頸部内側にはしぼり痕が顕著であり，外側にもわずかに残っている。胴部最大巾よりやや上部には二条の沈線が巡らされている。孔は径約1.4cmで，沈線上に斜上方から穿たれている。

横瓶　16 (PL. 16—18) 胴部復原幅11.8cm，残存高 6 cm，焼成は良好で，色調は黄灰色，胎土中には若干の粗砂粒を混入している。内外側は横なで，底部側壁はヘラ削りにより整形されている。

17 (PL. 16 -8) 土師器で高坏の脚部であろう。底部推定幅 5.5cm，現存高 4.9cmである。焼成は良く色調は赤褐色であり胎土は水ごしされた精良なものである。脚部内側には粘土紐巻上痕が残り，外側はなでにより整形されている。

18 (PL. 16—11) 土師器高杯脚部破片で現存高，3.5cmで17よりやや大形である。色調は黄褐色で，焼成は良く胎土中に砂粒と若干の雲母を含む。

19 (PL. 16—14) 須恵器頸部で口縁幅6.7cm現存高5.5cmで焼成は悪く，色調は淡灰色，胎土中若干の砂粒を混入する。内・外側共に横なでにより整形され，口辺部外側には 2 条の沈線が巡っている。

2 鉄器，石器　　(PL. 17, Fig. 28)

鉄鏃　1 (PL. 17—8) 大形の鉄鏃で完形品である。長さは14.2cm，幅の最も広い所で3.9cm厚さは平均して 0.5 cmであった。

刀子　2 (PL. 17—7) 細片ではあるが刀子と考えられる。茎は現存長約 2.5 cmで断面は方形，現存刃部は幅約0.85cm，厚さは0.3cmである。

不明鉄器　3 (PL. 17—9) 現存長7.8cm，幅は一定していない。偏平な部分に約90度に折れ曲る断面方形の部分が付いており，偏平部には頭部が方形を呈する断面円形の釘が打たれている。

4 (PL. 17—10) 3 と同性格のものと考えられ，偏平部には断面円形の釘が二ヵ所に斜めに打たれている。現存長 7.6 cm，幅は1.7～0.5cmと一定していない。幅の狭くなった所には，カヤの葉状の植物質の痕跡がかすかに認められた。

5 (PL. 17 -11) 10，9 に似た本体に大形の断面方形の釘が打たれている。本体は釘の打ち込まれている付近は幅も広く薄手であるのに対して，ここから遠ざかるに従い厚さを増していき現存の端での断面は台形を呈している。計測は釘の現長4.0cm，厚さ 0.7～0.5cm。本体は長さ6.5cm，幅は1.2～0.7cmである。

石鏃　6 (PL. 17—6) 材質は黒曜石である。

7 (PL. 17—3) 材質は黒曜石で先端を欠失している。

8 (PL. 17—3) 材質はサヌカイト製である。

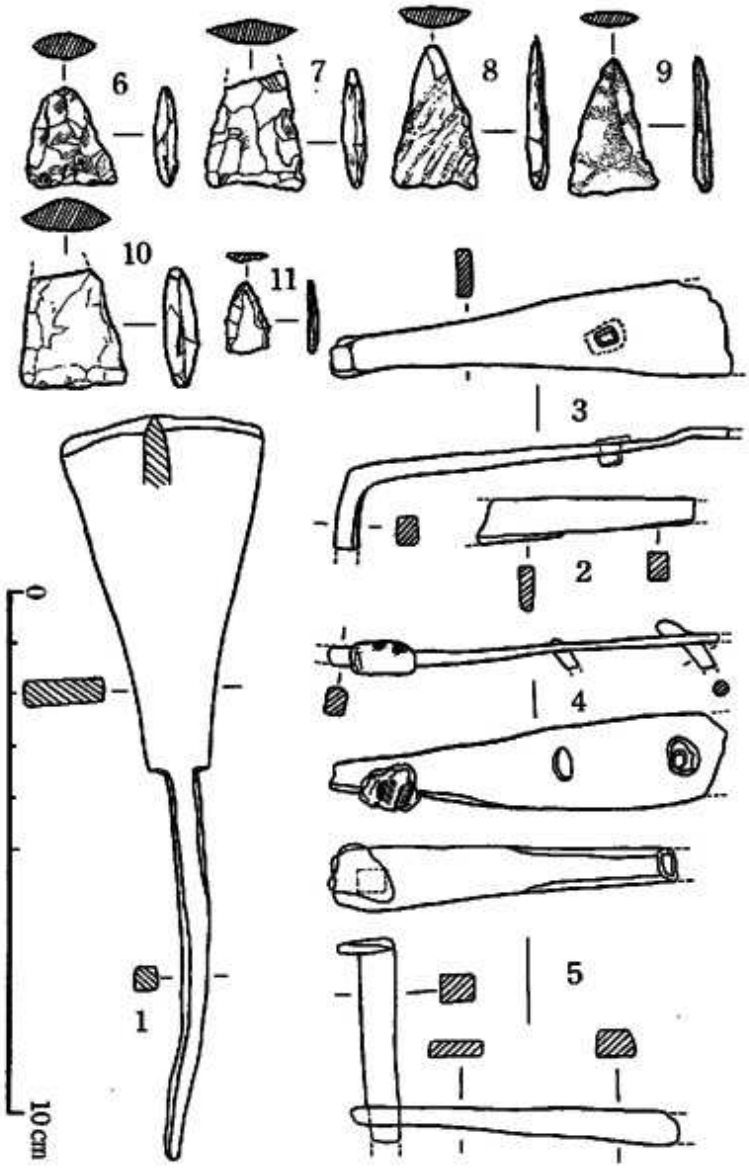


Fig. 28 鉄器および石器実測図（縮尺2/3）

9 (PL. 17—4) サヌカイト製で非常に薄手のものである。

10 (PL. 17—5) サヌカイト製で先端を欠失しているが厚手のものである。

11 (PL. 17—1) キヌカイト製で非常に小形である。

（大川清，井博幸）

3 まとめ

鰐口古墳は弥生時代の遺構を整地して構築されたものであり，墳丘は後世の開墾により削平されているが，南北約13m，東西約10mで周溝をめぐらした円墳である。古墳は丘陵の緩傾斜面に築造されており石室は墳丘中心よりやや山側に寄せて構築されている。この事は無計画な築造によるのではなく，むしろ盛土との関係から石室を高所に寄せて築かれたものであって平地から望見する者に対して墳丘をより大きく見せるための努力がはらわれた結果であろう。

さて古墳の築造年代を知る手がかりとして須恵器があるが調査区域内での器形の判明する土器は土師器を含めて19個体分と少ない。これらの土器がすべて同一時期のものとは考えられない。則ち本古墳出土の須恵器中の13（Fig. 27—13）（PL. 16—13）は福岡県八女市塚の谷窯跡群中の第4号窯上層出土の坏と整形技法，形態共に酷似しており当窯において焼成されたものと見て誤りはないもの[註1]と考えられる。さらに蓋1（Fig. 27—1）（PL. 16—3）の外側に認められるヘラ記号についても塚の谷1号窯跡出土品に類似するものが認められる。同報告書によれば第1号窯の操業は須恵器編年Ⅴ期（6世紀終末から7世紀前半代まで）の時期に当てられている。また4号窯については皿期Bの時期（Ⅲ期は6世紀中頃から6世紀後半まで）と考えられている。以上の事実からも判明するごとく塚の谷窯跡群と本古墳とはきわめて密接な時期的関係にあった[註2]とともに，同一地域社会に属したものとも考えることができよう。また本墳に副葬された須恵器が時間的隔たりをもつということと横穴式石室のもつ機能からして数回の埋葬を考えせしめるものであり，家族墓的色彩の強い古墳であることは述べるまでもない。即ち第1回の埋葬は6世紀後半頃，つまり塚の谷4号窯上層操業時よりあまり隔たらない時期として大過ないものと考えられ以後7世紀前半頃まで数回にわたって埋葬が行なわれたものと考えられる。

埋葬状態を明らかにする遺構，遺物は何ら検出することが出来なかったが，あえて推察が許されるならば，玄室内の敷石の遺存状態がそれを暗示しているものと考えられる。即ち玄室床面の敷石には約30cm程度の割石と10cm内外の小形の割石が使用されているが，大形の石は石室中心部を横断するような形で敷かれていた。さらに東壁寄りにも比較的多く遺存している，10cm内外の小形の敷石は中央部と東壁寄りの大形の石で区画された場所の内側に密に敷かれている。大形の石は意図的に敷かれたとも考えられることからしても棺を安定させるためのものと考えることが妥当ではなかろうか。これらの推測よりしても第1回の埋葬は長さ約190cm，幅約80cm内外の木製の棺を石室に対して直角に安置したものと考えられる。さらに次の追葬時にはその手前玄門寄りの部分に同方向でおわれていたとすることも許される推察ではなかろうか。（大川清，栗原和彦，井博幸）

註1　小田富士雄他『塚の谷窯跡群』八女市教委員会　昭和44年

註2　註1に同じ。本墳と塚の谷古窯跡群とは直線約6.5㎞ときわめて近接しており，地理的に見ても相互の関係の浅からぬものが認ゆられる。

V 大地田遺跡

1 はじめに

調査の経過　大地田遺跡は，九州縦貫自動車道予定路線の遺跡番号第68地点で，黒曜石散布地としてあげられていたところである。

発掘調査は，昭和45年3月12日から3月21日まで実施した。調査員は次のとおりである。

調査員	福岡県教育委員会文化課技師	柳田康雄
	〃	副島邦弘

なお，発掘調査及び整理にあたっては福岡大学の桜井康治・磯部昭憲及び別府大学の池辺元明の諸君の協力を得た。また，現地においては筑後市教育委員会社会教育課の協力も得た。

調査日誌

3月12日　地形に応じて，64番地をA区，65－1番地をB区とし，3m単位の方眼の地区設定を行なった後，B区から表土はぎを行なう。同時に200分の1で地形測量を始める。早くも表土下の黒色土に掘込れた溝を発見する。

3月13日　一部表土下の黒色土を取り始めたが，午後から小雪がみぞれに変ったので作業を中止する。

3月14日　B1～B3の表土はぎを始め，一方，C1・C3の溝を掘り上げた。地形測量は，調査区北側を行なう。

3月16日　B区の黒褐色土はぎと，C5・C1の溝掘りを行ない，溝をほぼ完掘する。A区の発掘にかかる。

3月17日　B区の黒褐色土の残りと溝の仕上げを行なう。A区では整地層の下は礫層が続く。

3月18日　B区の写真撮影の後，水糸張りを行なう。A区は遺構が発見でさないので埋めもどしを行なう。

3月19日　B区は20分の1で平面実測を行なう。A区は埋めもどし続行。B区も一部埋めもどし始める。

3月20日　地形測量，遺構平面図完了。本日で埋めもどしもほぼ終了する。

3月21日　機材の点検と後始末をし，付近の遺跡の分布調査を行ない本日をもって調査を完全に終了する。（柳田康雄）

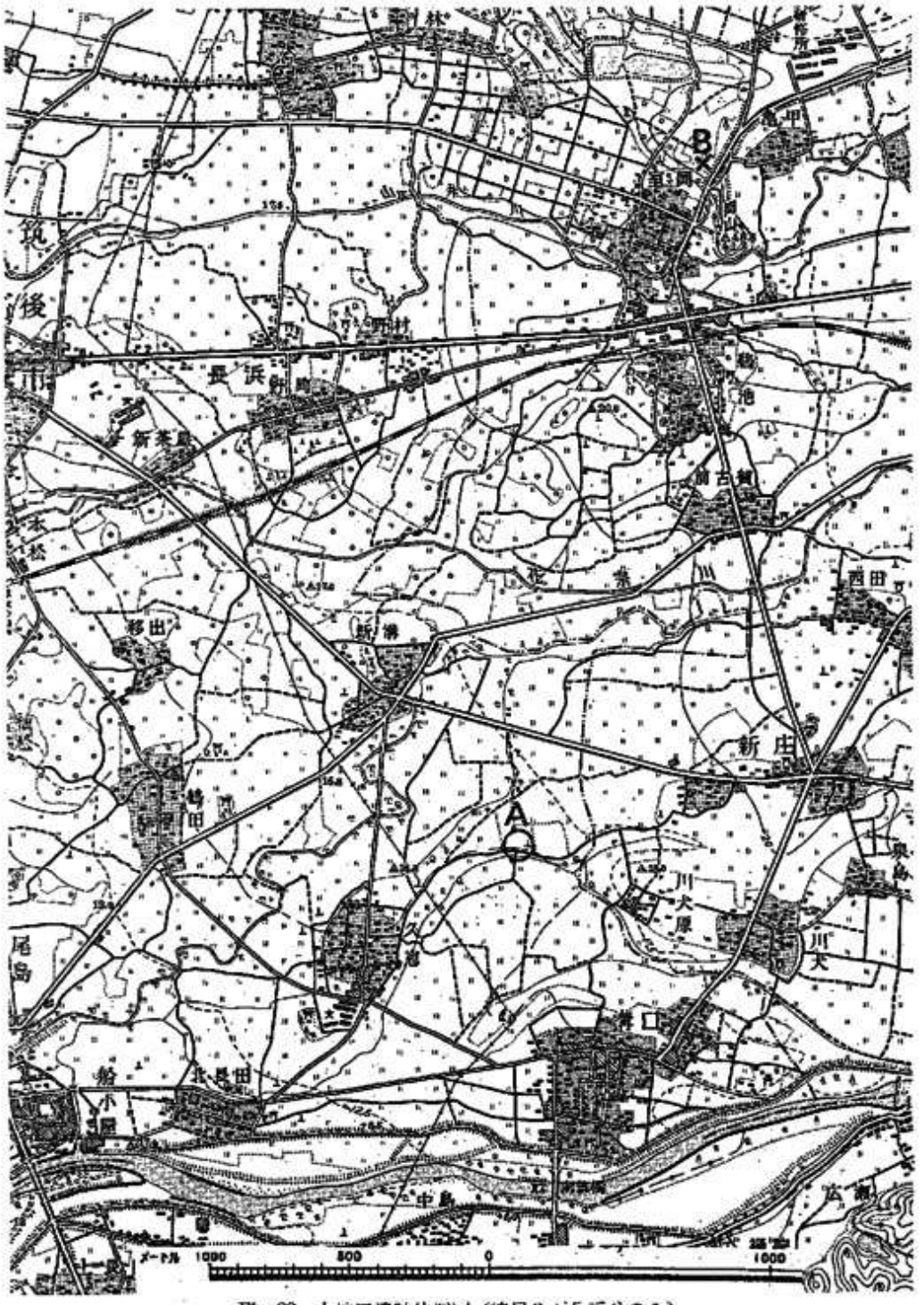


Fig. 29　大地田遺跡位置図（縮尺2万5千分の1）

A　大地田遺跡　　B　亀の甲遺跡

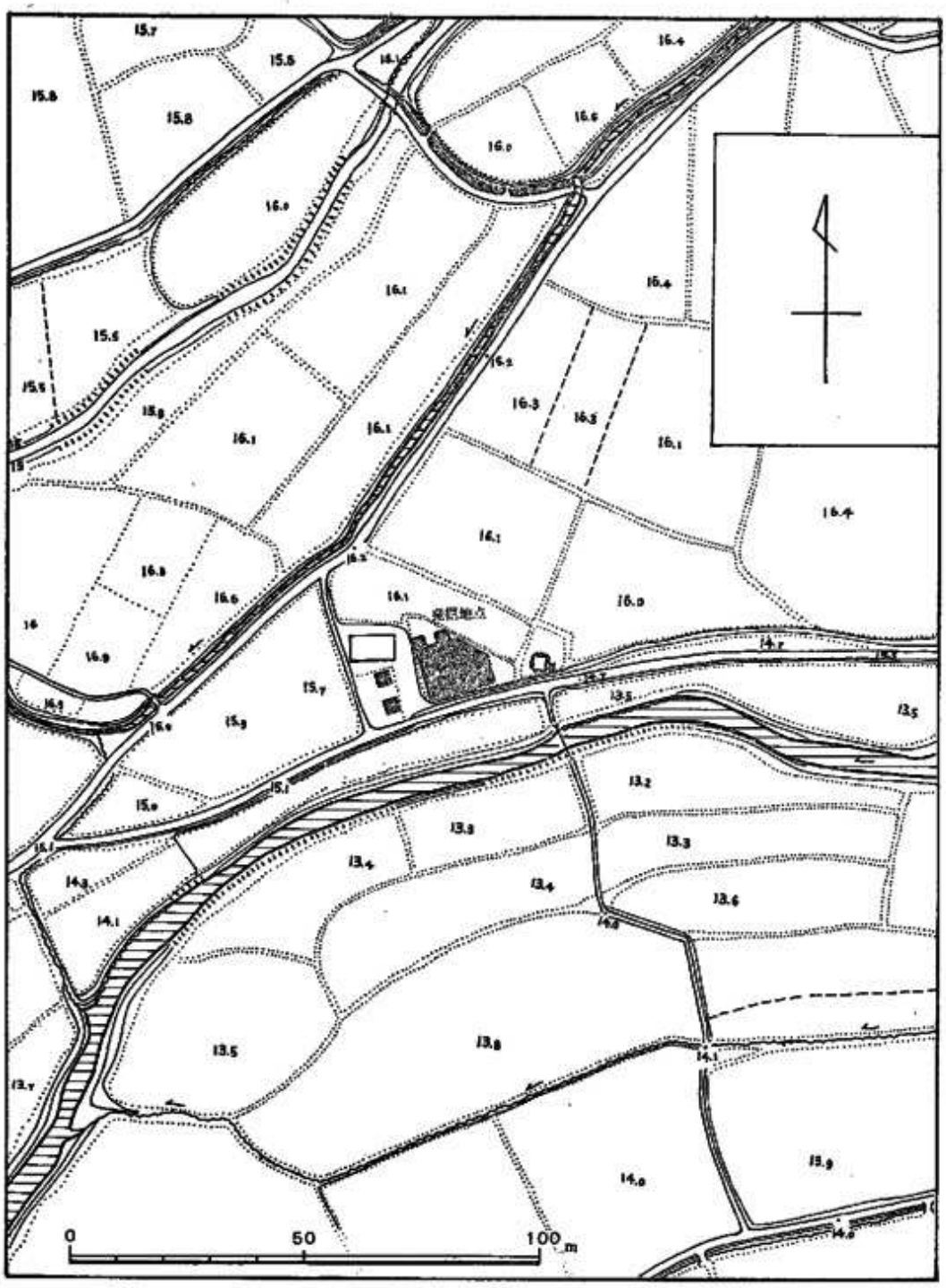


Fig. 30　大地田遺跡地形図（縮尺1/1500）

2 遺跡の立地

筑後大地田遺跡は，福岡県筑後市大字久恵字大地田にある。筑後市は，筑後川や矢部川が潤す九州最大の筑後平野の東部に位置し，九州山系から張り出した水縄山脈と筑肥山脈に南北をはさまれた平野にある。

遺跡は，筑後市東部，八女市との境に近く，矢部川の度重なる氾濫によって出来た自然堤防上に位置している。

この遺跡の周辺には，数多くの遺跡が点在する。平野部には，押型文土器が発見された裏山遺跡や弥生時代終末から古墳時代初頭の集落で知られる孤塚遺跡等がある。また筑肥山脈，瀬高町，立花町の山手には，古墳群や横穴群が密集して存在する。一方水縄山系からのびた大小の丘陵上にも，いくつもの群集墳がある。中でも長峰丘陵とよばれる東西に長い台地上には装飾古墳として，石人山古墳・弘化谷古墳・乗場古墳・丸山古墳や，筑紫国造磐井の墳墓として著名な岩戸山古墳がある。また，昭和36年調査された亀ノ甲遺跡（弥生前・中・後期）もこの丘陵に所在する。（樣井康治）

3 溝と遺物

押型文土器　(Fig. 31)　本遺跡から縄文早期の押型文土器が2片でている。ともに文様は楕円文である。

これらの縄文式土器は矢部川の氾濫で流入したとしか考えられない。1は出土地点は黒褐色土直下で，色調が褐色で，胎土に小砂と雲母片を混入して筑成は良好である。器壁の厚さは11㎜

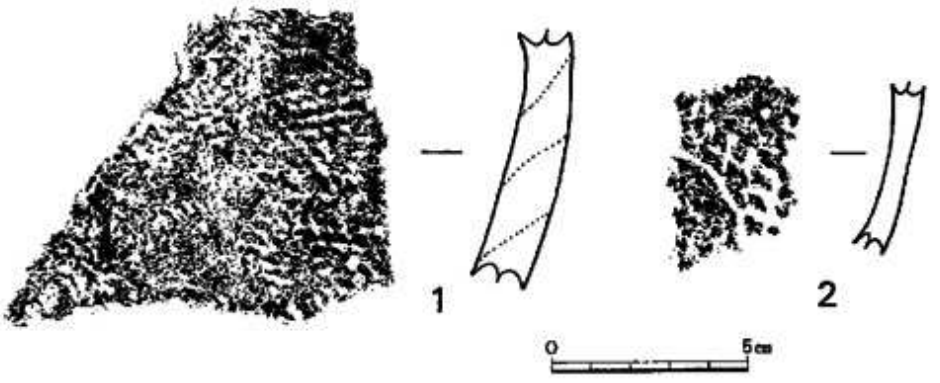


Fig. 31　押形文土器拓影（縮尺1/2）

で，断面観察で巻上にて作っているものと思える。

楕円の粒は小さな穀粒文で，横位の全面施文で，器面は荒れており，施文原体は1.4㎝内外である。

2は，結上質褐色土B－4区から出土しているもので1にくらべて粒は大きく，色調は灰褐色を呈し，胎土に小砂と雲母片が混入し，焼成は良好で，器壁は厚さ8㎜であり，縦位の方向に廻転施文されている。原体巾は1.2㎝で，器面は荒れている。

この地方では，断片的に押型文の出土地点が確認されているが，出土例は他の遺跡も本遺跡と同様である。　出土例については九州縦貫自動車道報告Ⅰのp45～p46参照されたい。

石器　(Fig. 32) 本遺跡からは石器の条件を具備したものは，磨石2点が確認された。発掘前の表採の折には黒曜石散布地として，リストアップされておりながら，調査のおりには黒曜石のフレイクさえ見い出せなかった。遺跡の立地条件は矢部川によって大きく左右されたものと思われる。1と2は，石質は硬質砂岩で石皿とセットとして使用されたもので，両者とも扁平な河原石を利用して両面及び側縁を研磨したもので，相当使用されたものと思われる。時期としては縄文期の遺物である。押型文土器と同様流入したものである。

（副島邦弘）

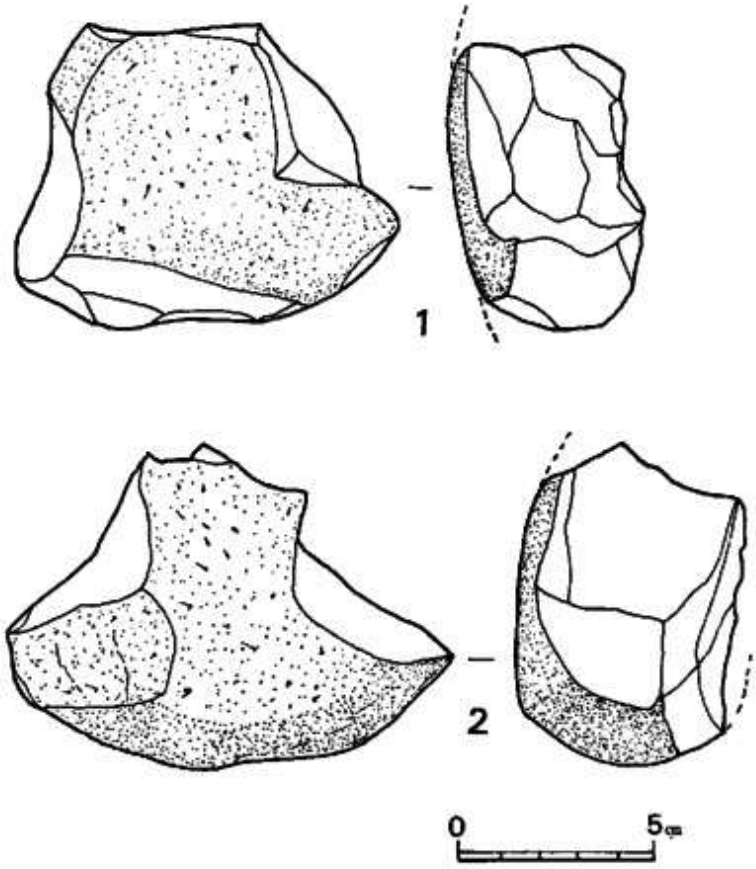


Fig. 32　石器実測図（縮尺1/2）

溝　(PL. 18・19, Fig. 33—34)　大地田遺跡の今回の調査で遺構らしきものは，N—75°—E，の方向に通る直すぐな溝を1本確認しただけであった。Fig. 34の断面図を見ると，本来溝の断面形は長方形であったものが，埋没する過程で肩が崩れていったものらしい。溝は，表土下の火山灰質の黒褐色土から掘込まれており，深さ約1 *m*である。調査した長さ15*m*の溝の間

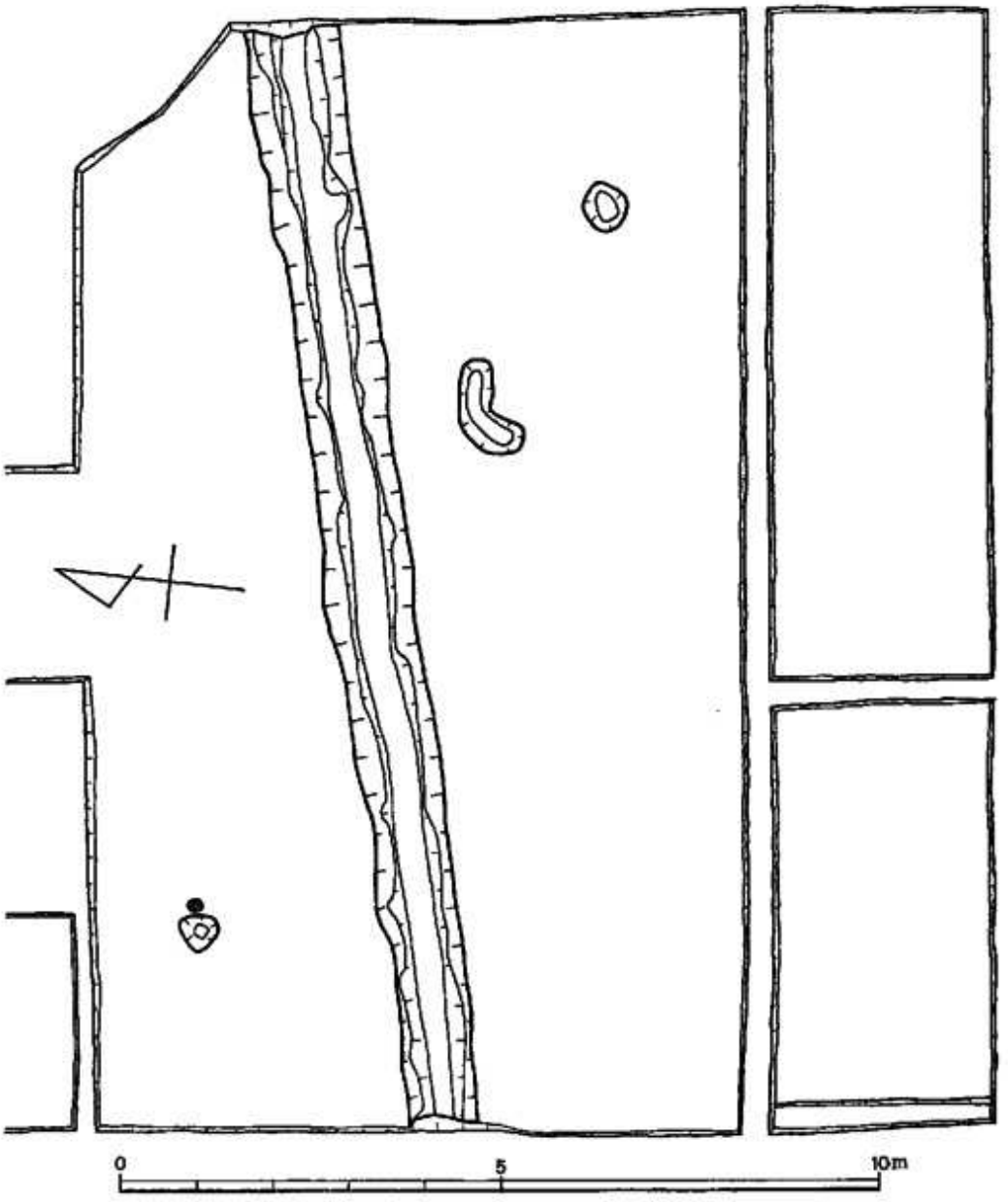


Fig. 33　調査地域平面図（縮尺1/100）

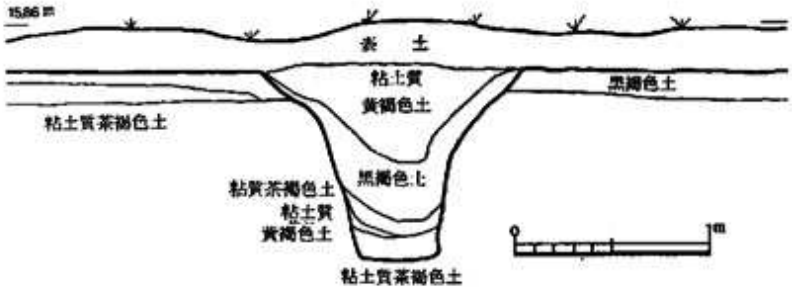


Fig. 34　溝土層断面図（縮尺1/40）

では若干の深さの差はあるが，とくに一方が深いというものではないので水路でもないようである。溝の底は幅40cmの平らなもので，上端幅は現状で1.3 mある。

溝の遺物　溝内では，大半の遺物は中層の黒褐色土層において発見されたが，土錘の外は細片で，量も少ない。

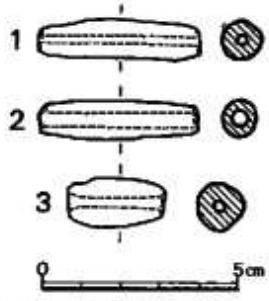


Fig. 35　土錘実測図（縮尺1/2）

土錘（Fig. 35）1は長さ4.1 cm，最大径1.0 cmのもので，ほぼ中心に貫通した孔の径は約0.2 cmある。赤褐色を呈した焼成が悪くもろいものである。2は表土中で発見されたもので，長さ4.0 cm，最大径1.0 cmあり，1とほとんど同形である。しかし，孔が径約3.5 mmあり1より大きい。3は表面採集によるものであるが，1.2とは異なっている。長さ2.3 cm，最大径1.2 cmの大きさで，孔は両端が径0.4 cmと大きく，中ほどが0.2 cmと小さくなっている。焼成も他のものより良く堅い。

青　磁（Fig. 36）青磁は3個の細片が発見されたが，1個底部だけが様式のうかがえるものである。細くて割合高い高台が付き，内側底面に双魚文が施されている。したがって，これは南宋の竜泉窯の双魚文碗と思われる

土師器皿（Fig. 37）1.2両方とも糸切り底で，外底面以外は横なで仕上である。内底面には左巻の渦状の隆起を残している。1は灰褐色を呈し，焼成は良好であるが，2は褐色で細砂を含み，焼成もあまい。1は表土出土で，2は溝の最上層の粘土質黄褐色土層の下部で発見された。（柳田康雄）

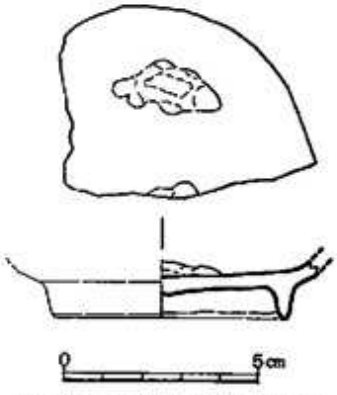


Fig. 36　青磁実測図（縮尺1/2）

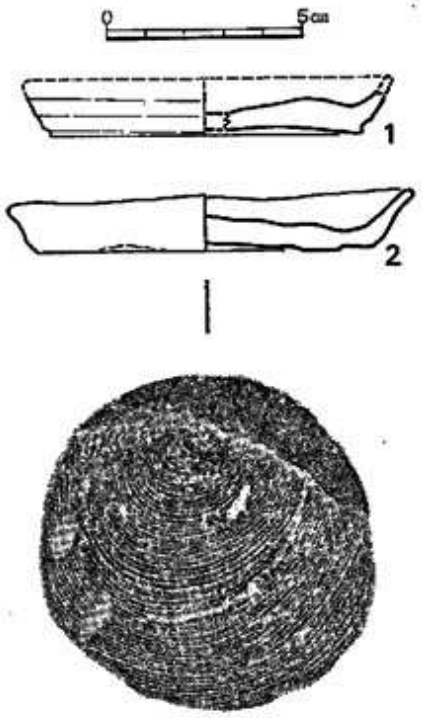


Fig. 37　土師皿実測図（縮尺1/2）

4 おわりに

分布調査では，黒曜石片が採集されていいので，縄文時代の遺構があるのではないかとの予想で調査を行なったが，遺構は発見されず早期の押型文土器片を2個発見したにすぎず，黒曜石片は1片も発見できなかった。

遺構としては青磁片，土師器片，土錘を出した溝1本のみであった。出土した土師器，双魚文碗から室町時代以後の溝であると思われるが，用途は不明である。出土遺物の中に土錘が含まれていたことは，近くで漁労が行なわれていたのであろうが，土錘の大きさから大きな網ではないだろう。遺跡の南方1.2㎞のところに矢部川があるのでここで使用されたものであろう。（柳田康雄）

Ⅵ 年の神遺跡

1 はじめに

調査の経過　年の神遺跡は九州縦貫自動車道予定路線内の発掘調査地域第70地点で，黒曜石の散布がみられ，黒曜石の風化の点からみて古いものであると考えられていた。

発掘調査は昭和45年3月1日から3月11日まで実施した。調査員は次のとおりである。

調査員	福岡県教育委員会文化課技師	柳田康雄
	〃　　〃	副島邦弘

なお発掘及び整理にあたっては福岡大学歴史研究会の山崎茂孝・水城一俊・櫻井康治の諸君と，調査に対して，大牟田市教育委員会の清田保・宮崎昌美・蓮尾甚一郎の諸氏に絶大なるご協力を賜わった。また快く，民宿をさせていただいた久保琢磨御一家，地主の金子寿人氏，作業員として参加された大字四箇の各位に対して厚く謝意を表わすものである。

調査日誌

3月1日　晴。公団の水準点から絶対高を移動する。遺跡の北側に仮B.Mを75,522*m*として移す。

3月2日　曇のち雨。事前に打ち合わせに従って，地形に対応させグリット設定を行ない，本遺跡が道路予定線のカットの部分でそれを全面調査することとし，表土剥ぎを開始する。

3月3日　雨。作業中止。宿舎において遺物整理及び遺跡についての打合せを行なう。

3月4日　曇ときどき小雨。遺構の検出を急ぐ。台地突端に溝状遺構を確認する。

3月5日　晴。遺構の確認及び遺構の調査，東西断面実測。北東のみかん園から遺跡遠影写真撮影。

3月6日　晴。溝状遺構の断面実測。遺構検出を続行，柱穴らしきピット群を検出。

3月7日　晴。溝状遺構には各コーナーに柱穴を確認する。溝より，中世の陶器・灯明皿・石鍋片を検出する。実測のための水糸くばりを行なう。南北の断面実測。

3月8日　晴。遺構全景の写真撮影。

3月9日　曇のち雨。遺構の部分写真撮影。午後より降雨のため作業中止。宿舎にて遺物整理。

3月10日　雨。日程の関係から雨中，実測を強行する。

Fig. 39　年の神遺跡の周辺（縮尺5万分の1）

1. 飯江城　2. 浦小路古墳　3. 飯江朝日谷古墳群　4. 甲田中原窯跡　5. 甲田中原散布地　6. 稲荷山頂上古墳　7. とめ塚古塚　8. 宮部散布地A　9. 三池山城(舞鶴城)　10. 三池山城　11. 宮部散布地B　12. 宮部散布地C　13. 井毛谷遺跡　14. 領境石1号　15. 領境石2号　16. 年の神遺跡

3月11日　晴。機材整理及び機材運搬。本日をもって発掘調査を終了する。（副島邦弘）

遺跡の位置　年の神遺跡は福岡県大牟田市大字四箇年の神１４７８の１に所在する。年の神地区は，大牟田市の東端，所謂肥後街道沿いにあって熊本県南関町との県境に接し，街道の山系に挟まれた谷口集落のひとつであり，遺跡は筑肥山脈の一山系である障子ヶ丘より，南にのびた丘陵の先端近くの標高75*m*，水田よりの比高５*m*の街道を望む舌状台地に位置している。

遺跡の周辺には街道の北，山門郡瀬高町には女山神籠石遺跡・清水寺本坊庭園が知られており，同山川村には多数の古墳群があり，街道を挟んで三池郡高田町には田浦朝日谷古墳群などがある。またこの街道は筑後から肥後平野に抜ける重要なルートとして，太宰管内志〔扶桑記勝五巻〕に「肥後ノ國南關は筑後ノ堺なり大津山ノ關とも云。平家物語に出し處是なり是より熊本へ十一里あり。〔長瀬氏云〕松風ノ關は玉名郡大津山にあり肥後・筑後二國の堺の山の切り通シのやうなる處を今背戸口といふ是古の松風ノ關ノ趾なり國とも肥後ノ国ノ内なるを故有て亂世の此より筑後につけ此關山を隔て南を南ノ關よりはすこし南にあり北を北ノ關と云筑後の内なり」とみられるごとく中世から近世において関が置かれ，現在その名残りとして附近には北関・関東・関町などの地名を止めており，三池郡高田町飯江城跡がみられる。また，遺跡に隣接した湯谷地区には，筑後柳河領と肥後領との領境標である「四箇柳河領境界石」三本があり，古い方は36cm角の花崗岩の柱で三段に折れ下部２個が残っている。薬研彫りの文字の判読はやや困難であるが「從是西北筑後國立花左近將監領内柳河札ハ壱里四里二十町余」とある。新しい方は良質の35cm角の砂岩の柱に肉太の蒲鉾彫りで「從是西北筑後柳河領柳河札ハ壱里二十町余」とある。古い江戸初期のものが折れたので幕末のころ新造したものか。もと肥筑国境の小流の畔，参勤交代道の北側の石の基壇に建てられていたが，明治の廃藩置県にともない県境標柱となり，取り除かれたが，昭和39年折れてない新しいものは旧藩時代のもとの位置に復原建立され，古いものと共に民俗資料として現在保存されている。（山崎茂孝）

Fig. 38　四箇湯谷柳河領境界石第２号
（民俗資料県指定昭38年1月9日）

註1　「太宰管内誌」伊藤常足　肥後国下益城郡

註2　「福岡県の文化財」福岡県教育委員会（民俗資料）。1969.

「大牟田の文化財」大牟田市教育委員会。1969.

Fig. 40　年の神遺跡地形図（縮尺1/1500）

2 年 の 神 遺 跡

発掘区の設定　発掘区域は舌状台地の先端の約200平方米を全面発掘を行なった。

道路中心杭を原点として，南北軸N—6°28′- E，東西軸N—83°32′—Wを基準として，1辺3メートルのグリットを設定した。南北軸をアルファベット，東西軸を算用数字で表示する。

遺構は，小ピット・柱穴・土壙及び方形の溝状遺構が確認された。（櫻井康治）

層　位　本遺跡の層位は3層からなる。

Ⅰ層　表土。旧耕作土で，厚さは20～40cm。北東に出た舌状台地で，その傾斜にそって堆積している。色調は暗褐色。土質は腐植土を多く含んだ砂質土で粘りがなくパサパサした感じである。

Ⅱ層　茶褐色土。厚さは10～30cmである。色調は茶褐色。土質は粘土質を帯びてベタベタし，砂岩質の小礫を含んでいる。

Ⅲ層　基盤。阿蘇山から降った火山灰のローム層である。（水城一俊）

遺　構　遺構は，溝状遺構と柱穴ピットと土壙である。

1. 溝状遺構　（P L. 21, Fig. 41・42）台地の東端にあったため，近世において削平されており，全貌を明らかにすることができなかった。遺跡自体は果樹園（ブドウ園）で，表土からの攪乱が基盤まで達していた。地山を切りこんで遺構が存在する。遺構内に堆積する土は，暗褐色土である。遺構の残存部は全体の$\frac{1}{4}$で，わずかに西側の一辺を知ることができた。一辺6.7m×残存部北最大辺2.3mである。軸線はわずかに西へふれている。溝の底は平坦で，断面は口が大きく開くU字形をなし，深さは地山の上面より25～30cm，幅130～150cmを測る。溝底に自然石や河原石が底面に密着し，溝底の2つのコーナーには柱穴を2本確認する。柱穴は30cm内外で溝底より，深さ15～20cmを測る。溝内からは石鍋2点と皿形土器片十数点と白磁を見出した。溝にかこまれた方形部分は，中心に2本柱穴をみとめる。大きさは30～40cm，深さ10～20cmである。

2. 土壙　地山を切り込んだもので，平面は楕円形を呈する。断面はだらだらした擂鉢状をなし，底面は平面形に類似する。また柱穴も確認されている。堆積した土は暗褐色土であるため，時期は溝状遺構に併行するものと思われる。しかし，溝状遺構の北側の上壙は堆積土は暗褐色土ではなく，表土が堆積しているため地主にたずねたところ，ゴボウ畑にした由を聞き納得を得た。

これらの土壙は，方形の溝状遺構にともなうことと考えられない。柱穴と思われるものは，その関連性を導き出すことはできない。ただ，統一性のない土壙あるいは柱穴ピットは住居跡にともなう柱穴と考えることは疑問である。（副島邦弘）

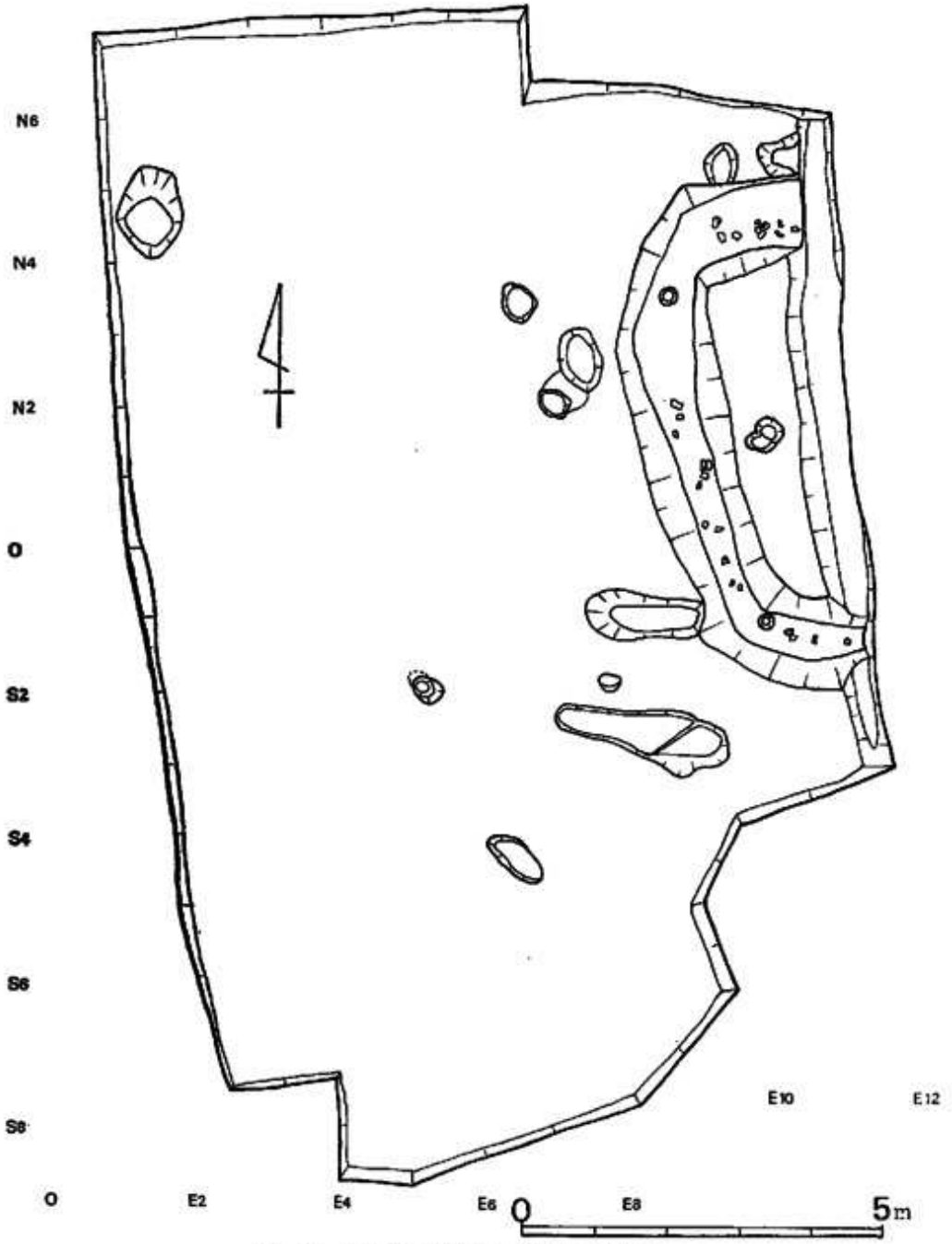


Fig. 41　年の神遺跡遺構配置図（縮尺1/100）

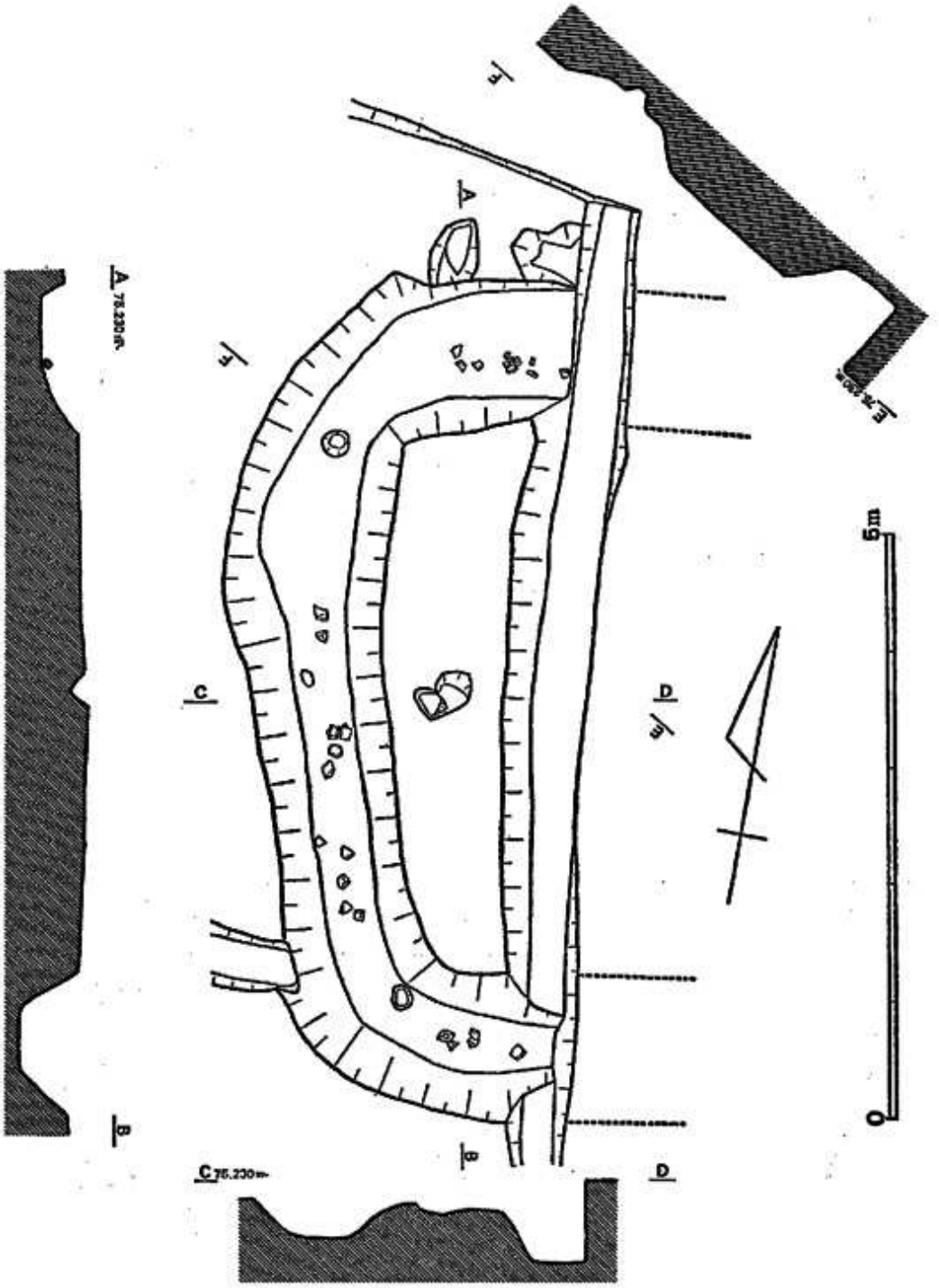


Fig. 42　溝状遺構実測図（縮尺1/60）

遺物　本遺跡から出土した遺物は，土師器・石鍋・青磁・白磁・黒曜石で，わずかに三十数点であった。

1　土師器（Fig.43—1～6）総数21点で大部分は，溝状遺構から出土している。口縁部の細片から復元実測したものであるため，口径は多少誤差を生じていると思われるので考慮願いたい。

土師器は小皿で，一部灯明皿と使用したものも含まれている。1は茶褐色土層から出土したもので，口径は9㎝で高さ3㎝，色調は灰褐色で，胎土に細粒砂を含んでおり焼成はやや悪い。底部は若干上がりぎみで，体部下半の底部に近い部分には，指痕が残っている。2～6は溝中より出土したもので，2は口径9㎝，高さ1.7㎝，色調は灰褐色を呈し，胎土に雲母片の混入がみられ，焼成はややざつである。器面は横なで糸切り底である。3は口径8.8㎝で，高さ1.5㎝色調は黄褐色で，胎土に細粒砂を含む。焼成はざつで器面は横なで，ざらついている。体部には下半に一段がつく。4は口径10㎝，高さ1.7㎝で，色調は黄褐色胎土に雲母片と細粒砂の混入がみられ，焼成は良好で器面は横なで，体部に一段だんがついている。5は口径9.4㎝，高さ1.5㎝で，口縁部はやや外側に開く体部下半にはほぼ直立ぎみである。胎土は細粒砂を含み，色調は灰褐色で焼成は良好で器面は横なでである。6は口径11㎝，高さ2㎝，口縁部はやや直立ぎみで外反する体部下半は直立ぎみで，器面は横なでで焼成はざつである。

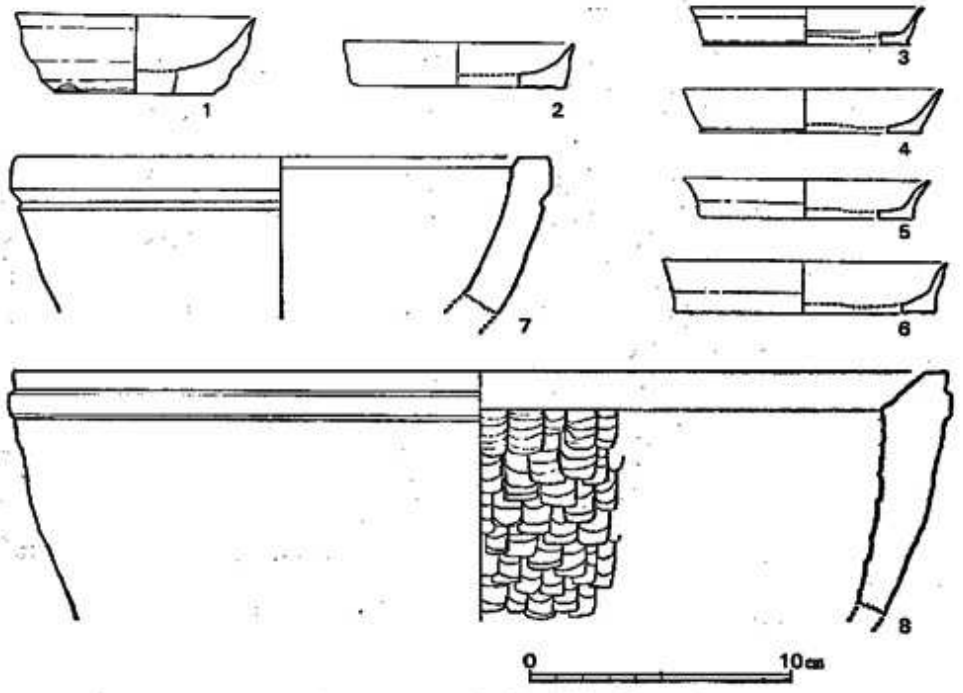


Fig.43　年の神遺跡出土遺物（縮尺1/3）

おおまかに２つに分類できる。すなわち，体部下半に一段だんがつくもの（1・3・4）。体部下半にだんがつかないもの（2・5・6）である。

2　青磁・白磁　細片が３点（白磁２点，青磁１点）出土している。青磁・白磁は福建省南部方面の産で13世紀末か14世紀代のものと考えられる。[註1]

3　滑石製石鍋（Fig.43—7・8）溝中より２点出土したものである。7は石材は滑石で，大きさは口径20.5cm，残高６cmで平滑に鋭利刃器で剝離調整したものである。表裏の剝離調整はひじょうに細かく，その上整形も良好である。8は前者よりも色調は黒味を帯びている。口径36cm残高10cmで表裏の剝離は著しく相違する。表面はほぼ前者と同様に細かく仕上げているが，裏面は鑿痕が上下へと押し引きのように削り出されている。鑿痕は巾1.5cmである。口縁部直下に鍔状の突帯が創出されている。

これら石鍋は一般に石釜とも呼ばれている。滑石の原産地は山口県防府市西部・長崎県西彼杵郡雪ノ浦が名高い。しかし，福岡県飯塚市八木山峠にも出土するという。[註2]一般的に雪ノ浦出土の石よりも[註3]八木山で製作された石鍋は，製品として粗雑であると思われるが，製品によって差がある。すなわち，工人の技量差が出てくるためのもので，一概にはいうことができない。滑石製石鍋は長崎県・佐賀県に多く分布し，熊本・鹿児島遠く南の島まで分布しているという。本州では畿内周辺からもわずかであるが出土例を聞く。福岡県では，飯塚市八木山・太宰府町筑紫工業，大宰府の史跡，久留米市朝妻・宗崎・筑後川底・朝倉平野・福岡市今津・周船寺・和白で出土している。その分布は県下に広がっていると思われる。各遺跡は中国製の青磁片・白磁片・陶器片・瓦器をともなうことが知られている。[註4]

雪ノ浦の滑石製石鍋製作については，長崎県史蹟名勝天然記念物報告書，[註5]の中で内山芳郎氏が作図して述べている。その中で，

(一)　岩壁面に鑿打を加えて種々なる広さの平坦圓面を作る箇所あり。

(二)　これらの半面あるものは種々なる大きさの圓周を劃せる刻線を存するものあり。

(三)　種々なる大きさの断頂圓錐体・岩壁より瘤状に突出せるものあり。（この種の状態の遺物，最多数を算す）

(四)　断頂圓錐圓體の基底に近き側壁の部に階段ありて，全形重断頂圓錐體となるものあり。

(五)　既に鍔を備え殆んど完成石鍋の相を呈するものあり。

(六)　地上にて発見する鍋は其外形(五)と同一なり。且内面には凹所を存す。という。

略図は加工痕の模型と称して作図されている。筆者の意図するところとして並べかえると，Fig.44となる。本遺跡の石鍋はFig.43—7は，(三)に該当するもので，Fig.43—8は(三)ないしは

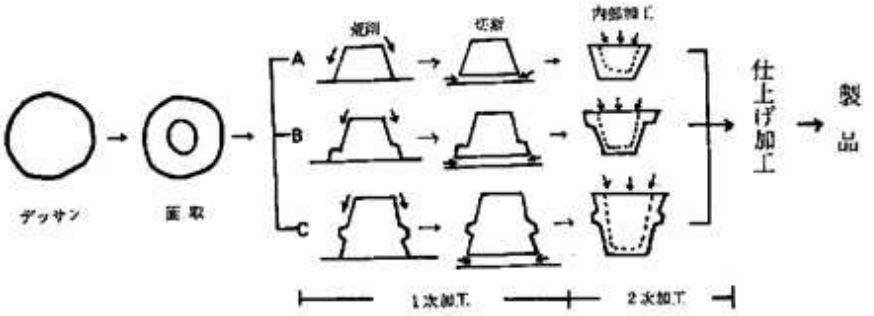


Fig. 44　長崎県西彼杵郡雲ノ浦遺跡石鍋製造模式図

(五)の中間を行くもので鍔の付き方が低いので，より巳に強い。

また結論の例に石鍋は岩壁より直ちに刳抜させるものにして其製作工程は外底より始めて口縁部に及ぼし，口縁面にて全形を母岩より離断し，然る後，内面を整刻す。全形離断前鍔其他の必要なる工作を可及的充分に行なう」といっている，これらの結論は製作工程の略図の通りである。

石鍋が文献上に登場するのは弘長元年三月十七日の仁和寺旧蔵の譲り状である。[註6]

また石鍋と製鉄の件に関する文献として金屋子神の祭文に述べている。[註7]

江藤正澄は「石鍋考」を表し，筑前国怡土古墳中より出た石鍋に多数の穴が存在するのを見て，「和名類聚抄」[註8]「資益王記」「和訓栞」等を引用して，

「この石鍋は上代米を水に浸し火にかけ蒸して餐饌とせしものなりと覚ゆ，尚鍋尻に黒く煤のこげ付たる跡あざやかに見る。これまさしく当時其用に供したる徴證と云うべし」卓越した見解であるが，しかしこの石鍋は流れこみで古墳時代のものではない。平安時代あるいは鎌倉時代の遺物と思われる。鍋は古代より煮沸具とされている。万葉集に出てくる「貧窮問答歌」[註9]の一節にも古代の炊飯のことが記載され，その当時の生活が目に浮かぶ。米を甑で蒸された強い飯で強飯(こわめし)と称している。平安時代ごろから柔らかい炊飯(たきめし)（姫飯）[註10]が行なわれるようになったといわれ，この炊飯に使われたのが鍋であった。16世紀頃なると強飯は正月や儀式などの場合にだけ用いるようになったといわれる。[註11]

この時期より中世の庶民生活にも姫飯がかなり普及したと思われる。前述の仁和寺の資料においても傍証できるであろう。石鍋から石釜への推移は鍔の使用から出てくる。そして石鍋から鉄鍋への変化がみられる。

これを裏返すと，中世における炊事の変遷を考えなくてはいけない。すなわち囲炉裏の火からつくり付けのかまどの火によって炊事されることとによって釜と鍋は用途分類が行なわれて[註12][註13]

いる。しかし弥生時代には貯蔵用土器と煮沸用土器の分類ができ，古墳時代の炊産用具のセットとして甑・鍋・竈が出土するのである。鍋に代って釜のまわりにツバを取り代け，燃火の無駄と煤を防ぐように改良されたのが釜である。このことは鉄鍋から鉄釜へそして鉄羽釜として用いられるわけである。したがって単に囲炉裏からかまどへの変遷のみが炊飯要因[註14]となったのではなく，白米食の普及が決定的としたのである。このことを考慮に入れると前述の内山芳郎氏の分類については，おのずから鍋が時期的に早く，釜はおそくなってくると考えることも当を得たものと思われる。石鍋の形態分類はFig. 44のA→B，Cとなってくるわけで，若干の疑問点を上げると第二次加工，あるいは仕上げの段階で変更できることである。以上だらだらと述べてきたが，これらをまとめてみると，

1. 石鍋にも形態分類を考慮することができる。鍔がついているものと鍔がついていないものとに分類でき，鍔がついているものが新しく，鍔がつかないものが古いと思われる。
2. 鍋と釜は，鉄鍋と鉄釜の変化よりも，石釜は石鍋の範疇に入るものが多いと思われる。
3. 滑石製石鍋と滑石製紡筒の外筒の関係を考察することが重要になってくる。今回はこの点については省略し，ただ問題提議とする。

（以上），『炊産用具の変遷はすなわち，生活様式[註15]の変化に結びつくものである』ということを見解として結ぶ。

4. その他 黒曜石片30数点をかぞえるが，分布調査の折りに，剥片を表採している。しかしながら調査のおりに出土したものは，小粒で凝縮しており，加工をくわえ，石器をつくる石材の用途には欠けるものである。阿蘇山の火山運動によるものと思われる。（副島邦弘）

註1　小山富士夫氏に御教示を得た。記して謝意を表わす。

註2　山口県防府市西部の大道地区。(防府市史1960)，小田富士雄・鍋久剛紀『防長地方の中世土器』九州考古学15，1962

註3　八重津輝勝「肥前国雷ノ浦遺跡調査報告」考古学雑誌14—14．1924.

註4　福岡市和白遺跡は，本年度福岡市教育委員会文化課が和白遺跡群として調査したもの。

註5　内山芳郎「西彼杵郡雲の浦村に於ける史蹟」長崎県史跡名勝天然記念物報告．1924

註6　証文状事

合

右力王丸昆沙王丸ニ限永代ニ，ニアラン物ハニ可取之。田一反，畠二反，フルキ牛一疋，立ウス一，スルスー，水舟二，カナハー，カマー，石ナベー，カナナベー，（中略）

員数如此，あいかまへて，あいかまへておとゝいの中よく，お御みやつかい奉行人ににくまれまいさて

あるべし。御牛相構心に入て祈いたわるべし。

弘長元年三月十七日　　父力王丸（花押）
(1261)

喜田貞吉「木鍋という名称」民族と歴史4—4．1920，の中にくわしく記してある。

註7　室町時代の作と思われるが，

高天原より備前国志相郡穴薬郷今の岩鍋といふところに降り，吾者是作金者，金屋子神と言ひ，鑄を以て鍋を造り給ふ。依是彼地を岩鍋といふ。其後，白鷺に乗り西国に赴き，出雲国斐伯郡能義郡黒田の奥，比田に着き，火の高殿を建て，灰と砂鉄と集め吹き給へば，鉄の湧くこと限りなし。（以下略）

その資料も基にして，山田新一郎「神代史と中国鉄山」の中で，早期に於ては岩にて鍋様のもの作り，其の中にて鉄を溶解したることを想像する好参考云々……といつている。喜田貞吉は「石鍋」（民族と歴史4—6）の中で，古語にはイシとイハとを混用しているために冶金術説を幽山的否定している。内山芳雄は雪の浦式石鍋ではないといっている。

註8　江藤正澄「石鍋考」考古界四，1916．の中で，丸隈山古墳より出土の石鍋をさしている。

註9　筑前国守山上憶良。万葉集巻5

(892) 貧窮問答の歌一首并に短歌

前略…可麻度柔屋　火気布伎多弖受　許之伎乎波　久毛能巣須可伎弖　飯次　事毛和須礼提…後略

当時の庶民の生活様式を把握することができよう。この歌中に炊産用具の凌弊が表現されている。

註10　炊飯（姫飯）とは現在の飯のことをいう。

註11　森末義彰，菊地勇次郎「食物史」昭和28年。祝祭食品のうちで赤飯は一般におこわと称し，そのなごりである。

註12　竈は古墳時代の住居跡にも，北あるいは東側にあるが，中世になると平地式の掘立小屋で，炉あるいはいろりを中心として考えられ，竈という形式は一時衰退する。

註13　本来は湯を沸かすもので，現在では炊飯に用いるものを単に釜とよび，湯を沸かすためのものを茶釜と称している。釜が炊飯に用いられるようになったのは比較的新しい。

註14　カテメシ・ムギメシからコメノメシへすなわち（白米食）となった。

炊飯には湯とりと炊干しの二方法が行なわれていたが，湯とりはオネバをしぼり流して炊く方法で，カテメシとムギメシはこの方法で炊事しなければならなかったし，それには鍋を使用するのが最も便利で，コメノメシは炊干しの方法がとられ，これには釜が最適であった。これも変遷の一要因である。

以上炊事に関しては「日本民俗資料事典」文化庁文化財保護部監修，第一法規，1969．7を参考にした。

註15　滑石煙筒に関しては小田富士雄氏論文「西日本の石製煙筒」歴史考古学論叢Ⅱ．吉川弘文館．1969．があり，滑石材質分布地図が参考できる。

3 おわりに

ここでは，今回の発掘調査で発見された溝状遺構を問題としてみたい。

1. 溝状遺構の底面コーナーに柱穴があるということ。
2. 溝の底面に配石がみられるということ。
3. 遺物（土師器・石鍋・青磁・白磁）が溝の中より出土している。

このことにおいて溝状遺構は中世の遺構と考えられる。この時期の衣食住の住に関する庶民の生活様式は，絵巻物の中に出てくる。このころには平地に地ならしをして掘立小屋みたいなものが庶民の住居[註1]だと思われる。本遺跡のように方形の溝状遺構では，中央部の平坦地を生活面とすることが考慮されるが，溝の底から平坦地までの深さは30～40cmで溝の巾は約120cmで，である。これを周溝として周溝中に柱穴をもつ，しかしながら，溝中は明らかに自然堆積土で柱穴を維持するために，たたきしめた形跡はみられない。また溝底面の石が柱穴のまわりに存在するわけでなく，住居跡とは考えることはできないと思われる。

では，この溝状遺構は何んであろうか，半壊している以上，その全貌を推測することしかできないが，1辺6.8m×(2.4+α)mの方形周溝である。そして周溝底の各コーナーに柱穴が存在するだろう。中央方形平坦部の遺構は柱穴か，あるいは土壙の存在が考えられる。このことから報告書をあたってみると，三重県鈴鹿市東庄内字石亀の東庄内B遺跡の中央区に出土した中世火葬場址にほぼ形態が類似する。Fig. 45はその実測図をトレースしたものである。この遺跡と比較してみると

	年の神遺跡	東庄内B遺跡
1. 型	隅丸方形？	隅丸方形
2. 大きさ	6.8m×（2.4+α）m	5.8m×6.0m
3. 周溝	有 巾(120m前後 深20～30cm)	有 巾(70～80cm 深20～25cm)
4. 柱穴	各コーナー	各コーナー
5. 柱穴 大きさ 深さ	径30cm 深さ20cm 前後	径30cm深さ40cm 前後
6. 柱穴位置	周溝底面	中央平坦地
7. 中央部	不明	土壙（火葬場）
8. 出土遺物	石鍋，土師器（灯明皿？）青白磁	土師器，灯明皿，鍋・釘

以上のことから柱穴の位置が問題となる。しかし，本遺跡の遺構の核心部が削平されてしまっている以上，不明の点を補なうことができない。東庄内B遺跡においていちおう傍証することができる。筆者としては祭祉場的可能性をひめていると考えるが，即断をさけ今後にまちたい。

なお本遺跡から出土遺物は，次表のとうりである。（副島邦弘）

	土師器	石鍋	青磁	白磁
表土	1			1
暗褐色土	4			
溝状遺構	18（糸切り4）	2	1	1

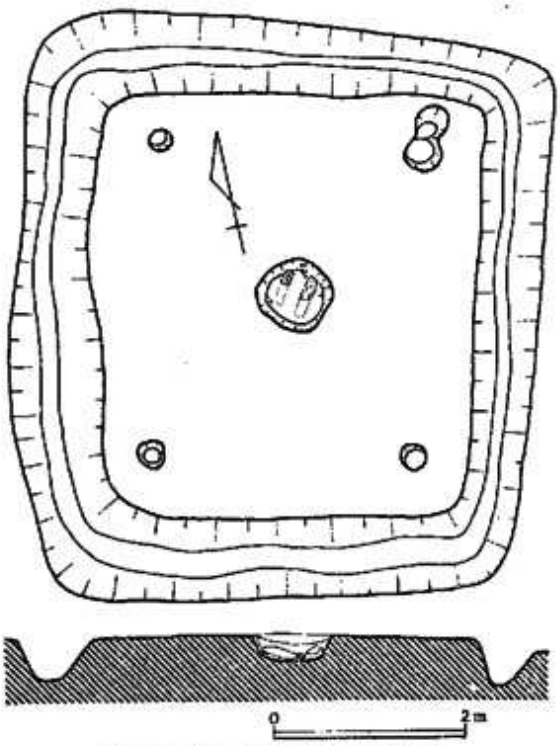


Fig45　東庄内B遺跡中世火葬場址
実測図転載（縮尺1/80）

註1　一遍聖人絵・法然上人絵伝・信貴山縁起等，角川書店，絵巻物全集。

これら絵巻物を見るとその住居も板葺がきわめて多く草葺は少ない。壁も土壁で，家の周囲には生垣や柵を立てている。また平安時代の住居跡については江戸時代に秋田県米代川のほとりで崖くずれしたところから民家があらわれた記事と写生図を菅江真澄が随筆に記載している。それをみると，屋根は草葺で，竪穴式になった家に入ったものと見える。日本の考古学Ⅶ．V－3生活用具p222　宮本常一。古代中世の生活様式についてはくわしく述べてある。

註2　谷本鋭次，東庄内B遺跡「日本道路公団，東名阪道路埋蔵文化財調査報告」1970．三重県埋蔵文化財調査報告5

PLATES

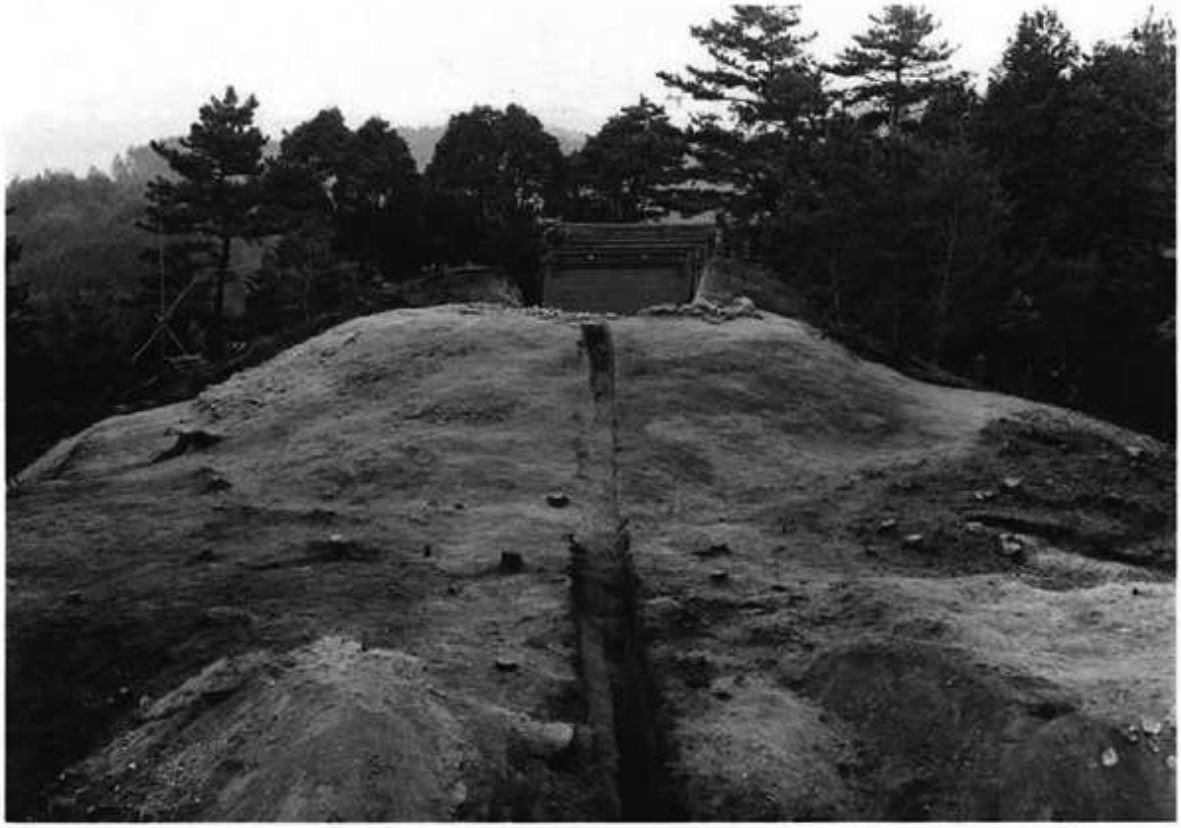
1　扇祇古墳群の立地する丘陵(北から)

2　扇祇1号墳　発掘前(東から)

3　扇祇2号墳　発掘前(西から)

1　扇祇1号墳　表土を排除した状況(東から)

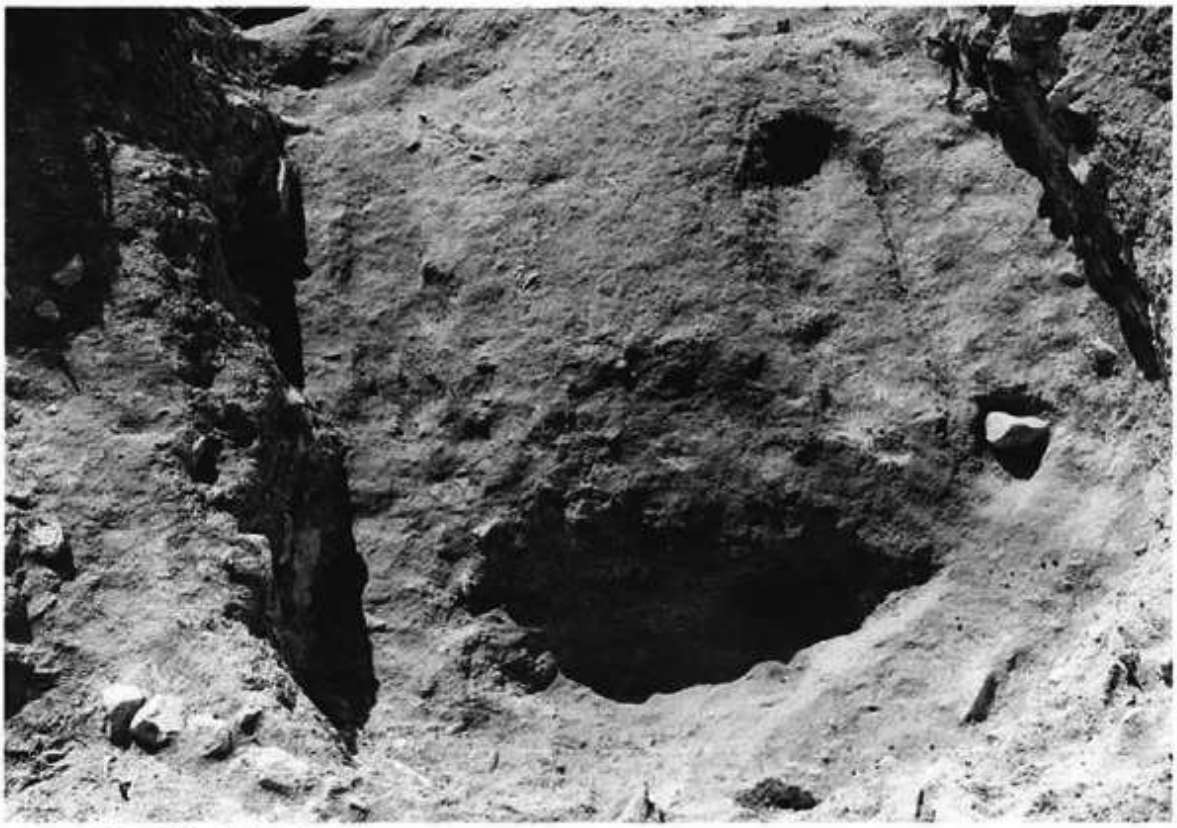
2　扇祇1号墳　同上近接(東から)



1　扇祇1号墳 石室裏籠の状況(東から)

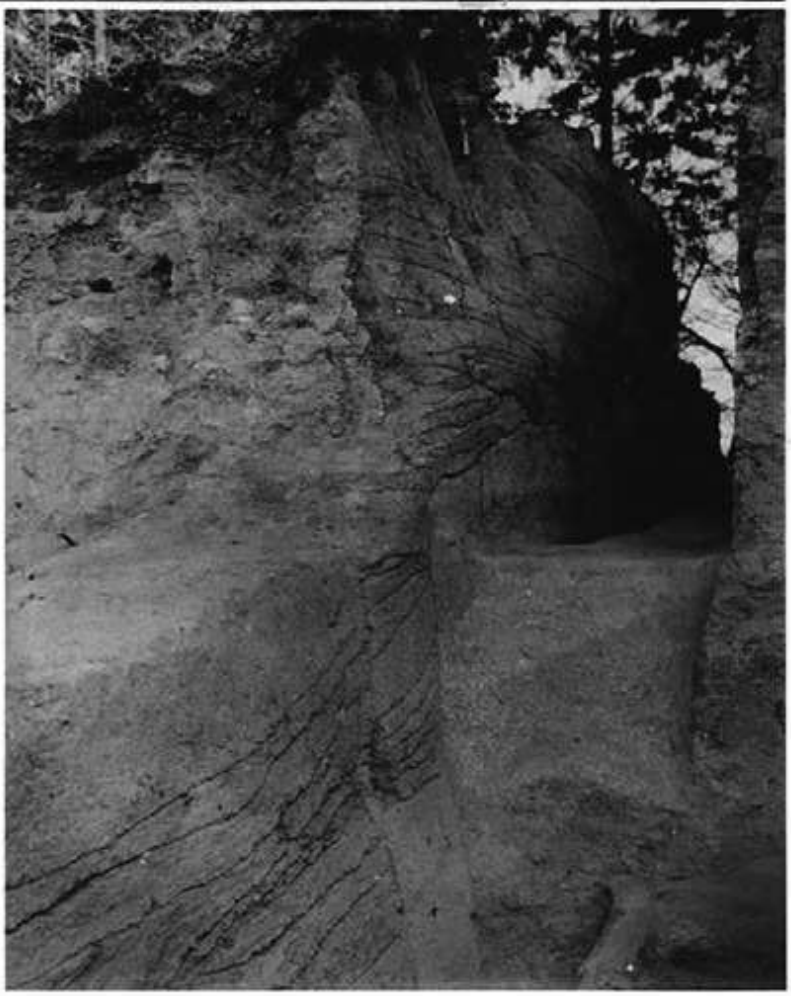
2　扇祇1号墳 同上近接(東から)

1　扇祇1号墳 石室抜き跡(西から)



2　扇祇1号墳　同上（上から）

1 扇祇2号墳
石室盗掘穴断面(西から)

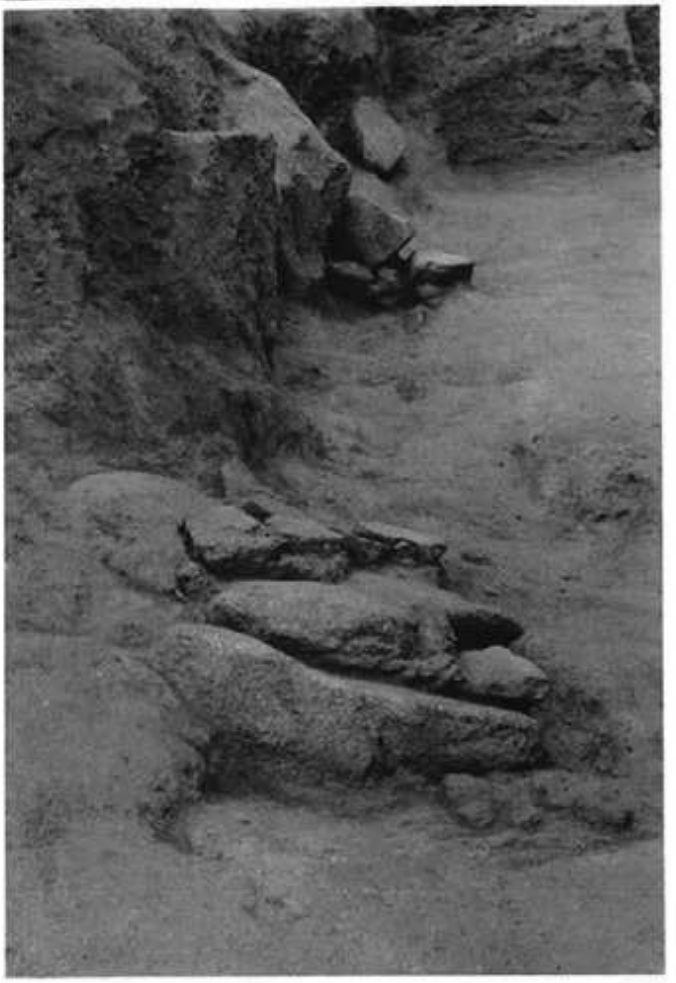


2 扇祇2号墳
地山と盛土(西南から)

1　扇祇2号墳 石室抜き跡と墳丘残存状況(西から)

2　扇祇2号墳 同上近接(西から)

1 扇祇２号墳
石室抜き跡(西から)



2 扇祇２号墳
石室裏籠残存状況
(西から)

1　扇祇2号墳 墳丘地山の残存状況(西から)

2　扇祇2号墳　同上近接(西から)

扇祇1号墳 出土須恵器

1　扇祇1号墳
出土須恵器甕

2　扇祇2号墳
出土須恵器蓋

3　左半扇祇1号墳
出土金環および鉄器
右半扇祇2号墳
出土銀環および鉄器

1　筑後川川床遺跡全影(南から)

2　筑後川川床遺跡第2トレンチ
調査状況(東から)

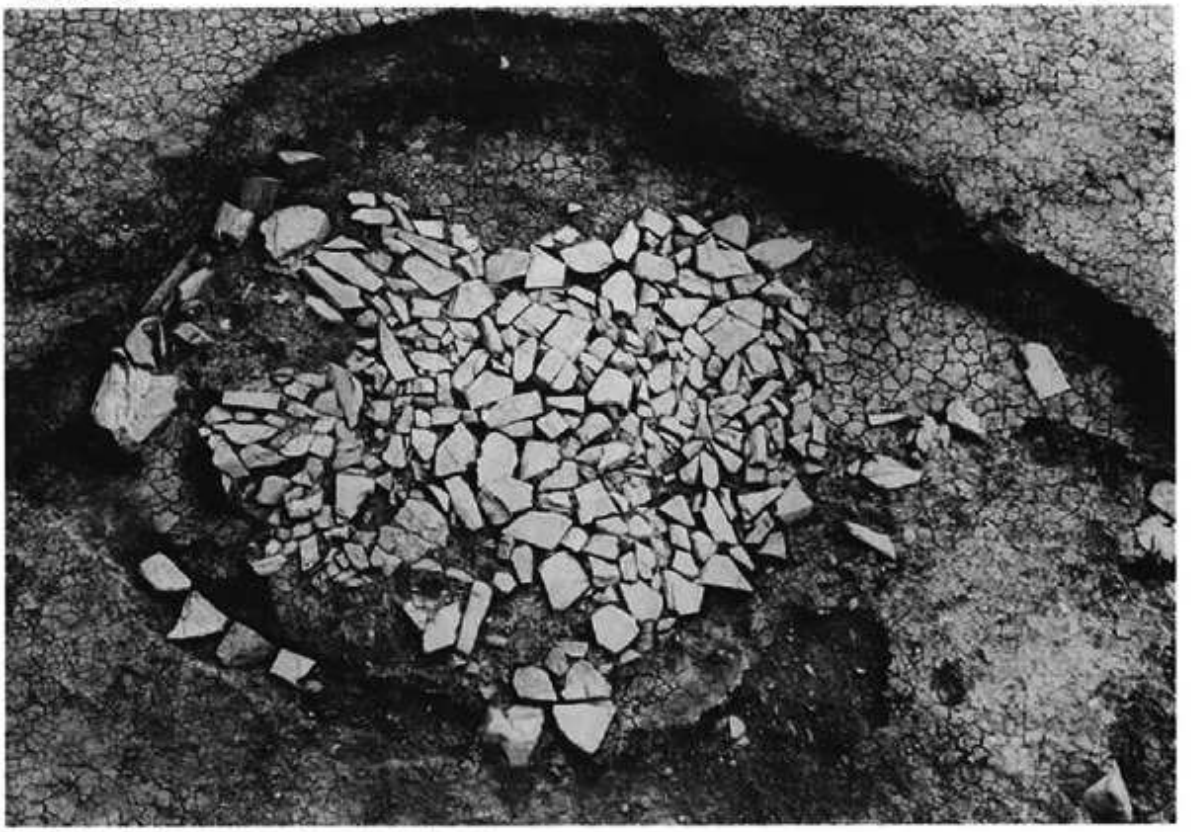
1 鰐口古墳 調査区の全望

1 鰐口古墳 全影(東から)

2 鰐口古墳 石室の状況(南から)

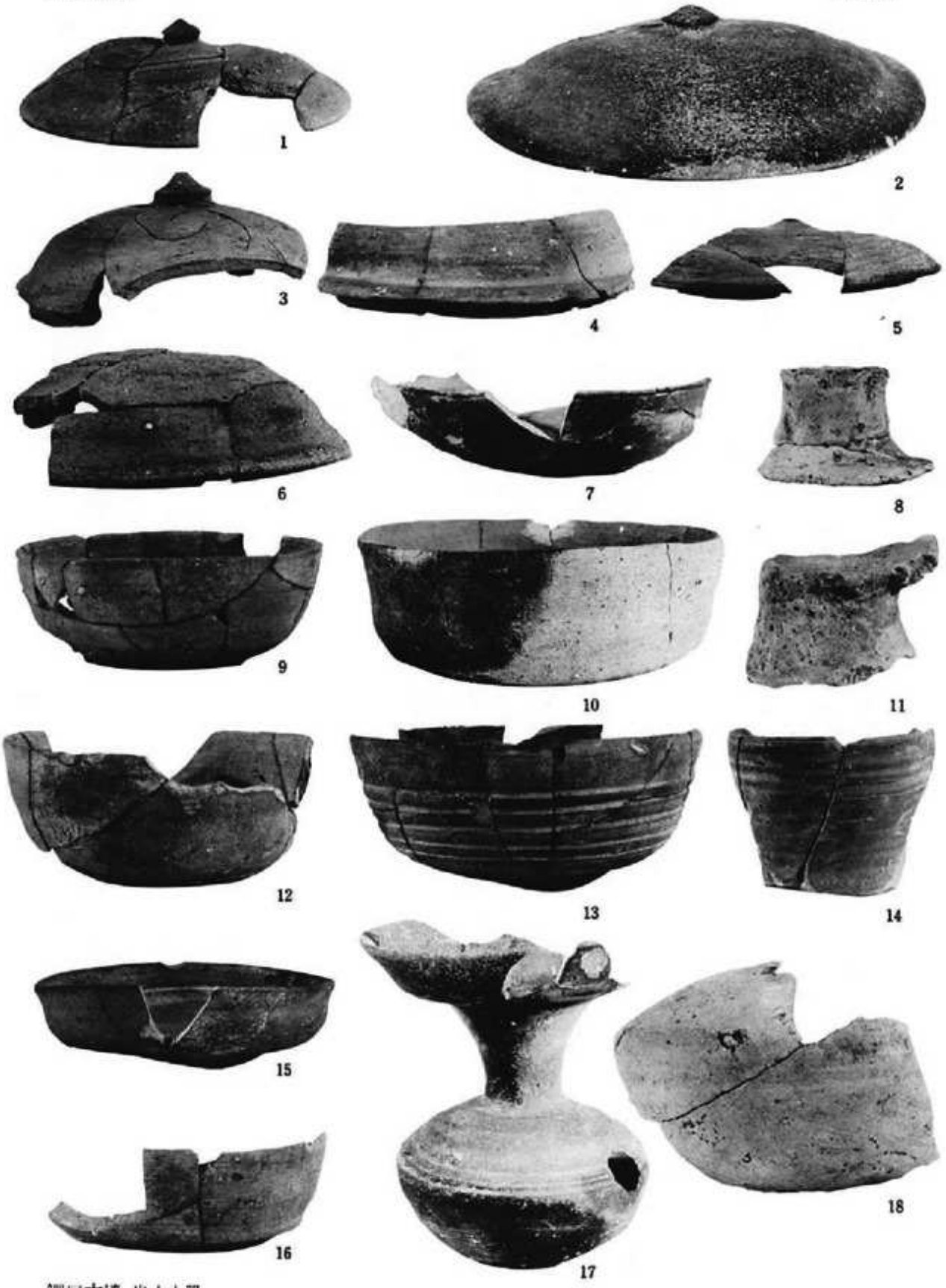
1　鰐口古墳 石室内よりの杯蓋の出土状況(南から)

2　鰐口古墳 周濠内よりの甕の出土状況



1　鰐口古墳 石室清掃後の状況(南西から)

2　鰐口古墳 北方弥生土壙



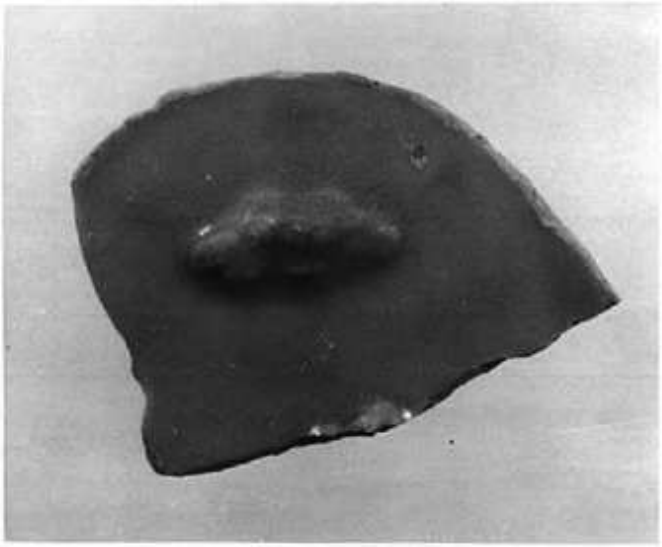
鍔口古墳 出土土器

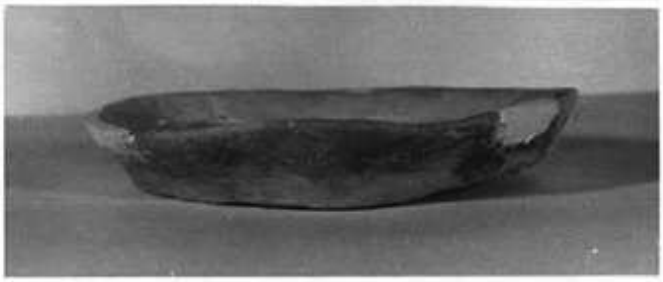
鰐口古墳 出土鉄器および石鏃(実大)

1　大地田遺跡 遠景(南から)

2　大地田遺跡 調査区全影

1 大地田遺跡 溝土層断面図(東から)





2 大地田遺跡 出土遺物
左 土錘、右上 青磁
右下 土師器皿

1　年の神遺跡 遺跡遠景(東から)

2　年の神遺跡 発掘区全景(西から)

1　年の神遺跡 溝状遺構(北から)

2　年の神遺跡 溝状遺構(西から)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　－Ⅱ－

昭和46年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷　赤坂印刷株式会社

福岡市大手門1丁目8の34